

---

# 転生者の生き様と在り方

蒼朱翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生者の生き様と在り方

### 【Nコード】

N1814N

### 【作者名】

蒼朱翠

### 【あらすじ】

「少し、休むとするか……」

ありとあらゆる世界へ転生し、生死を繰り返す転生者。彼が疲弊し、平穏を求めて転生するところから、この物語が始まります。そんな彼と、周囲の人物達との遣り取りや、出来事の一部始終をご覧下さいませ。

\*主人公はチート転生者ですが、最近のチート物にありがちな安っ

ばい展開、スカスカな文章、描写不足などは作者が嫌っている為、  
『ラノベっばく』なる上、亀更新となります。

初めにお読み下さいませ。 by 作者

当作品は、主流である本編と、主流から外れた支流である番外編によつて構成されていますので、番外編である【間章】、【短章】、【断章】などは、本編の進展には『全く関係有りません』。

何故ならば、主流たる本編に“有り得る”または“そうであつた”展開を、番外編として本編の合間に挿入しているだけからです。よつて当作品では、『番外編は本編の二次創作である』と考えて下さい。ですので、番外編は本編には影響しませんし、読み飛ばしても本編は理解出来る様になっており、何の問題も御座いけません。

もし、番外編を不快に感じる方がいれば、読み飛ばして頂いても構いません。ですが本編にチート無双やハーレム、アンチや勧善懲罰といった要素を極端にご所望の方は申し訳御座いませんが、他作品をお読み下さいませ。作者としては、サイト繋がりで『にじファン』行きをオススメしております。

また自己紹介でも書いておりますが、念の為、此处でも記述しておきます。作者は基本的に、改善点や疑問点、矛盾点への指摘や追究、誤字・脱字や改行ミスの報告以外では、感想を一切受け付けません。アンケートを実施する場合のみ例外で、レビューを書く場合は常識に沿つた上で、好きに書いて頂いて結構です。

以上を踏まえた上で、当作品をお楽しみ下さいませ。

## プロローグ（前書き）

よくある転生物で、オリ主人公が最初から最後までチート無双してハーレムを築く。……そんなありきたりに飽きてしまった人へ、この作品を奉げます。前述の通り、序盤から俺 t u e e e ! ! な展開はそれほど出ません。むしろ、この作品の主人公は自重します。が、終盤からは已む無くチートを使うかもしれません。ご了承くださいませ。

なお、全力全開のチート無双を期待していた人は、今の内にお戻り下さいませ。

追記：P C から見<sup>すす</sup>ることを前提としていますので、携帯から見るとはお勧め<sup>すす</sup>しません。

## ブローグ

転生者に求められるのは、繰り返される生死に耐えられるだけの精神力と、周囲の環境への柔軟な適応力、そして前世で得た経験や知識を活かす応用力である。

「精神力、適応力、応用力。基本はサバイバルと似ていますわね」

「体力が然程重要でないだけ、まだマシと言えるがな」

「あら、体力も重要でしょ？ もやしっ子では、満足に動けなくて退屈ですわ……」

「経験者は語る か」

「まあ、今となつては良い経験ですけれどね」

〃

ブローグ：覚醒前の回想

生きて生きて生き抜いて、そして同じ数だけ自分は死んで来た。

平穏な時代を。戦乱の時代を。変革の時代を生きては死んだ。

繰り返される生、繰り返す死。

これが同一世界の同一人物として繰り返されていれば、

回数を重ねる毎に狂っていき、絶望していた事だろう。

だが、そんな事は無かった。

世界は様々な分岐点から平行世界を無限に作り出し、またその世界の分岐点から平行世界を　といった具合に無限に続いており、まさに無尽無窮の様相を呈していた。

今度転生する先の世界もまた、その内の1つ。

自分が初めて死んだ世界の平行世界の中でも、最も分岐した先にある平行世界。

其処へ、今から転生するのである。

「さて、どんな世界が待ってる事やら……?」

## プロローグ（後書き）

改訂しました。と言うか、全体的に書き直しました。見る影は冒頭部の小話（で良いんでしょうか？）の部分くらいです。正直、作者は詩形式が苦手ですので、次は無いと思います。

オーバー！。

## 第1話（前書き）

しばらく連続投稿が続きますが、ストック分ですので更新速度が速いという訳ではありません。あしからず。なお、ルビ振りは最小限に留め、人物名などは各話ごとに最初のヤツだけやります。

また、この作品では如何・何処・何時・何故・の事・有る・無い、の様な語句を文の流れ（とでも言うんでしょうか？）に応じて使いますので、決して変換忘れとかではありません。オーバー！。

## 第1話

人は生を謳歌し、死を忌避する。転生者は終わらぬ生を持て余し、一時の死に生を感じる。そしてまた、彼等は覚醒するのである。新たな知性体に、転生することによって。

「まるで、尻尾を咥えてぐるぐる転がる蛇みたいだね？」

「ウロヴオロスと言え。ウロヴオロスと」

「そう言えば、蛇の化け物でコカトリスって居たよね？」

「それはバジリスクだ。コカトリスはでかい鶏みたいな化け物を指す」

「……そうだったっけ？」

「ああ。そうだ」

〃

「何度目かの覚醒 / 家族未満、他人以上」

思考が何処<sup>どこ</sup>までも冴え渡っていることを確認しつつ、周囲を確認する。どうやら、記憶によると此処<sup>ここ</sup>は自室らしい。体調と身体能力を把握した上で起き上がり、腕に刺さっていた点滴を引き抜き、心拍測定機を停止させた上で指先を挟んでいた測定機を外した。

「取り敢えず、歩いてみるか」

ついでに声音を確認しつつ、ドアを引き開けて、廊下へと出る。それから各部屋を覗いてみたが、どうやら家族は全員外出中らしく、現在家に居るのは自分だけのようだ。

それを確認すると2階から自室に戻り、衣装棚の中から適当な衣服を漁って着替え、置き書きを残して外へと出た。無論、玄関の鍵はちゃんと閉めたので、防犯に関しては心配無い。

「しかし、何処へ行くべきか…」

外出する前に時計で確認した時刻では、午後4時を過ぎていた。今の時間帯は道が人で混む時間帯なので、街中を歩くのはあまり気が進まない。とすると、市立図書館に向かうのが最善か？平日だから人も少なく、利用しやすいだろう。

「しばらくは飽きずに済みそうだ」

そして案の定、問題無く利用することが出来た。作ったばかりの貸し出しカードと借りた本を片手に、下校中の学生に混じって何事も無く帰宅した。

玄関ドアを開けて中に入ると、既に家族の誰かが帰宅しているらしく、靴が一足分増えていることに気付いた。奇麗に揃えて置いてある事と、靴の趣向から察するに、長女の靴だと思われる。結局、ドアの開閉音が聞こえたのか長女が居間から出て来た為、推測する

までもなかったが。

「あ、お母さん。今日は理貴<sup>りき</sup>さんと病院に行った……………」  
「ただいま」

「え…、あれ？ はえ……………あのっ……………えーとお……………」

長女は状況に思考が追いついていないらしく、その場で硬直していた。いちいち説明するのも面倒だったので、その隙に横を通り抜けて自室に

「ちょ、ちょっと待ったあああああ！！！！」

入ろうとしたところで、腕を掴まえられた。仕方が無いので、しばらく相手することにした。

「何の用だ？」

「えっと……………、取り敢えずおかえり！！」

「ああ、ただいま。それで、何の用だ？」

挨拶も出来ない馬鹿かと思っていたが、意外に賢いようだ。少しだけ、長女への評価を上方修正する。

「その……………もう大丈夫なの？」

「正確には、大丈夫になった。それだけだ」  
「あ、そうなんだ。…………お、おめでとう?」

疑問形で聞かれても困るのだが?

「…それじゃ、俺はこれで」

「あのっ!」

「今度は何だ?」

「あのね、久し振りにお話ししよっ!! ……………駄目、かな?」

覚醒前の記憶を辿ると、この家庭はかなり歪いびつなことが分かる。父親が今の母親と再婚し、父子家庭だった俺に3人の姉妹が出来た。それから同居生活を始めて僅か1ヶ月足らずで、俺は事故に遭って重傷を負ったのであった。

しかも記憶によれば、道路の真ん中で立ち竦すくんでいた女子学生を突き飛ばした代わりに、暴走トラックに撥はねられたようだ。お人好しで死に掛けるとは、なかなか滑稽こっけいな話である。

「居間で話そうか」

「そ、そうだね。此处で立ち話も何なんだし……」

こちらとしては、空白の記憶 事故直後から覚醒するまでにあった出来事 に関することだけを聞ければ良いのだが、妙に

押しの強いこの長女が一方的な会話で満足するはずが無いだろう。  
長期戦を覚悟するべきだな…。

「えっと……何から話そうかな？ うーん……」

「出来れば、俺が寝ていた間の話をして欲しい」

「あ、それもそうだね。理貴くんが事故に遭って病院に搬送された  
後」

どうやら長女の話によると、俺は緊急手術を受けたものの昏睡状態が続き、例えば目が覚めても腰から下は動かせないだろうと宣告されていたらしい。そんな俺を父親が伝手を頼って、退職した医師を専属医師として雇い、俺を自宅療養出来るようにしてくれたのだそう  
うだ。

どうも、「白一色の病室よりも、自室の方が落ち着くだろう」と配慮してくれたようだ。記憶の中の疎遠がちな父親からは想像出来ないが、それでも気にかけてくれた方だろう。

「あとね、理貴くんが助けた人が何度か来たんだよ？ その度に、青い薔薇を一輪だけ持って来るの。最後に来たのは、1週間ぐらい前……だったかな？」

ブルーローズ  
青い薔薇、か……。確か、自室の花瓶に飾られていた様な気がする。

「黒の長髪で、綺麗な人なんだけど……少しやつれていて、元気

が無さそうだった。多分、罪悪感で食事が喉を通らないんだと思う……」

愚かだな。

「愚かだな」

「……何で、そう思うの？」

「罪悪感を抱いたところで、そいつに出来ることは祈りと見舞いの2つだけだ。食事を摂らない必要性は全く無い」

「んと………現実的には、そうなんだけどね……」

むしろ、罪悪感を使命感に替えて医者を目指すなど、前向きに生きて欲しいものだ。

「あ、そろそろ帰って来るかな？」

「誰が？」

「お母さん。いつもなら私と入れ違いで買い物に行くんだけど、今日は用事で私が遅れちゃったから……」

「道理で居なかった訳か……」

「ごめんなさい」

「謝るくらいなら、お粥の1つでも作って欲しいのだが？」

点滴のお陰で活動には支障が無いものの、腹の中に何か収まっていないと気がすまない。要するに、質はあっても量が足りないと言ったところだ。お粥を選んだ理由は、病人食でもあり、作るのに然

程時間が掛からないからである。

「それじゃあ、何かリクエストはある？」

「何がある？」

「卵粥に梅<sup>うめ</sup>鯉<sup>かつお</sup>粥に茸<sup>きのこ</sup>粥に塩粥くらいかな？」

4 択か……。おそらく、卵粥ならハズレは無いはずだ。……多分。

「卵粥で頼む」

「分かった。作るまでの間、少し待っていてね？」

「ああ」

そして数十分後。想像以上の卵粥が、俺の目の前にあった。

「何だこれは？」

「卵粥だよ？」

「お前、料理を<sup>な</sup>嘗めているだろ？」

普通、卵粥と聞けば溶<sup>と</sup>き卵がお粥に入っているモノを想像するが、この長女が作った卵粥は、お粥の中に卵を3個入れただけの卵粥である。既にお粥の熱で、半熟卵のようになっていた。

「あ、それにお酒と砂糖も少し入れているんだよ？」

「……何時から卵酒をお粥に入れて、卵粥と称するようになったんだこの国は？」

「ブランドーじゃないから卵酒じゃないもん！」

そこで何処どこぞの突撃魔女ストライクウィッチみたいな台詞せりふを吐かれても困る。

「むしろ、それ以前の問題だ。これはおおそ万人が考え得る卵粥ではない。普通の卵粥は、お粥の中で溶き卵が攪拌かくはんされており、無理なく少量で、高カロリーを摂取出来る様になっている」

ちなみに正しい卵酒の作り方は、溶き卵に砂糖と酒を混ぜて作る。酒は、出来れば温めたものが好ましい。

「うつ………冷めない内に食べてね？」

……話を戻したか。

「まあ良い。作ってくれと頼んだのは他でもない自分だ。責任を持つて食べるでしょう」

「あのー………無理そうだったら、残しても良いからね？」

「無理そうだったらそうする。頂きます」

だが予想に反して、見た目や材料はともかく味は至って普通だっ

た。酒のアルコール分は熱でほとんど飛んでいるし、卵と砂糖も甘いオムレツがお粥の中に入っていると思えば、食べられないことはない。

しかも、卵殻の破片が一切入っていないのだ。少なくとも、基本技術に関しては問題無い。有るとすれば、それは料理に関する知識の方だろう。

「ご馳走様。もう少し、料理の腕を磨くと良い」

「むゝ……。精進します」

「ああ、精々頑張れ」

しかし歴代の姉と比べてみれば、比較的に食べた方だと言わざるを得ない。何を思ったのか米を磨り潰してスープにした姉や、マムシやスポンの血を入れた真っ赤な粥を作った姉がいたりした。それと比べればこれくらいは

「……………今日の理貴くん、なんだか変だね？」

「何処どこがだ？」

「優しい…………？ いや、格好良いのかな？」

「…そのまま呆ほうけている、駄目姉」

「ひどいつ?!」

泣き崩れるふりをする長女を無視して自室へ戻り、図書館から借りた本を読むことにした。正直、これ以上他人と話すのは疲れるからだ。特に、覚醒前の自分を知っている人と話すのが疲れる。

何故なぜなら、向こうは覚醒前の自分に話し掛けているつもりなのだ

が、中身は覚醒後の自分なのだ。つまり、一番身近な存在でありながら他人という、若干居心地の悪い状況が出来上がる。

よって、まずは状況の改善が優先となる。家族に始まり、親友や学友と徐々に範囲を広げる必要がある。しかし、この家族は自分を含め6人家族。仕事の都合で年中不在気味な父親を除けば、実に4人も相手に対処しなくてはならない。

「……………面倒だな」

少しだけ、再婚した父親を恨んだ。

## 第1話（後書き）

主人公の名前は『理責<sup>りき</sup>』と判明しました。駄目姉こと長女の名前は、もうしばらく後になってから判明します。ところで、文の長さはこれで適当でしょうか？ 一応、空白を含めて作文用紙10枚分くらいはあるんですけどね…。

引き続き、当作品お楽しみ下さい。オーバー！

## 第2話（前書き）

「連続投稿3回目。かと言って別段、執筆速度が速いという訳でh  
(ry

\* 当作品はよく改訂しますが、行間の調整や表現の変更がほとんどなので、あまり見直す必要は無いと思われます。必要な場合は告知しますので、ご心配なさらず。ちなみに文中の「俺」や「自分」といった一人称は雰囲気に応じて使っていますので、統一されていません。そこはご了承ください。

## 第2話

考察とは、経験や知識を活かし、それまでに得た情報を元手に納得のいく答えを導き出す行為である。その為、納得するのが最大の目的であり、理解するのはただの手段でしかあらず、必ずしも理解する必要は無い。何故<sup>なぜ</sup>ならば、理解することが常に正しいとは限らないからだ。

「理解しているが納得出来ない。納得しているが理解出来ない。君は、どっちが良いと思うかい？」

「後者だ。割り切った方が、思考を停滞させなくて済むからな」

「なるほど…。しかし、意外だったなあ。君はてつきり前者かと思っていたよ」

「迷いは隙を生むからな。なるべく、理解も納得も出来る様に努力はしているさ……」

「まあ、その………ご愁傷様。いや、『頑張つて』…かな？」

「フツ、女性に理想像は抱かない様にしていたんだがな………」

（ ）  
「<sup>こんだて</sup>献立考察 / 世界考察」

コンコン……ガチャ

「何の用だ？」

「今、何しているのかなあ？　って見に来たの」

「見ての通り読書だ。分かったのなら静かにするか部屋から出てくれ。俺としては後者をお勧めする」

「む。私のこと、嫌い？」

ふん。その切り返しの仕方は既に経験済みだ。故に、対処可能だ。

「無断入室して嫌われないとでも？」

「……ごめんなさい」

さて、馬鹿姉は鎮圧した。これで心置きなく読書を

「ただいま。霞凜<sup>かりん</sup>、帰っている？」

「あ、お母さんお帰りなさい！　ほら、理貴<sup>りき</sup>くんもお出迎えに行こうよ！」

「待て。腕を引っ張るな」

「早く早くう」

決めた。これから自室に居る間は内鍵を掛けるとしよう。主に馬鹿姉対策として。

「お帰り。母さん」

覚醒後初めて見た母親は、記憶の中と違って少し疲れている様に見えた。目元に薄い隈が出来ており、皮膚も髪も艶を失っている様な気がした。

「え……………？ あっ……………」  
「お母さんっ？！ お母さん！！」

急に意識を失って倒れ込む母親を長女が支えるも、よろめいてその場に座り込んでしまった。やはり、脱力した人を支えるには筋力が足りなかったようだ。

「極度の疲労だな。静養すればすぐに治るだろう」

疲労の原因は、おそらく俺への介護での疲労または心労だろう。そして起きている俺を見て、緊張の糸が切れたと言ったところか。気絶した母親の顔をよくよく見れば、目元の隈は化粧で上手く誤魔化しており、実際はもつと濃いことが予想出来る。女性の忍耐強さには度々感心させられるが、限度を過ぎたりすることまでは感心出来ない。

「そうなの……………」  
「そうだ。ベッドに運ぶぞ」  
「えっと、どっちを持てば良い？」  
「いや、先行してドアを開けるだけで良い。出来れば、俺の専属医師に連絡を入れてくれると助かる」

「うん、分かった!!」

母親の靴を脱がしてから仰向けにし、脇の下から腕を入れ、胸の下で腕を組む。そしてそのまま持ち上げ、後ろ向きに引き摺って運ぶ。本当なら背負って運びたいのだが、完全に脱力した人間を背負うには、今の体躯では少々怪しまれかねないと判断した為、このような運び方を採用した。

そして運び終わってから数分後、長女が俺の専属医師らしき人を引き連れ、部屋に入ってきた。医師は俺を見て驚いたようだったが、すぐに母親の脈や心音を診察し始めた。それからカルテを書き上げ、ついでとばかりに俺も診察してから帰って行った。ちなみに、どちらも「要静養」の診断結果を貰った。

「取り敢えず、これで一安心だね?」

「いや、重大な問題が1つ残っている。……………夕食は誰が作るんだ?」

「あ……………うーんと……………」

今更だが覚醒前の記憶を振り返ってみると、長女の料理スキルは微妙であり、次女は料理出来るものの甘味系限定で、三女は本を読むこと以外に興味が無いらしい。父親は完璧超人だが、仕事が忙しいので家事を任せる訳にも行かない。

だからと言って家政婦を雇うのも、防犯上の点であまり好ましくない。

よって、消去法で自分が残ると言う訳だ。転生者という特性上、

家事に関しては常人の域を既に超越している。しかし、今まで昏睡状態だった自分がいきなりプロ顔負けの料理を作れば、確実に怪しまれることは間違い無い。

おまけに、下半身不随と診断されたにも関わらず回復しているの  
で、これ以上疑いの目を向けられたくないのが心情だ。

そこで、料理スキルが微妙な長女を使うことで不審の目を誤魔化そうと思う。インスタントや出前は、最終手段として封印しておく。我が家が富裕層とはいえ、金が掛かり過ぎるのは余り好ましくない。

「仕方が無い。俺達で料理を作るとしよう」

「ええっ！？ 理貴くん料理出来るの！！？」

「……………それ、自分で言っていて悲しくないのか？」

「うっうう……………どーせ、私は駄目姉ですよ……………」

勝手に自爆した馬鹿姉は無視し、取り敢えず先程母親が買ってきた食材から、今日の夕食の献立を推測してみることにする。

玉ねぎ

ポークの缶詰

人参

ジャガイモ

カレールウ（中辛）

ブロッコリー

ビターチョコレート

ホイップクリーム

..... 何だ、この作意を感じる食材選びは？

「理貴くん？ 如何かしたの？」

カレーを作るべきかカレースープを作るべきか……。それにもし、カレーを作るにしても、ビターチョコレートとホイップクリームは如何するべきか？ 前者はカレーにコクを与え、後者はカレーの辛味を抑えてまろやかさを与える。

だがしかし、これらは何れもお菓子作りの材料としても使え、母親が次女のお菓子作り用の材料として買って来たとなれば、迂闊にカレーの材料には使えない。

..... まあ、また買えば済むだろう。多分。

「いや、何でもない。さつさとカレーを作ろうか」

まず最初に、玉ねぎの皮を剥いて適当に刻む。そして長女が大鍋で玉ねぎを炒めている間に人参、ジャガイモの皮を剥いて乱切りにする。ブロッコリーは房を切り落とし、ポークは拍子切りにして準備しておく。

やがて玉ねぎが飴色に変わった頃を見計らって、残りの野菜とポ

ークを順次投入。此処で、長女が音を上げ始める。

「理貴くん、材料が多過ぎて上手く混ぜられないよぉ……」

「ふん。料理に貢献出来るだけ、まだ有り難いと思え」

「うつつ……」

長女は卵粥で見た駄目っぷりを挽回しようと思ったのか、最初こそは頑張ろうとしていた。しかし、包丁の扱いにおいては圧倒的な経験と技量の差があり、なおかつ今回は時間が無いので辞退して貰った。

そんな彼女に残された仕事と言えば、炒め役か味見役程度だったので、炒め役を任せることにしたのだった。野菜は水分が抜けるまで時間が掛かる上にかさばるので、混ぜづらいのは仕方が無いことである。

「……そろそろ頃合だな」

水と一緒に、調味棚にあったコンソメを3袋くらい投入し、大鍋の中身を掻き混ぜる。ちなみに馬鹿姉は先程腕をつつたらしく、床の上で悶絶している。力任せに掻き混ぜれば、そうなって当然である。

「そしてルウを入れる」

カレールウが水に溶け、野菜と混じってとろみが出て来たところで、チヨコとクリームで味を調整してから、コンロの火を消した。

「出来たの？」

「ああ、完成した」

「……」

「……」

「……」

「……」

「じい〜」

「……………味見するか？」

「もちろんっ！！」

小皿にカレーを少量入れ、スプーンを添えて長女に手渡す。長女は右手で皿を受け取るうとしたが、びくつと震わせた後、左手を出して皿を受け取った。……………如何やら、つつた利き手がまだ痛むらしい。

そして皿を机に置き、左手でスプーンの柄<sup>え</sup>を握ってカレーをすくい、口の中へと運ぶ。

「あつ、これ美味しいっ！！？」

「有り合わせにしては…、だがな」

本当ならルウの元であるスパイスの調合からしたいのだが、それでは時間が掛かるし、何より自分好みのカレーしか作れない。今回の様な場合、大衆向けのカレールウがとても役に立つ。

「それは謙遜のし過ぎだよ」

「事実だ。……ところで、次女と三女は何時ぐらいに帰って来る？」

「今日は7時ぐらい、かな？」

壁に掛かっている時計を見ると、現在時刻は6時23分。今から急いで風呂に入れば帰宅までには間に合うだろうが、最悪脱衣所で鉢合わせという展開になりかねないので、今は諦めることにする。

「読書でもするか……」

キッチンから自室へ戻り、しっかりと内鍵を掛けてから椅子に腰掛ける。そして本を手に取り、栞を挟んでいた所から再び読み始める。

「しかし、本当にこの世界は妙だ……」

金髪や茶髪はまだ良い。だが、青髪は如何か？ それに緑髪は？ 目が赤と青のオッドアイ（虹彩異色症）は如何だろうか？

この世界は明らかに、色素を無視していると言わざるを得ない。今の自分の容姿でさえ、黒髪に紫よりの青目なのだ。普通なら何らかの目の障害が出てモカシク無いはずなのだが、不思議なことにまったく問題が無い。だからこそ、妙なのだ。

大抵、髪や目の色が特異な世界はファンタジー系統（容姿によって種族差別を発生させ、対立させる為）なのだが、かといってこの世界に剣や魔法が常識的に存在する訳でもなく、亜人が存在こそすれ、戦争が起こっている訳でもない。むしろ亜人共々、仲良く暮らしている。

そう、『仲良く暮らしている。』　とすると、大変認めたくないがこの世界はつまり、あの系統に含まれている可能性が高く、大変遺憾ながらそれを念頭に動かなければならない。何故ならば、<sup>いかん</sup>一歩間違えば取り返しのない方へ行きかねないからだ。

おそらくこの世界は

「異種族交流型恋愛系統の世界……………」

正直、そうだとするとかなり面倒臭いことになる。何故なら、恋愛系統特有の以下のシチュエーションが、極めて高確率で起こり得るからだ。

曲がり角で女性とぶつかる。  
空から女性が降って来る。

外国から交換留学生が来る。

義理姉妹が恋愛感情を抱く。

生徒会長がやたらとパシリに使いたがる。

先生が合法ロリ。

電波系の女性が絡んで来る。

靴箱にラブレターが入っている。

目の前でスカートがめくれる。

突然、恋人の振りを要求される。

… e t c .

「尤も、自分がその傍観者である可能性も否めないが…」

どちらにせよ、身構えておけばそう大事には至らないだろう。…  
………多分、おそらく。

「読破。……やはり、どの世界でも本は便利だな」

ちなみに本の題名は、『亜人の特徴及び注意事項』。内容は題名の通りで、亜人の特徴と対応する際の注意事項が書かれている。覚醒前の記憶にはそういった細かい知識が無かったので、この際きちんと学ぶことにしたのだった。  
知らずに下手な対応をするよりは、知って下手に対応する方がよっぽど良い。

「さて、そろそろ時間か？」

時計を見ると、あと数分で7時になりそうだった。馬鹿姉の言う通りなら、もう少しで次女と三女が帰って来るはずだ。

「面倒なことにならなければ良いが……」

先程出した考察結果を考慮しつつ、居間に向かうのであった。

## 第2話（後書き）

「これ、何てエロゲ？」と言って頂ければ幸いです。しかし、主人公は文中で述べている様に、もしそうだったら面倒だと思っています。それに、フラグやイベントばかりという展開も作者は若干苦手としておりますので、それほど露骨には出て来ません。

どちらかと言うと、R15止まりのグロ描写の方が得意です。（キリッ

追記：駄目姉の名前は『霞凜<sup>かりん</sup>』と判明。母親は出するか不明。次女と三女は次回に出す。

### 第3話（前書き）

当作品では、同じ語句のルビ振りが面倒臭くなって、振られていない場合があります。それと、たまにネタが混じります。が、そこは寛容な心でスルーしてくれるとありがたいです。

ところで今更ですが、当作品には作者による独自解釈などが多数含まれます。冒頭部分などが特にそうなのですが、あくまで”独自”解釈ですので、それに対しての意見はしないで下さい。何故<sup>なぜ</sup>ならば、解釈に「正しい」や「間違い」は無いと思っていますので。

### 第3話

家族。それは特別な団体であり、団員の種族を問わない稀有な構成である。それが例え人と獣であろうが、天使と悪魔だろうが、人と物であろうが問題無い。互いに協力し、信頼し続ける限り、その構成を家族と呼ぶことが出来る。

「家族……………きゃっ／＼／」

「……………少しは桃色思考を自重しろ。この変態娘が」

「はえ？ やだなあ、私のはただの純愛ですよ。じゅ・ん・あ・い」

「お前の主張は、狂愛<sup>ヤンデレ</sup>すら正当化する様な気がして如何<sup>いかに</sup>も認めたくない」

「絶対依存は純粋な支配欲から来る愛なのです。歪みなど、1つたりとしてありませんよあ？」

「それ以前に、お前の判断基準が常人のそれとズレている時点で、その理論は成立しないと思うのだが如何<sup>いかに</sup>に？」

（

「形骸<sup>けいがい</sup>的な家族未満 / 無関係な他人以上」

「ただいま」

「た、ただいま…」

「お帰り」

「お帰り」

「.....」

「.....」

「.....」

「何故、駄目姉まで黙る？」

「うつつうつつ.....優しさを下さい」

駄目姉を無視して、再び手元のルービックキューブを弄る。何故か自室にあったので何気なく持って来てやっていたのだが、意外と時間が潰せた。この玩具の単純さが故に、無心になれたのだろう。

「.....お前、もう治ったの？」

「見ての通り、健康体そのものだ」

「そう。.....良かったわね」

「ああ」

片手でルービックキューブの面を変えつつ、次女にそう答える。ちなみに今は色を揃えるのではなく、同じ模様を全部違う色で揃えることに挑戦している。これが結構難しく、未来位置を予想しながらやらないと何時まで経っても完成しない。

「本当に、大丈夫なんですか...？」

次女の次に、戸惑いがちに話し掛けて来たのは三女だった。まあ、

怪我人がいきなり回復すれば戸惑うのは当然の反応だな。長女も数時間前までは、そんな感じだった。

「その心配は、母親にしてやるんだな」

「え…？」

「まさか、倒れたの？」

次女が、強い口調で訊ねて来る。口にくそ出さないが、次女は「お前の所為だ」と言いたいげであった。確かに母親は、俺の介護をしてあなっただのか、それとも心労であなっただのかもしれない。

しかし、<sup>あ</sup>敢えて言いたい。「俺が何をしたのか？」と。

仮に、俺の事故が疲労の間接的な原因であつたとしても、直接的原因では無い。母親が要らぬ責任を感じ、そうあるべきという常識に捕らわれた結果が、今回の倒れた原因ではないのだろうか？

無論、心配してくれた事には感謝する。だが、倒れた事とは別だ。

「要静養だそうだ。今はベッドに寝かせている」

「そう……」

そのまま次女は静かに部屋を出て行った。三女も、慌ててその後

に続く。後に残ったのは、俺と空気の長女だけであった。

「ねえ…、何か失礼なことを考えなかった？」

「……さて、カレーを食べるとしよう」

「絶対考えていたよね？」

「ところで、空気姉も食べるか？」

「無視された上に、さり気無く名称が増えているっ？！..」

からかいはそのようにして、<sup>あらかじめ</sup>予め炊飯器で炊いていた御飯を皿に盛り、良い感じに冷めたカレーを上からかける。人によっては皿の中央から左に御飯、右にカレーといった感じに盛る人も居るらしいが、自分はそこまで拘<sup>こだわ</sup>る方ではない。

それに対して、空気姉もとい駄目姉はと言うと

「ふんふんふ、ふん」

「何も言っまい…」

「理貴くん、今何か言った？」

「……………」

「うつつ…、如何<sup>いかに</sup>してそんな可哀相な子を見る様な目付きなの？」

「事実だからだ。とうとう幻聴が聞こえるまで駄目になるとは…………」

「わ、私っ、駄目姉じゃないもんっ！！」

「人、それを自爆と言う」

「あ……………」

円形に御飯を盛って、その中央にカレーを入れるという奇抜な入れ方をしている。普通は逆の様な気もするが、御飯とカレーをぐちゃぐちゃに混ぜて食べる人よりは、よっぽどマシなのかもしれない。

それからしばらくして、カレーの匂いに釣られたのか次女と三女が戻って来た。次女は陰悪な表情で、三女は困惑した表情を浮かべながら。そして次女は開口一番、こう言った。

「お母さんが倒れたのに、如何してそんなに平然としていられる訳！！？」

どうやら次女は、倒れた母親をそっちのけで食事をしているのが気に食わないらしい。

「倒れたからこそ、平然としているんだ」

「私もほぼ同じ理由…かな？」

次女は、さも美味しそうにカレーを咀嚼する長女に非難の視線を送った後、更に語気を荒上げて俺に問い迫る。

「だから、如何してっ！？」

「それでは、お前は母親に何をしてやれる？ 医者の代わりが出来るのか？ 看護師の代わりが出来るのか？ それを今すぐ言ってみろ」

感情で動いて最善手が打てるほど、現実易しくない。医療の知識も、看護の心得も知らない一般人がしてやれる事など、付き添うか祈るだけしかない。

「それは……………」

「何も言えない。つまりは何も出来ないと言う事だ」

「でも…、傍<sup>そば</sup>に居ることぐらいは出来ます！」

押された次女に代わって、三女が強く前に出て来る。性格的に三女は最後まで黙っているかと思っていたが、意外に肝はしっかりしているようだ。

「それも一理ある。だが、結局はそれだけという事だ。それに母親が倒れた今、俺は“日常を維持する義務”が母親から俺達に委譲<sup>いじよう</sup>されたと思っている。だからこそ、俺は“母親の欠けた日常”を維持している。カレーを作ったのも、その義務の一環だ」

2人が沈黙したのを見計らって、長女に「お前も何か話せ」と目配せする。長女はその意図を正しく理解したらしく、口を開いた。

「私は、理貴くんのように深くは考えていないけど、私達はお母さんの有<sup>あ</sup>り難<sup>がた</sup>さを考え直すべきだと思うな。今日ね、理貴くんとカレーを作ったんだけど、すっごく大変だったの。でもそれだと、何時<sup>いつ</sup>もカレーを1人で作っていたお母さんは如何<sup>どう</sup>だったのかな？」

「……………」

「……………」

「だからね、私達はそんなお母さんを少しでも支えられる様に、しっかりしなくちゃいけないと思うの。食事を摂ることも、睡眠を取

ることも含めてね。じゃないと、今度は私達まで倒れる番になっちゃうから……」

妙にしんみりして来た頃を見計らって、話を打ち切る為に話題転換を試みることにした。これ以上長々と話したところで、解決案など出るはずが無いのだから。もし有るとすれば、精々が対応案くらいモノだろう。

「　　と言う訳で、お前らもカレーを食べたら如何だ？　我ながら普通に美味いと思うのだが？」

「そうそう！　それにね、隠し味にビターチョコレートとホイップクリームも入っているんだよ？　変に思うかもしれないけど、これがまた美味しいのっ！！」

美味しさを音で伝えたいのか、衝動的に机をパンパンと叩き出す駄目姉を物理的に黙らせる（主に暴力的な意味合いで）間、次女が長女の発言に絶句し、三女がやや引いていた。

「え……………？」

「それって、カレーとしては如何かと……………」

次女と三女の反応を見る限り、やはりビターチョコとホイップはお菓子の材料だったようだ。確か、あと半分ずつくらいは残っていたはずだが、それでもお菓子作りには足りないかと思われる。

「これだから無知は困る。前者はコクを与え、後者は辛味を抑えて  
まろやかさを与える。そもそも、チヨコレートの原材料である力力  
才は香辛料の1つだぞ？」

「無知……………」

何故<sup>なぜ</sup>かえらくへこまれた。後で長女に確認して知った事だが、三  
女はかなりの読書家であるが故<sup>ゆえ</sup>に、雑学にはある程度の自信があつ  
たらしい。こちらにとっては、至極<sup>とう</sup>如何でも良いことだが。

そして次女は、言わずもがな。

「私のケーキ……………」

「悪かったとは思っている。…だが、後悔はしていない」

「カレーに失礼だからな」と思いつつ、次女と三女の前にカレー  
を入れた皿を置き、席に着いて食事を再開する。

「……………美味<sup>おい</sup>しくなかったら、許さない  
わよ？」

「不味<sup>まず</sup>くはない。それだけは確実に言える」

元々、日本のカレーは美味<sup>おい</sup>しく出来る様に作られている。水の分  
量を間違えたり、食材が傷んでいたり、カレーを煮る際に焦がした

りしない限り、絶対に不味くはならないのだ。ただし、食べる人の口に合うか如何かまでは保証出来ないが…。

「感想は？」

「不味くは無いわ………これで満足？」

「ああ、まずまずだ」

如何やら満足して頂けたようだ。三女は特に何も言わなかったが、しっかり食べていたので不満は無いと思われる。それから食後に交替で風呂に入った後、俺は自室で1人、くつろいでいた。勿論、内鍵は掛けている。

「今日は、色々あり過ぎた……」

当然のことながら、転生後は大抵慌しい。環境を把握し、情報を収集し、環境を作り変え、情報を纏める必要がある。ここ数ヶ月間は、同じ様な作業の繰り返しとなるだろうが、初日からこれでは、如何しても先が思いやられてしまう。

そもそも、今回は出だしが悪かった様に思える。転生前のこの身体は2ヶ月前から昏睡状態であり、かつ下半身不随だった。それにこの身体の父親が外交官という職業柄、年中不在気味で、今の母親と姉妹は、再婚してからほんの1ヶ月を過ごした仲にしか過ぎない。

つまり何が言いたいのかと言うと、転生者と言えども此処は多少居心地が悪いのだ。お互いの関係も未だ手探り状態で、特に次女と

三女との関係は有って無きに等しい。それに男が1人だけという状況が、更に肩身を狭くしている。

よって、此処<sup>ここ</sup>を拠点として行動するには、どうも気が進まないのである。

「だがそれも、しばらくは我慢するとしよう」

昔の人も、『住めば都』と言つ言葉を残しているくらいだ。今回もまた、その言葉に倣<sup>なら</sup>ってみようかと思う。

「さて、方針は決まった。……さつさと寝るか」

無駄な時間は寝て過ごす。それが、繰り返される転生の中で身に付けた、彼なりの時間潰しであった。

### 第3話（後書き）

今日の迷言「シリアスは続かない。それが俺ジナルクオリティー」

俺＋オリジナルクオリティー〓俺<sup>オレ</sup>ジナルクオリティー

まずは謝罪を。すみません。次女と三女の名前出て来ませんでした。何時<sup>いつ</sup>かは出します。………多分。

今回は間章となります。長女こと霞凜<sup>かりん</sup>が主人公です。

【間章】 第1話（前書き）

何時もより、短ッ！！？ すみません。主人公以外の視点を  
しかも長女視点から書くのは、意外とレベルが高過ぎました。作  
者的にはさばさばとしたキャラの方が書き易いので、どうも長女と  
は波長（？）が合いません…。が、そこは『愛』で克服していき  
たいと思います。

長さ的には、作文用紙8枚弱です。

## 【間章】 第1話

事故に遭うまでの理貴くんは何処か自信なさげで、会話も一言や二言で終わる事がほとんどでした。でも最近の理貴くんは、急に大人びた表情や発言をする様になってかつこ良いのですが、何故か私に対しては意地悪です。      なので、姉の尊厳を取り戻す為、今日もお母さんと料理を作って理貴くんに試食して貰っています。

「そのサラダ、私が作ったんだよ？ 如何、かな……？」

「包丁をよく研ぐ様に。トマトが切り潰されて見栄えが悪い」

「うなあ〜……」

「それと、茹で卵の輪切り。黄身の外側が黒くなっているだろう？

これは茹で過ぎの証拠だ。コンロの火力を落とすか、茹で時間を短くしてみると良い」

「にゃ〜……」

「……………猫かお前は？」

〃

間章第1話：「私の空白期間 / 私が頑張る3つのこと」

「はあー……………。何時になったら、理貴くんに認めてもらえるのかな？……？」

最近、理貴くんと話せて嬉しいのですが、それに反比例するかの如くブルーな気持ちです。何故ならば

名前で呼んでくれないからです。

「はあ……………」

主に、「駄目姉」とか「馬鹿姉」とか…。無論、妹達に対しても例外ではありませんが、「次女」や「三女」と呼ばれるだけまだマシの様な気がします。

「むう、如何したら名前で呼んでくれるのかな？…？」

「駄目姉」や「馬鹿姉」ではない所を認めて貰えば、少なくとも「長女」とは呼んでくれるはず…。現に、理貴くんは私達の前ではお母さんの事を「母親」と言いますが、お母さんの前では「母さん」と言っていました。

それはつまり、お母さんがある程度は認めていると言うこと。…でも、何を如何やつたら理貴くんは認めてくれるんだろう？

「うーん……。身体を動かしてから考えよう……。うん」

もう2ヶ月前になりますが、私は女子バスケット部の部長を務める程の運動好きでした。でも理貴くんが事故に遭ってからは、理貴くんにかかしてあげられればと思い、休部届けを顧問の先生に出して以来、それっきり部活をしていませんでした。

「たん、たたん、たたん、た、たん、たたん……」

久々に自宅の屋上でやるドリブルの練習は、以前よりぎこちなくなっている様な気がしました。授業の体育でバスケットをする時間があつたとはいえ、やはり部活の練習時間と比べると圧倒的に短いです。それに長時間身体を動かす部活とは違い、短時間で試合を回す授業では、如何しても体力や筋力が落ちてしまいます。現に、身体が想像通りに付いて来ず、時間が経てば経つほど小さなミスが増えていきました。そして

「たたん、た、たん……。あつ」

とうとう、地面から跳ね返って来たボールが手を擦り<sup>す</sup>抜けてしまいました。それも、開きっぱなしの屋上出入口ドアの方へと……。

「あああああつ!!?」

叫び声も虚しく、ボールはドアの奥へと吸い込まれる様に消えて行きました。それからしばらく、ボールが階段を跳ね落ちる音が聞こえ、やがて静かになりました。

「うあゝ……誰かに当たっていないと良いけど……」

万年外出気味なお父さんと私以外の家族は、休日でも比較的家の中で過ごしており、理貴くんも図書館を利用する時以外は、家の中に居る様になりました。それはつまり、ボールに当たる確率が高くなるという事になる。

「どどどど如何しよう?!」

「……まずは、回収しに行くべきだったな馬鹿姉」

「あつ、理貴くん」

階下から、理貴くんが不機嫌そうにボールを持って上がって来た。

「で、ボールの落下実験でもしていたのか？」

「えーと……ごめんなさい。あれは事故です」

「事件に成り掛けたがな……」

「あはははは……本当にごめんなさい」

理貴くんは皮肉を言いながらもボールを器用に足で操り、膝や爪先で交互に軽く蹴り上げ、時折頭に寄せたりしていた。素人目から見ても上手いとは思っただけけれど、それをバスケットボールでやれると何だか複雑な気分です。

「それで、何をしていた？」

「ドリブルの練習。最近、ずっとやって無かったから……」

「なるほど。俺が原因か……」

そう言うと、理貴くんはボールを地面に落とし、跳ね返って来た反動を手で受け流しながら素早くドリブルをし始めた。これは玄人目から見ても、なかなか上手いと思う。

「俺からボールを奪ってみろ」

「良いの？ 私、女バスの部長さんだったんだよ？」

「ただの気紛れだ。気にするな」

これってもしかして、理貴くんなりに気遣ってくれたの……かな？  
？ だったら、断るのも失礼だよね？

「うん。それじゃ、行くよ？」

「来い」

理貴くんのドリブルが急に深くなり、半歩後ろに引いたことによ

ってボールが最も遠い位置で保持<sup>キープ</sup>される。確かにこれでは盗<sup>つら</sup>り辛い。でも、盗れないボールではない。

すぐさま踏み込んで、理貴くんに覆い被さる様にボールを奪いに行く。左右に揺さぶりを掛けてみるけど、理貴くんは背中を向けたリ、ドリブルに緩急を付けながらスイッチ（ドリブルする手を替えること）をすることで、上手くかわしている。

そればかりか、今度は自分から踏み込んで防御を抜けようとしていた。右に左に振りの広いドリブルでこちらを惑わすと共に、前傾姿勢でこちらと意図的に距離を作っていた。

「（思っていたより、結構上手い！？）」

そのことに驚きつつも、左手から右手にボールが移る瞬間に手を差し込み、ボールを奪おうと試みるも、それを読んでいたのか左手でボールを弾いて自分の股下を通し、後ろに回していた右手でボールを受け取って、私の左側をドリブルでやや強引に突破していった。

「速いっ！！？」

思わず自分が抜かれたことよりも、理貴くんの凄まじい瞬発力に驚いてしまった。もしかしたら、陸上の短距離走選手と良い勝負をするかもしれない。

「……なるほど。駄目姉にも取り得はあったという事か」

「凄いよ理貴くん！　まるで『リイア・イリーネフ』選手みたいだったよ！！」

私が敬愛する『リイア・イリーネフ』選手は、獣人ながらも卓越した技量で攻める選手として知られており、獣人特有の体力と俊敏さも兼ね備えている世界最高の女子バスケットボール選手である。

「誰だそれは？　……ところで、まだ続けるか？」  
「もちろん！」

それから日が暮れて暗くなるまでやったけれども、理貴くんからボールを奪えたのはたったの2回で、理貴くんは私から何十回もボールを奪っていました。理貴くん曰く、「流れが読み易い」との事。そして「清流と濁流を併せ持つ奔流こそ、最も読み辛い」とも言いました。多分、「正攻法に奇策を混ぜる」という意味で間違っていない……と思う。

「ねえ、理貴くん」  
「何だ？」  
「今日はありがとう。私、頑張るから！！」

バスケも料理も。勿論、名前で呼んで貰うことも。

「？　まあ、精々頑張れ」

そして、翌日。

「理貴くん。そのサラダ」

「ジャガイモの潰し過ぎだ。もう少し形が残っていれば食感が出るだろう。それと、水気が多くて口内がべと付く。これは蒸かし過ぎが原因だな」

「あう……」

「……狐かお前は？」

やっぱり、料理の道は限り無く険しいみたいです。……ところ  
で、狐の鳴き声は「コン」じゃなかったっけ？

## 【間章】 第1話（後書き）

此処で補足をば。主人公は別に美食家という訳ではありません。ただ、作るのなら最良を目指すという思考の下で、長女に厳しくしているだけです。…まあ、ある意味『愛』です。

ちなみに作者は、バスケットは苦手です。身長差は勿論、そこまで技量はありませんでしたし…。バスケットに関しての知識は、wikiから。当作品を構成する柱の1つと言っても、過言ではありませんww

【断章】 第1章 第1話（前書き）

「そろそろストックが……！！！」

今回は長めです。作文用紙11枚以上。それと、投稿が遅くなつて済みません。既に書き上げていたのですが、気に入らなかつたので一書き直していました。ところで、これってR18なんですかね？ 作者としては余裕でセーフだと思うのですが……。アウトだと思つのなら感想下さい。R18タグ付けますので。

オーバー。

## 【断章】 第1章 第1話

私の声が聞こえますか？ 聞こえるならば、返事をしないで下さい。……………告白します。私は今、とても苦しく辛く、悲しいのです。騎士や兵士達が皆、私の為に強大な王国に立ち向かう事が。そしてこの戦争が、到底勝ち得る戦争では無い事が。そして、こんな状況で「頑張つて下さい」と他人事の様な声しか掛けられない私の無力さが。……………如何して？ ………………一体、何処からこうなってしまうのでしょうか？

「…それで、お前は如何したいんだ？」

「えっ…？」

「ただ身の上の不幸を嘆きたいのか？ それとも、神とやらに救いを求めたいのか？」

「……………だったら、……………だったら私は、一体如何すれば良いんですかっ？！！」

「ふん、子供らしく寝ている。……………《状況を開始せよ》」

「無情の緋桜 / 匿名参謀」

小高い丘の上で、1人の少女が帝国と王国の両軍を一望出来る丘に立っていた。春の微風に美しい桜色の長髪をたなびかせ、無機質の様な冷たい瞳で両軍を静かに観察していた。やがて、少女が虚空

に首肯をし、小さく口を動かす。

「状況開始。砲撃部隊、撃ち方用意」

右手を軽く上に上げ

「撃ち方始め」

合図と同時に、腕を振り下ろした。たったそれだけで、少女を中心に轟音が連続して響き渡り、その作用で発生した烈風によって、丘に咲く花々は次々と散っていった。

そんな、少女の周囲から撃ち出された視認速度を遥かに超えた“何か”の第一射は、然程間を置かず王国軍へと着弾し、兵士達を片っ端から血と肉の雨へと変えていく。

胴体が“何か”で吹き飛び、骨肉が“何か”で生じた烈風で切り刻まれ、血で地が赤く染まる最中、ようやく事態を飲み込めた王国軍が撤退をし始めた。しかし既に全軍の7割方が死傷し、隊列もままならない今となつては、最早撤退ではなく壊走と言うべきだろう。

「砲撃部隊、三重火線を形成。機動部隊、追撃開始」

しかし、その壊走は三重に敷かれた火線によって阻まれ、無理に進めば先の様に“何か”で肉片へと成り果て、迂回しようとすれば

小さい“何か”が大量に撃ち込まれて絶命したり、重い“何か”に弾き飛ばされて殺される。

王国軍はそうやって翻弄されている内に続々と死傷者を増やしていき、やがて1人として立っている者は居なくなつた。

「白兵部隊、死亡確認」

そして無慈悲にも、辛うじて生き残っていた重傷者が“何か”で心臓と頭を貫かれ、全滅した。それは戦争というには余りにも短過ぎて、余りにも一方的過ぎる暴力。だが少女はそれで終わるところか、地平線に霞んで見える王都を見据え、またしても小さく呟いた。

「【悲槍】、投下」

ただその一言だけで、地平線に霞んで見えた王都が突如掻き消え、しばらくして凄まじい強風と重低音が少女を“避けて”通り過ぎる。しかし少女はその現象を気にも留めず、その後も【悲槍】を次々と投下していった。時計が針を刻むかの如く、淡々と。

「【悲槍】、投下」

そして、万単位の人々を都市ごと消滅させている事実を自覚しながらも、平然と。

）

某年某月某日、王国を含む主要国が相次いで地図上から姿を消した。その数、実に8カ国。丁度、【悲槍】を投下した数と同じであった。これにより経済基盤が崩壊し、各国は未曾有の大混乱に陥る事となる。

幸いにも帝国は資源に恵まれており、先代皇帝の時代より第一次産業を中心とした富国掌握政策（国を富ませ、多くの人心を間接的に掌握する政策）と、交流阻害政策（関税を高くしたり、国内滞在者に対する制限を厳しくしたりして、自然と自国を鎖国状態へ誘導して行く。諜報対策が目的）を続けて来た為、国益の損失は比較的軽微で済んだ。

しかし貿易国や工業国はそうはいかず、とりわけ主要国からの多額の寄付金“だけ”で国営していた宗教国『セイント・クロス』は、『神の国』とも言われる程の豪華な生活から一変し、世界終末日が来たかの様な絶望感が国中に渦巻いていた。

そんな『セイント・クロス』はともかく、他国は懸命に公共事業政策や零金利政策などの政策を打ち出し、状況の打開を試みたがなかなか経済は回復せず、日を追うごとに犯罪行為が激増し、治安は悪化の一途を辿った。

こうして人心が荒んでいく最中、宗教国である『セイント・クロス』が、狂信者達による“最狂”の軍『セイント・クルセーダー聖十字軍』を用いて侵略戦

争を開始。それに煽<sup>あお</sup>られるかの様に各国も次々と侵略戦争を開始し、歴史上類を見ない世界戦争へと発展していったのであった。

一方、その頃の帝国はと言うと、消滅した王国を除けば各国から離れているという地理的要素や、鎖国状態にあつて他国に情報が流れなかったこともあり、それほど戦火の影響を受けずにいた。あるとすれば、この辺境まで流れて来た盗賊の討伐や、『聖十字軍』の迎撃くらいであった。

どちらも遠路遙々来ている為、栄養不足や食料不足でほとんどが飢えて死兵と化していたが、王国無き今の帝国軍にとって、その程度の事など脅威にすら成り得なかった。

やがて、各国が侵略戦争と防衛戦争に疲弊していく中、兵数と士気だけは無駄に多く高い『聖十字軍』が次第に勢力を増していき、これを脅威と見た各国は一時休戦協定を結び、連合軍を設立した。ちなみに帝国は、地理的に遠いという理由で参加を辞退。傍観することを決め込んだ。

そして連合軍設立から4ヶ月目に、ディザスタ大平原にて連合軍と『聖十字軍』が集結し、過去最大の戦いの火蓋が切って落とされた。両軍が激突し、拮抗する最中、帝国では少女と青年が印を付けた数枚の地図を見ながら、紅茶で喉を潤していた。

その地図をよくよく見ると、等高線が描かれた地図や水脈地図、果てには採掘資源分布図まで揃っていた。

「連合軍38万と、『聖十字軍』43万。合計して81万人……多いな」

かつて大国だった王国でも、推定人口500万人。その内、80万人が軍関係者だとされ、実際に前線で戦うのは30万人程だったそうだ。      とすれば連合はともかく、『セイント・クロス』だけで43万人とは些<sup>いさ</sup>か狂気染みていっていると言ってもいい。

「【悲槍】で包囲殲滅したいところだが、地下水脈に影響を与えかねないか…」

【悲槍】とは、見えない“何か”である事には変わらないが、対象へ当てるだけの【砲撃】とは違い、その攻撃方法はかなり複雑だ。まず、計算尽くで広域に“何か”を立体的に降らせ、爆縮（内側へ均等に爆発させる事）で押し込まれる空気の圧力によって対象を破壊させる方法を採用している。

元々爆縮は、爆発の圧力を外部ではなく、内部へ解放することで内部圧力を上昇させ、通常では得難い物理現象を発生させる為に使われる技術だが、その爆発で得られる莫大な運動量を大型目標の破壊に応用しているという訳だ。

その破壊力は凄まじく、爆心地の物体はほとんどが圧縮熱で蒸発し、その蒸発した分の体積が周囲の空気を押しやり、100km先からでも風速20m毎秒を観測出来るほどである。

無論、その破壊力は地上だけでなく地中にも影響があり、地盤が沈下して水の流れが変わったり、地中に眠っている化石燃料が発火

ないし流出したり、溶岩流が地上へと噴出してしまふ恐れがある為、  
そうそう安易には使えない。

今回の場合、ディザスタ大平原の僅か地下60m付近に広大な水  
脈が流れている為、使用を取り止めざるを得ない。そもそも、【悲  
槍】は対人にも使える対物攻撃手段であり、対人攻撃手段は【砲撃】  
以外にも多数ある。

例えば、【射撃】。これは人間を殺せる必要最低限の威力を有し  
ており、貫通力は軽装甲を撃ち抜く程度しかなく、周囲への被害も  
最小限で済むのが特徴だ。他にも【投擲】や【弩弓】など、実に様  
々だ。

「では、【轟雨】の使用を推奨します」

【轟雨】は、【砲撃】の爆発規模を小さくした代わりに弾幕密度  
を上げたもので、対象の直上に降らして近接発動させることで、上  
半身に致命的な損傷を負わせることが出来、地面や地中への被害は  
ほぼ皆無という広域対人攻撃手段である。

しかしその有能性の反面、戦場に下半身だけがごろごろと転がる  
惨状が出来てしまうので、可能ならば火計と併用して使いたいとこ  
ろである。

「そうだな。そうするとしよう」

「……最新観測情報を元に有効攻撃地点及び範囲を修正。攻撃準備、

完了しました」

「ついでに、並行して『セイント・クロス』への爆撃も行え。跡形も残すな」

「了解。遠隔攻撃、開始します」

こうして、81万人もの死者を出し、1つの国が滅ぶことで、戦争は終わらざるを得なかった。被害が大き過ぎる事は勿論、連合の最終攻略目標『セイント・クロス』の首都が物理的に消滅した上に、周辺の農村や街まで消滅しているという不可解な出来事があった為、攻略する必要性が無くなったからである。

連合に参加した各国の国力が著しく衰退している最中、帝国は勝手に王国の領土を取り込んで国有地とし、【悲槍】の爆風で荒れてしまった農地を耕す一方、王家の聖域である『賢王の森』を材木資源確保用と位置付け、国有林化してしまった。

その際、元王国領の端にあった屋敷にて『舞闘姫』の異名で知られる第三王女『イストディア・バルト・アイゼ・リオ・ブランディシュ』と、第四王女『アイゼリア・リオ・ブランディシュ』が、数人の使用人と共に保護された。

第三王女の話によると、帝国を攻める際に従軍するつもりだったが暇を出され、妹である第四王女を誘って屋敷を訪れている間に、王国が物理的に滅んだとのこと。

幸いにも屋敷には果樹園や養鶏施設があり、また屋敷の周囲には野草や野生生物の宝庫でもあった為、食べる分には困らなかったらしい。あるとすれば、主食であるパンを作る小麦粉が底を尽いたことぐらいであった。

なお、彼女達の処遇については宮中軟禁及び帯剣の禁止、そして戦略参謀『アノニム』と参謀補佐『オウカ』の両名による観察処分を受けることで決定した。この事について帝国皇女『クーゼアリス・ティア・イコネ・アフィリ・クラスタット』は、

「納得出来ません！！ アノニムは“私”の参謀（思い人）ですつ  
！！！！／／／」

と顔を赤らめながらも激しく主張していたが、重臣達は「（何時もの惚気話か…）」と主張を軽く受け流し、アノニム自身による「短期観察だ。それぐらい我慢しろ（偶には振り回されない日があっても良いと思うんだが？）」という説得を支持しながらも、「（ああ、今日も擦れ違っているなあ…）」と思うのであった。

こうして、平穩に1日は過ぎて行く。賑やかに。そして、様々な思惑を秘めながら

次の段階へと。

【断章】 第1章 第1話（後書き）

自分なりのチートを練習がてら書いてみましたが、お楽しみ頂けたでしょうか？ それと前書きでも述べましたが、そろそろストックが切れそうです…。次回からは本編に戻りますが、ある程度ストックを溜めてから投稿したいので、次の投稿は8月の第4週辺りを予定しております。

オーバー！。

## 第4話（前書き）

予定通り、投稿。時間帯は無視してくれると有り難いです。この話から、ようやく物語が本格始動します。……多分。

ちなみに、現在は第5話まで書き終わっていますが、書きかけの第6話と前編・後編と繋がっていますので、上げる時は第6話と同時投稿となります。しかしその前に『短章』を上げたいと思っていますので、今しばらくお待ち下さいませ。それでは、本編をどうぞ。

## 第4話

中学校という閉鎖空間は、時として危険な火薬庫と成り得る。闘争心をやたらと煽る様な順位付け、制服による衣服統一、厳格な校則による自由の拘束、そして二次成長に伴う精神の不安定化。小学校ではほとんど無かった要素がこれだけ揃えば、何かしら問題の1つや2つ、起きたとしても不思議では無いだろうか？

「君も、そう思わないかね？」

「個々人の適応力と性格次第だな。話はそれからだ」

「ほう。敢えて不確定要素を置いて発言を回避するとは…。なるほど、実に賢い方法だ」

「いや、ただ答えるのが面倒なだけだ。こういった議論は延々（えんえん）と続く傾向にあるからな」

「くつくつくつ、確かに」

「藤魅家の朝の一幕 / 再会と再開」

「起きろ駄目姉」

「ふうん……………」

「起きろ」

「ひゃうん……………」  
「……………」

強制執行（布団剥がし）開始。ついでにカーテンも開けて、外から朝日を取り入れる。如何<sup>どう</sup>やら駄目姉は寢相ではなく、寢起きが駄目らしい。尤<sup>もっと</sup>も前者だろうが両方だろうが、どちらにせよ駄目であることには変わらない。

「ううううう……………あえ？……………何で、理貴くんが此処に？！」

それは時計を見てから言つて欲しい。

「あれっ、もう7時になつてる？！　い、急がないと遅刻しちゃうよおおおおー！！！」

どったんばったんと、パジャマを脱ぎ捨て、衣装棚から下着を取り出したり制服を着込む様を音から想像しつつ、階下へと降りて行った。……………駄目姉の着替え？　覗く興味も趣味も無い。

「起こして来た」  
「あら、早いわねえ。これからは理貴に起こして貰おうかしら？」

料理を机に並べながらにこにこ笑っているのは、完全復活した母親である。あれから2日程静養していたが、それ以降は家事が出来る程に回復していたので家事権を返還し、空いた時間を情報収集に当てられる様になった。

やはり、家事を代行してくれる人物が居ると、何かと便利である。

「仮に家族とはいえ、起こす度に無断入室するのは如何いかにだかな……」

「あら、やっぱり気になる？」

「お前っ……!!」

「……………」

にやにやと意味あり気に微笑する母親に、敵意を剥き出しにする次女、そして疑惑の視線を向けて来る三女だが、その邪推をきつちりと否定させてもらう。

何故なぜなら、曖昧に答えてしまうと邪推に憶測を重ね、余計な発展をしかねないからだ。以前、妹馬鹿の兄や娘馬鹿の父親、そして弟馬鹿の姉を相手にした経験が、現状に警告を放っているのだから間違いない。

「世間一般常識的に考えたが故の配慮だ。他意は無い」

「そうなの」

「…………… 本当でしょうね？」

「……………」

母親と三女はそれで納得したようだったが、姉馬鹿の次女なおが尚も食い下がる。どうせ、こちらが誠実さを訴えたところで結果は既に

見えている。なので敢えて真面目に返答せず、こちらの不快感を全面的に押し出す事で会話を打ち切る方法を選択する。

「お前の発言は非常に不愉快で心外だ。これ以上不毛な会話を続けるようなら席を外す」

「……………疑って悪かったわよ」

…なるほど。感情を理性で押さえ付けたか。次女が何と葛藤かっとうしていたのかは知らないが、彼女の前での言動や行動は、慎重に選択した方が良いでしょうな…。

「何、こちらも言い過ぎた。すまない」

後腐れが無い様に、取り敢えずこちらも謝っておく。一応、覚醒前の自分が残してくれた家族である。大事にする義務くらいはあるだろう。

「おっはよっつー!!」

やっと来たか、空気姉。出来ればもう少し早く来て欲しかった。

「遅い」

「うっつー…。これでも急いだ方なんだよ?」

「なら、次からは急いで起きるべきだよな？」  
「うぐっ…。……………い、いただきまーす」

…………朝食に逃げたか。

「2人共、仲が良いわね」

そしてまたしても、母親が生温かい視線を送って来たので、少々予定を早めて家を出ることにした。正直面倒な話なのだが、今日からまた中学校へ登校する事にしたのだ。

何故なら、覚醒前の自分が中学3年生の段階であつた事は勿論、早くこの世界に慣れるには、人が集まる場所に居た方が何かと楽だからである。特に、亜人などの異種族が存在する様な世界では尚更だ。なおさら

それにしても、転生を始めて幾星霜。いくせいそう未だに勉強をしているとは不思議な感じでもある。『生涯学習』という言葉も、あながち嘘では無いという事なのだろう。

「お、おいつー!!」  
「？」

学校まであと少しといった所で、後ろから声がしたので何気なく振り返って見てみると、そこには覚醒前の自分の親友であった『立風<sup>かぜ</sup> 康<sup>こう</sup>』と、幼馴染であった『遥音<sup>はるかね</sup> 姫乃<sup>ひめの</sup>』が呆然とした感じで立ちつくしていた。

前者と言い、後者と言い、何かしらのフラグが立っている様な気がしてならない。

「お前、もう大丈夫なのか……？」

「『幽人』………じゃないよね？」

姫乃が言う『幽人』とは、知性生物の思念が半物質化したモノであるらしく、思念が強ければ強いほど現実に近いなり、物にも干渉出来る様になるのだとか。物質透過は勿論、念力で物体の非接触操作も出来るそうだ。

なお、これはこの世界の書物から得た情報である。現物を見た事は無いが、書かれているからには現実に存在しているのだろう。一度、現物を見てみたいものだ。

「無論、全治している上に物質透過も出来ない。まさしく本人だ」

少なくとも“外見に関しては”本人であるから、あながち嘘では無い。

「………そ、そうだよなっ！ 大丈夫だから登校しているんだよな？」

「…も、もつつ、水臭いな。連絡してくれば迎えにも行ったのになあ……………はあ」

姫乃がわざと聞こえる様に言ったコレも、フラグ……………なのだろうか？ 取り敢えず、回避するに越したことは無いか…。

「少し急いでも良いか？ 一応、職員室に顔を出しておきたいんだが…」

「おつ、それもそうだな。 って、如何した姫のん？」

「康くん、理貴くんが私を放置プレイするよあ……………」

「お、よしよし。アイツは天性の鬼畜だからな。俺が慰めてやるっ」

「ありがとう、康くん。その気持ちだけで結構だよっ！」

「十分じゃなくて結構なのかよっ？！ お前も随分と鬼畜じゃねーか、オイ！！」

「（漫才なら離れてやってくれ。まったく、騒々しい…）」

こうして転生後の初登校は、随分と喧<sup>やかま</sup>しい登校となったのであった。

〃

「（そして案の定、か…………）」

元々、覚醒前の自分の交友範囲が広がった所<sup>せい</sup>為か、教室に入るなり男女問わず大勢に囲まれた。大抵は「大丈夫だったのか!？」とか「良かったね」などの祝言だったが、残りは「休んだ間のノート、見せてやるよ」とか「テストが近いけど、大丈夫なの?」と勉強を案じるものであった。

正直言つて、技術の課目以外は如何とでもなる。数学と科学は公式を押さえれば理解出来るし、体育は身体能力が高ければ大抵の問題は解決する。音楽は、全世界共通であることを体感しているので心配は無い。社会に関しては、全て暗記すればそれで済む。国語などの言語学もまた、暗記で対処出来る。

「(それにしても、学友が多いのもなかなか面倒だな。……減らすべきか?)」

多ければ、個人行動を制限される。少なければ、収集出来る情報が制限される。とは言え、学生から得られる情報などたかが知れている。そこまで拘<sup>こたわ</sup>る必要も無いか…?

「(まあ、これは保留にしておくでしょう。そこまで焦る用件でも無いしな…)」

むしろ焦るべき用件は、この世界で脅威となる相手が居るか如何かの把握である。これまでの世界には、神や天使、魔王や創造主といった脅威が実在した場合があった。何れも味方<sup>いっ</sup>にしたり、滅ぼしたりとやって来たが、これから先もそう上手く行くと考える程、楽

観的な思考はしていない。

一度だけだが、他の転生者が神々との戦いの末、勝利を目前にして気を抜いた瞬間に、『転生阻止』、『絶対絶命』、『永久封印』  
ギア・レーシング クイ・デ・グレース アイオン・リング  
からなる『究極神技』に魂を貫かれるまでの一部始終を見て以来、楽観的な思考は捨て去る事にしたのである。

「（まずは、校内における仮想敵の情報収集。それから校外へと範囲を広げるべきか……）」

校内は生徒指導室の指導記録を、校外は警察の犯罪者一名簿リストを見れば良い訳だが、前者はともかく後者は難しい。方法としては、電子化された犯罪者名簿を外部から警視庁の電子書庫に不正侵入するか、警察署内部に侵入して正規の方法で閲覧するかの2択である。  
データバンク ハッキング

しかしそれらは、何れも危険度が高過ぎる方法だ。……やはり、情報屋から情報を仕入れる方が、安全かつ確実な方法だろう。

「（到底居るとは思えないが……、仮にも恋愛系統の世界だ。駄目元で探してみるとしよう……）」

大抵、どんな系統の世界であろうと『ありえない』という事が『ありえない』』という不文律が存在するものの、恋愛系統は殊更その傾向が強い。それも異種間交流型となると、その傾向はかなり強くなる。

つまり、校内に天才ハッカーが居る可能性も天文学的な確率では

無く、万に1つの可能性として“ありえる”くらいには、“ありえる”のである。

「（しかし……、如何見つけたものか…）」

結局、この用件も後回しにせざるを得なかった事は言うまでも無い。

#### 第4話（後書き）

「まさに、出オチ」

転生者と言えども、最初の頃はなかなか思う様には行かないという事ですwww ちなみに予告しておきますが、9月から11月は諸事情で更新速度が一気に落ちます。それでも偶に更新しておきますので、心配しないで下さい。流石さすがに、3ヶ月放置なんてことはありませんでwww

オーバー！。

## 【短章】 第1話（前書き）

主人公である転生者が、『フラグ』といったゲーム用語を使う様になった経緯を書いてみました。登場するゲームタイトルや内容が明らかにパクリですが、気にしたら負けですwwww

\*このお話は『短章』ですので、何時もの半分以下の長さでお送りします。

## 【短章】 第1話

『フラグ』。和訳すると『旗』だが、物語において後に特定の展開・状況を引き出す事柄や伏線という意味も持っている。「フラグを立てる」、「フラグを回収する」、「フラグを折る」といった使い方をし、『導入フラグ』、『分岐フラグ』、『敵対フラグ』など様々な種類に分けることが出来る。

「隊長。俺、この戦争が終わったら彼女に

「止める。それは『死亡フラグ』だぞ？」

「何すかそれ？」

「口にすると、後に何らかの要因で望み叶わず死ぬことになる台詞せりふのことだ。事後の約束・願望などが特に『死亡フラグ』として扱われる」

「それって、隊長の迷信シンクスっすか？」

「ああ。ちなみに『死亡フラグ』の逆で、『生存フラグ』というのがあってだな

）

短章第1話：「転生者とノベルゲーム」

「それ、何てエロゲ？」

「は？」

その日、通学途中に曲がり角から走って来た女生徒とぶつかった

出来事を親友に話すと、親友が突然、その様な事を言い出した。

「お前、ギャルゲーだとかエロゲーとか、とにかくノベルゲームをやった事はあるか？」

「無いな。それが何か役に立つのか？」

戦略シミュレーションゲームやアクションゲーム、格闘ゲームや射撃ゲームは、これから転生する世界でも何かと応用出来そうなので積極的にやっているが、文章が主体のノベルゲームは、小説に絵と音楽が付いた様なものと聞いていたので、まったく手を出さなかった種類である。

「お前、人生の大半は損している様なものだぞ……？」

「それでは、何かお勧めはあるか？ 出来ればファンタジーやSF、転生素素が入っており、戦闘や戦略、または政略が中心のものが好ましい」

「本当に堅い奴だなお前は……。男子たる者、抜きゲーに興味は無いのかっ！……？」

抜きゲー。ゲームの内容が『性交』する事を目的としており、言ってみればアニメ絵と音が付いている官能小説だ。

「そういった事に関しては淡泊だな。仮に抜くとしても、エロゲーという物で十分だろう」

そもそも『性交』など、度重なる転生の旅路で幾度と無くやっており、親友風に言うならば『賢者』の領域に達している為、然程性欲には飢えていないのである。

「……ま、まあ、ともかくだ。今日、帰りに俺の家に寄って来い。幾つか適当に貸してやるからさ」  
「恩に着る」

そして学校からの帰りに親友の家に寄り、幾つかゲームを借りてから帰宅した。

「さて、どれからするべきか…」

親友の説明によると『真愛<sup>マジラブ</sup>』という作品は、『特別』・『無限』・『代案』の3部作となっており、その番外編に『皆既日食』が位置しているらしい。親友曰く、「『無限』からは“どうあがいても絶望”タグの付く鬱ゲーだが、神作でもある。救済が欲しいのなら2次創作小説を探してみることだ」との事。

もう1つは『愛姫十無双』という作品だ。何と三国志の登場人物がほとんど“女性”という世界へ転移した主人公が、自分の世界の知識を用いて奮闘するというもので、この作品を再構成した物が次作の『真・愛姫十無双』なのだと言う。

親友曰く、「登場人物が格段に増えているが、キャラ1人辺りの話が薄くなってしまうている。そして何より、大橋たいきょうと小橋しょうきょうが居ないという致命的な変更点が残念な作品だっ！！！！！これは、2次創作小説を見た方が面白いかもな」との事。

なお、後日談である『真・愛姫十無双〜恋将伝〜』は完全にエロゲーとの事なので、借りて来なかった。

そして最後に借りて来たのが、『運命』シリーズである。時系列順に並べると『零』・『滞在夜』・『空虚平穏』とこれも3部作になっており、番外編も幾つかあるらしい。親友曰く、「厨二病が確実に発症する作品だ。同じブランドの『ムーン・プリンセス』シリーズ、『空のマーシナル』、『ヴァルプルギス・ナハト』もお勧めだ」との事。

「まあ、どのみちだ。片っ端からするでしょう」

そして、『真恋』マシラヴを手にとったのであった。

1ヵ月後。

「他にお勧めは無いかな？」

「あ、ああ、そうだな……。それじゃあ、『ケイオス・ヘッド』とかは如何だ？ 想像が現実になるってヤツなんだが」

こうして、これからの転生先で何物にも替え難い知識を、この世界で多く得たのであった。

【短章】 第1話（後書き）

転生者が洗脳された件。ある意味、親友グッジョブと言えるでしょうww 近況報告ですが、そろそろリアルが忙しくなるので、本編第5・6話の投稿は9月半ばになりそうです。

設定なども上げますので、興味がある方は是非見ていって下さい。ちなみに、この短章を書くのに合計9時間以上掛かっております。やはり遅筆ですね。

オーバー！。

## 第1紙片（前書き）

兼ねてから予告していた設定やら何やらを投稿。第6話の執筆は終わりましたが、投稿は第7話の執筆がもう少し進んでからにしたいと思います。次の投稿は9月の第4週辺りを予定しております。そろそろリアル頑張らないとな…。

## 第1紙片

本編第4話までの登場人物紹介。（＊本編に出て来た人物のみ）

『藤魅<sup>ふじみ</sup> 理貴<sup>りき</sup>』

### 【紹介】

転生者兼主人公。本編では、覚醒前の自分（＊1）の名前である『藤魅 理貴』を名乗っている。今の家族との関係が浅い事や、事故や事故による2ヶ月間の空白がある事を良い事に、覚醒前の自分を演じず、素の自分のままでいる。如何やら回復能力が異常の様だが……（＊2）。

（＊1）：覚醒前の自分＝事故に遭う前の『藤魅 理貴』。

（＊2）：本編第1話を参照。

『藤魅<sup>かりん</sup> 霞凜<sup>かりん</sup>』

### 【紹介】

理貴より数ヶ月分年上の義姉。よく理貴に「駄目姉<sup>だめねえ</sup>」や「馬鹿姉<sup>ばかねえ</sup>」、「空気姉<sup>くいきねえ</sup>」と言われ、苛め（？）られている。理貴が事故に遭うまでは、女子バスケット部の部長を務めていた。現在は部活復帰を目指しつつ、同時に料理の腕も磨いているようだ（＊3）。

（＊3）：間章第1話を参照。

『藤魅次女・三女』

### 【紹介】

まだ名前が出て来ていない為、こう表記されている。あまりにも不遇過ぎるので、如何にかしたいと（作者自体）思っている。

『母親・父親』

【紹介】

母親は専業主婦で、父親は外交官として世界中を飛び回っている。「何処かで似た様な設定があった様な…」とっていると、ライトノベル『灼眼のシャナ』の坂井夫妻（妻・専業主婦、夫・海外を股に掛ける商社マン）などの先行者が結構居た件。これもある意味、テンプレなのかもしれない。ちなみに主人公は、母親の前では『母さん』。それ以外では『母親』と呼び分けている。

『たちかぜ  
立風 康』

【紹介】

理貴が事故に遭う以前から繋がりのある人物。細かい気遣いとツッコミの早さが特徴。今後の活躍に期待。

『はるかね  
遙音 姫乃』

【紹介】

理貴が事故に遭う以前から繋がりのある人物。ぐいぐいと自分をアピールする健気さと、爽やかに吐く毒が特徴。今後の活躍に期待。

（（

勝手にQ&Aコーナー。作者が質問を予想して答えるだけのコー

ナー。単なるネタ晒し<sup>ネタ</sup>とも言つ。本編や断章なども含まれている。

Q：「転生じゃなくて憑依では？」

A：「見解の相違です（キリッ）」

補足：そもそも転生とは「次の世で別の形に生まれ変わる事」ですので、“別の形が既存の物であっても構わない”と作者は解釈しています。

Q：「回復が早過ぎるだろ？」

A：「理由は後の本編で判明します。かなり長くお待ち下さい」

Q：「主人公の行動方針は？」

A：「まだ秘密ですが、追々（おいおい）分かるかと」

Q：「『亜人』って何ぞ？」

A：「人型である事、または成れる事が前提で、なおかつ知能が『人間』と同等か、それ以上であるモノを『亜人』と定義しています」

Q：「『<sup>ギア・レーシング</sup>転生阻止』、『<sup>クイ・デ・グレース</sup>絶対絶命』、『<sup>アイオン・リンク</sup>永久封印』、『<sup>アルティメット・アーツ</sup>究極神技』

のルビの意味が知りたい」

A：「以下参照」

1 番目：英語で『gear racing』。意味は『歯車が空転

する』 〓 『転生が出来ない』

2 番目：仏語で『coup de grace』。意味は『見事な一撃』 〓 『致命傷』

3 番目：英語で『aion ring』。意味は『無限の輪』 〓 『環状的終始』

4 番目：英語で『ultimate arts』。意味は『究極武術』 〓 『究極奥義』

）

その他の重要（？）語句とか文章とか。

間章第1話：「あう……」 「……狐かお前は？」

通称『鍵』こと『Key』が発売したPCゲー『Kanon』の  
人外ヒロイン『沢渡 真琴』の口癖が「あう」。泣きゲーだが、転  
生者も一応はやっていたらしい。この頃から変な口癖のあるヒロイ  
ンが出始め、「はう」「うにゅ」「へう」「はわわ」など多岐に渡  
る謎の発展を遂げた。そんな彼女に関する名言がある。

「『Kanon』の真琴は生きる。『School Days』の  
誠は死ぬ」

実的に射ている名言だと思う。後者の所業は筆舌に尽くし難い

ので、此処では割愛させて頂く。

## 以下、短章第1話

### 『賢者』の領域

達観しており、欲望に飢えていない冷めた状態。理性を保ち、自律することが出来る。転生者は知識も経験も豊富なので、『賢者』と名乗っても然程問題無いだろう。

『真愛（マジィラヴ）』の『特別』・『無限』・『代案』・『皆既日食』

元ネタのPCゲーである『MUV-LUV（ラブィラヴ）』を誤表記+当て字し、サブタイの『EXTRA』・『ANLIMITE D』・『Alternative』・『トータル・イクリプス』を和訳したもの。2次創作小説は良作が多いので、探してみる価値あり。

『愛姫十無双』と『真・愛姫十無双』と『真・愛姫十無双』恋将伝

真ん中のダガー記号（† これ）でお分かりの通り、元ネタは『恋姫†無双』と『真・恋姫†無双』と『真・恋姫†無双〜萌将伝〜』<sup>ファンディスク</sup>。最後のは後日談で、「ハーレム、カモン！！」な人ならプレイするべきか？ これも2次創作小説に良作が多い。

『運命』シリーズ、『零』・『滞在夜』・『空虚平穩』

『ムーン・プリンセス』シリーズ

『空のマージナル』

『ヴァルブルギス・ナハト』

元ネタは『TYPE・MOON』、通称『型月』から出されたP Cゲー『Fate』を和訳し、サブタイの『zero』・『starry night』・『hollow ataraxia』を和訳した物。『来訪夜』にしようか『滞在夜』にしようかで悩んだ記憶がある。後のは『月姫』、『空の境界』、『魔法使いの夜』の英訳やら独訳。ちなみに投稿時点では、まだ『魔法使いの夜』は発売していなかった。何れも世界観を共有している。ところで、『月姫2』の開発はまだだろうか？

『ケイオス；ヘッド』

『CHAOS；HEAD』『カオス；ヘッド』の『カオス』を英語読みの『ケイオス』に変えた物。実際の内容は「妄想が現実になる」という厨二病患者御用達の作品。オリ主チート物作品でも、これの設定がたまに出て来る様になって来た。『想像』じゃ駄目なんだろうか？

厨二病  
ちゅうにびょう

ネットスラング。中学2年生くらいで掛かる病気みたいなモノ。  
『中二』の『中』はわざと誤変換している。「チート」、「魔王」、  
「勇者」、「不老不死」、「最強」、「ハーレム」といった言葉の  
どれか1つにでも惹かれたら、発症している可能性あり。

## 第1紙片（後書き）

断章の登場人物は、もう少し先になってから。短章の方は名前が出ていませので、敢えて書きませんでした。間章も同じく。基本的に何話が進んだら、こういった形で設定などを投稿しようと思います。

前書きでも言いましたが、次の投稿は9月の第4週辺りを予定。不意打ち投稿は致しませんので、時々チェックしなくても大丈夫です。

## 第5話（前書き）

リアルの用事が片付きましたので、予告通り投稿します。とはいえ、あまり執筆が進んでいないんですよ。……何故かって？それは『とある魔術の禁書目録<sup>インデックス</sup>』の2次創作小説を書いていたからなのさっ！！

「はい、すみません。o y z」

何故だか急にストーリーが重厚なチート物を書きたくなったんです。一応、本編第7話は執筆 添削 執筆……と試行錯誤しながら書いております。ええ、遅筆ですとも。ついでに浮気（他作品の執筆）もしますよ。

ちなみに、『第1紙片』に色々と追加しましたので、改めて見るのも良いかもしれません。では、以下の本編をどうぞ。

## 第5話

「仮面。それは素顔を隠し、他人になりきる道具である」

この文の“素顔”を“本性”、“道具”を“方法”と言い換えても不思議と通用するのだから、人が如何に『理想の自分』を追い求めているかが良く分かるだろう。現実と理想がかけ離れていればいる程、その差異（歪み）はとても重く感じてしまう。やがて仮面の重さに心が耐えかねた時、人は一体如何するのだろうか？

「お前なら如何する？」

「相変わらず唐突だね君は……。僕はそうだね、作り直していると思うよ？」

「理想の再確認と再修正か。相変わらず模範的だなお前は」

「それじゃ、そう言う君は如何するのか聞かせておくれよ？」

「俺か？俺なら………軽量化してでも、再び被っているだろうな」

）  
）

「“初日”のジnkス / 『第5虚区の罌』前編」

ドッベルゲンガー

朝のSHR（留意事項を連絡する短い時間）を終え、1時限目の授業 体育に間に合う様に、体育館へと向かう。前日、担任に連絡して時間割を訊いていた為、忘れ物は無かった。

しかも偶然にも、授業内容はバスケの試合だそうだ。数日前、駄目姉と1対1形式でやっただけに作意を感じてしまうのは、単に自

分の考え過ぎなのだろうか？

「よう、理貴。朝方振りだな。その……、動いても大丈夫なのか？」

「医者のお墨付きだ。これと言って問題は無い」

「そ、そうか……」

なお、体育の授業は奇数クラス同士（1・3・5・7組）の合同なので、必然的に3組の康や、未だに見えない1組の姫乃とまた、顔を合わせることになる。ちなみに、自分は7組である。

「あつ、そう言えば……。お前が休んでいる間に、勝手に俺らのチームメンバーとして入れたんだけど、それで良かったか？」

「ああ。別に構わない」

正直、気晴らしになれば何処のチームでも良い。たかが遊戲の勝敗など二の次、三の次である。

「そつか……。それじゃ、期待しているからな！」

遠くから、「りいーきーん」と言いながらやって来る毒娘（姫乃）を横目で見遣りながら、「ほどほどに頼む……」と返事をした。康は俺の視線の先に気付いたのか、苦笑しながら颯爽と立ち去って行った。それを逃げたと言い換えても、然程違いは無いぐらいの去りっぷりだった。

「何用だ？」

「もう動いても大丈夫なの？」

「医者のお墨付きだ。これと言って問題は無い」

先程、康に言った台詞をそのまま流用して使った。

「ふん……。ところで、私に対して何か言う事は無いのかなあ？」

そう言つて、腕を組んでCカップはありそうな胸を強調したり、後ろに手を組んで前傾姿勢からこちらの顔を覗き込んだりする等、様々な姿勢<sup>ポーズ</sup>を取っていく。どうも本能的には、官能的な姿勢<sup>ポーズ</sup>を取っているつもりらしい。

確かに、他校では絶滅しているはずのブルマと体操着の組み合わせを、着こなす姫乃の体形や容姿は美しく素晴らしいと言える。

が、正直に言わせてもらうと、性欲を掻き立てられる程でも無い。精々、大人ぶって可愛いという程度の認識だ。

別に性欲が枯れている訳では無い。ただ達観しており、相手がその気でないところもその気にはならないだけである。

「……………まあ、無理はするな」

無難に、そう言っておいた。

「うつつ……。理貴くんが鬼畜過ぎるよお……」

およよと泣き崩れるフリをする毒娘改め痛娘を放置し、康が居るチームに合流した。その後、何事も無かったかの様に授業が開始され、何事も無く授業が終わった。敢えて特筆するならば、痛娘がコート上を半ば自棄気味に暴走し、12分の試合で10本ものシュートを決めていたことぐらいである。

流石に後半では、スタミナが切れてへばっていたが。

それから2時限目、3時限目、4時限目と過ぎて行き、あつと言う間に昼食時間になった。生徒達が我先にと食堂へ殺到するのを後目に、鞆の中から弁当箱を取り出し、包みを広げた。

朝から母親が、登校再開記念と称してやたらと気合の入った手料理を詰めてくれたお陰で、今日のは一段と豪華であった。

「悪くは無いな……」

一口食べ、そう評価する。流石に転生者たる自分には遠く及ばないものの、普通に美味しいと言わざるを得ない。そのまま黙々と食べ続け、20分後には完食していた。

「さて、残り30分を如何過ごすべきか……？」

昼食時間には休み時間も含まれており、50分の時間が与えられている。仮眠を取るのもよし、図書館で読書に勤しむのもよし、運動場で汗を流すのもよしである。

「（選択肢2、だな）」

そうと決まれば行動は早く、その3分後には図書館に着いていた。  
さすが流石に蔵書数は市立図書館に劣るものの、本のジャンルはかなり多岐に渡っていた。

「（いや、正しくは偏っている、か…?）」

ある棚はライトノベルで、ある棚は魔導書や魔術書で、ある棚は哲学や心理学の本で、ある棚は料理のレシピ本で、ある棚は医学書や技術書で埋め尽くされていた。

明らかに異常、明らかに不自然過ぎる光景の片隅に、唯一“自然に見える”棚が存在していた。それは、図書館の最奥に位置している貸出禁止書籍が置かれている棚であった。他の棚が趣味ないし専門分野に走っているにも関わらず、その棚だけは平然と卒業アルバムや文集が収められていた。

しかしよくよく見てみると、一見“自然に見える”その棚も、他の棚同様に不自然さに満ち溢れていた。

「（並びが違う。同じアルバムや文集が存在している。何年分かが不足している。………これは、謎掛けか？ 暗号か？ それともただの偶然か？）」

謎掛けならば、一定の法則に従っていれば何時かは解明出来るが、もし暗号ならば、ヒントとなる対応表がなければ解読することは難しいだろう。偶然だった場合は、無駄な徒労に終わってしまうだけである。

「（………よし。見なかった事にしよう）」

下手に書籍を動かして気付かれるよりは、何もせず立ち去った方が得策である。が

「まあ、そう都合良くはいかないか…」

何故か振り返った先に、影が立体化した様な『何か』がこちらと対峙していた。正確に言うならばその影は自分の姿に酷似しており、図書館からは何時の間にか、人氣がまったくなくなっていた。おそらく、人払い的なモノでもされたのだろう。

そしてこの影は、形状や特徴、経験からして『ドッペルゲンカー』だと推定。これが単に足止め用なのか、それとも制圧用なのかは不明だが、不意打ちをしなかった事から鑑<sup>かん</sup>みると、おそらく前者の可能性が高い。

「（色々と展開が唐突過ぎるが……、此処は突破させてもらっ）」

主に、日々の平穩（面倒事を回避する）の為に。

取り敢えず、最初は情報収集から始める。手近な本棚から本を取り出すと、向こうも同じ動作をしたもののその手に本は無く、ただ動作を左右対称に模しただけであつた。

「（ほう……。では、これは如何だ？）」

今度は手にした本を投げ付けると、向こうも同じ動作をするが、その手に元々本は無く、かと言って空中で本と何かがぶつかったりする事も無く、ドッペルゲンガーの身体を擦り抜けて地面に落ちた。

「（実体が無いのか？ それとも単に無効化しただけか？）」

次に、右足を一步踏み出してみる。するとやはり向こうも、左足を前に踏み出していた。そして不意打ち気味に急接近しながら右ス

トレートを繰り出すと、向こうも急接近しながら左ストレートを繰り出し、

「は……？」

お互いの拳が擦り抜けた。念の為、今度は肘辺りまで入れてみたが、結果は同じであった。自分の肘辺りから、ドッペルゲンガーの拳が突き出ており、ドッペルゲンガーの肘辺りから、自分の拳が突き出ていた。

「（単なる幻影か？ それとも、正しく効果が発揮されなかっただけなのか……？）」

疑問もそこそこに前へと歩き、ドッペルゲンガーを擦り抜け、向こう側へと出た。一応、後ろを振り返って見てみたが、やはりドッペルゲンガーがこちらを振り返って見ただけで、何ら変化も起きてはいなかった。

このまま睨み合っても仕方が無いので、ドッペルゲンガーの事は頭から追いやり、次に起こすべき行動を思考する事にした。

「（さて、次は……）」

次は、図書館からの脱出である。ドッペルゲンガーの様な足止めがあるからには、それを仕掛けた人物も居るのが常だ。よって、此

処から速<sup>すみ</sup>やかに脱出する必要がある。

此処の図書館は通常の出入り口が1つしか無いが、ベランダへの出入り口が1つある。待ち伏せされている可能性も無きにしも有らずだが、通常の出入り口から出るよりは余程安全のはずだ。

幸い図書館は1階に設置されているので、ベランダの塀<sup>へい</sup>を乗り越えれば、内履きではあるが一先ず外に出られる。そう思い、

「出入り禁止」と張り紙がされているドアのドアノブを回して押し開いたところ、ピンツと何かが弾ける音がした。

その瞬間、脳裏に『<sup>フリー・トラップ</sup>簡易罠』の三文字が浮かんた。

「（まずいつ?!）」

すぐに身を翻<sup>ひるがえ</sup>して後方へと飛び込むと同時に、開いたドアの隙間から煙がもくもくと流れ込んで来た。これがただの煙幕なのか、吸引性催眠ガスなのかは不明だが、ベランダからの脱出は諦めた方が良さそうだ。

「（ならば窓は…）」

そう思っ<sup>て</sup>て見渡すも、何故か窓全てに鉄格子が設置されており、突破するにしても時間がかかりそうであった。

まさに、万事休す。

「ちっ、こうなったら

」

## 第5話（後書き）

「まさかの急・展・開！！」

……まあ、今更の事です。ようやく、恋愛系統の世界らしい一面が出て来たかなあ、と思います。今作で転生者（理貴）がぼやいた通り、色々と展開が唐突です。空から落ちて来る系のヒロインだなんて、まさにその例です。

これから後編へと繋がるのですが、展開が唐突ですので<sup>ぐだぐだ</sup>gdgdになっていく可能性も無きにしも有らずなのですが、第8話ぐらいには日常パートに戻るかと。……とは言え、まだ第7話すら書き終わっていませんので、あくまで予定です。

此処で、名言（＝迷言）を2つ程言って締めたいと思います。

「予定は未定」

「有言が実行に移されるという保証は“信用”という不確かなモノで保証される」

オーバー！。

## 第6話（前書き）

「連続投稿ターンっ！！！！」

という訳で、第6話目です。ここの番号付けナンバリングしているとはよく分かりますが、全然本編が進んでいない事に気付きます。遅筆乙。第7話は1週間以内には投稿出来ますので、しばしお待ちを。  
では、以下の本編をお楽しみ下さい。

## 第6話

最善手を見出し、それを実行に移し、確実に成功させる。この3つをたった1人で行うのは難しい。だが、それを集団で行えば如何だろうか？ 頭脳集団が議論し尽くして出した最善手を、裏方が調整や準備をする事で実行可能な段階まで持って行き、表方が実際に実行して成功させる。このように、集団には計り知れない長所が存在するのである。

「逆に、計り知れない短所も存在する訳だが……」

「即決即断が出来なかったり、不手際があったり、裏切りが生じたり、ですよね？」

「そうだ。そして最高の集団を形成するには、求心力のある指導者、優秀な部下、そして何より金が必要だ。金さえあれば、如何に指導者が屑だろうが、部下が最低だろうが、集団として纏める事は“一応”可能だ」

「でもその場合、部下が指導者を裏切って全部自分の金にしようと思わないんですか？」

「少し頭の良い奴なら、裏切るよりも徹底的に利用しようと思えるだろう。その理由は、自分なりに考えてみる。これを次の授業までの宿題とする。以上、授業終わり」

「そんなっ?! 良い所で終わらないで下さいよ先生!! せんせゝゝいつ!!!」

『第5虚区の罾』後編 / 侵入者(?) + の対応

「ところで、第5虚区への侵入者の件は如何になりましたか？」

「それがその……。取り逃がして、しまいまして……………」

「へえ…？」

つい1時間程前に、第5虚区 図書館への侵入者が報告され、それ以降何の報告も無かったので、ふと気になって警備担当者を呼び出してみれば、何とその侵入者を取り逃がしたと言う。

「どんな状況だったのか、詳しく説明なさい」

警備担当者の話によると、侵入者は罾にかかったものの何らかの方法で脱出し、ベランダ側の出入り口から出ようとして『軍曹』が仕掛けた吸引性催眠ガス弾（ガス増量版）を作動させた。

その数十秒後、配置についた教官と候補生からなる部隊が突入した瞬間、ベランダ側に配置していた部隊が次々と気絶させられ、結果としてベランダからの逃走を許してしまったそうだ。しかもその侵入者は

「魔力反応が無かった？ 改良型の検出妨害魔術の可能性は？」

「いえ、その可能性は低いかと…。そもそも、侵入者のものと思われる残留魔力すら存在しない始末でして……………」

「……………それでは、如何どうやってアレから脱け出したと言っのですか？」

「目下、全力で調査中　　との事です」

残留魔力すら観測させない高位の魔術士となると、非常に厄介な事になるわね……。しかも部隊を魔術でなく体術で気絶させている辺り、余裕すら窺うかがえる。

「それで、侵入者の足取りは追えたのかしら？」

「いえ、それが……………」

「如何どうかしましたか？」

「……………外周部結界に異常は無く、気絶させられた隊員メンバーの目撃情報も合わせますと、一般男子生徒に紛れて潜伏している可能性が高いとの事です」

逃げるどころか堂々と潜伏するとは……………無礼なめるのも大概にしてみらいたいわね。

「緊急事態宣言を発令し、生徒を全て体育館に隔離。校内搜索と並行して全生徒の記憶逆行調査を行いなさい」

「ほ、本気ですか校長っ?!」

「きりきり動きなさい。さもなければ」

得物を抜くわよ？

「は、はいいいっ!!」

警備担当者が慌てふためいて出て行ったところで、すっかり冷めて不味くなった紅茶を啜り、深く溜め息を吐く。

「はあー…。これだから『破魔』関係の仕事は嫌なのよ……」

『破魔』。それは『鬼人』や『魔人』といった、人類にとって悪害となる者達を狩る血族を指す言葉だ。かく言う私も『破魔』だが、分家の中でも端っこの方の末女なので、宗家と比べれば血はかなり薄い。

此処最近は『破魔』の派閥間の空気が最悪で、色々ときな臭い動きや、事件などが多発している為、赤羽派閥あかはの実働部隊育成所を兼ねたこの学校では、独断で準警戒態勢を敷いていたところ、とうとう事件が起きてしまった、という訳である。

そもそも私は現場向きの人間で、こういった見えない敵への対処などは、周りと思うほど得意ではないのだ。

「一般生徒に被害が及んだら……、如何してくれようかしら？」

そして胃が痛むと共に、やり場の無い怒気を持て余すのであった。

}} side out

「（緊急事態宣言だと？ 俺を炙り出す為の口実か…？）」

緊急事態宣言。それは出現法則の無い『魔人』が出現する予兆

『ウィル・オー・ウィス 隴火』が発見された時に出される避難警報であり、大型結界などが敷設されている体育館に一般生徒を一時的に避難させて、事態が収拾するまで籠城するのだそうだ。

「（此处で逃げ出そうが、あの時に逃げ出そうが、怪しまれる事には変わらないか…）」

あの時 図書館から脱出する時、案の定、特殊部隊が2箇所  
の出入り口から突入して来た為、近かったベランダ側の特殊部隊  
を全員伸してから脱出し、その後何食わぬ顔で教室へと戻り、午後  
の授業を受けていた。

そこへ、緊急事態宣言が発令され、現在に至るという訳だ。

「（しかし、此处から先は如何やって炙り出すつもりだ？）」

図書館に仕掛けられていた対侵入者用罠から鑑みるに、この学校には幾つか仕掛けがあるようだが、探知用の仕掛けはあっても監視用の仕掛けはほとんど無いようだ。現に、個人指定の呼び出しを受けていないのがその証拠だ。

おそらく、私生活権などの詰まらない事情に配慮しているのだろう。バレなければ、やったところで何の問題も無いというのに…。

「（……まさかだと思うが、1人1人学生名簿と照会するつもりか？）」

その方法だと、非常事態宣言で逃げ出した相手を特定することは出来るだろう。だが、自分の様に堂々と紛れている者に対しては、あまり効果的では無い。

「（何か裏があるな…）」

そう思い、しばらく観察していると、ふとある事に気付いた。

「（教師がやけに挙動不審だな……。何をしている？）」

その挙動を注意深く見てみると、体育館に整列して座り込んでいる生徒の間を行き来し、時折立ち止まっては名簿に指を走らせる振りをしながら、素早く印を切っている事が分かった。ああやって、生徒を何らかの方法で調べているのだろう。

「（さて、如何対処したのか…？）」

手段を講じながらも、関係者だと思われる教師や生徒を全て記憶していく。意外と数が多かったものの、覚えられない数でも無かった。後は個々人の名前を調べれば、暫定的ではあるが謎の組織の脳内名簿が出来るという訳だ。

「先生」

「如何した理貴？」

「トイレに行つて来ても良いでしょうか？」

「おう、さつさと済ませて来いよ」

適当に動く口実を得て床から立ち上がり、出来るだけ自然に見える様に、ゆつくりとトイレに向かつて歩き出した。

「（出入口は6箇所。だが、その何れにも関係者らしき人物が3、4人立っている。奇襲を仕掛けるにしても、かなりの高難易度だ）」

図書館の場合は、ガス弾の煙幕が視界を遮つていた為、上手く成功したが、この体育館にそういった物があるとは到底思えない。一瞬でも視線や意識を奪うないし誘導するならば、火災報知器を鳴らすか、はたまたは

「（よし。個室には誰も居ないな？）」

トイレ洗浄に使う漂白剤と酸性の洗浄液を混ぜ合わせ、かつて化学兵器として扱われた『塩素ガス』を発生させるかである。

『塩素ガス』は化学兵器で言えば窒息剤に分類され、呼吸器や目の粘膜を刺激し、咳や嘔吐を催させ、重度になると呼吸不全で死に至る場合もある尤も身近で、手軽に作れる毒ガスだ。たまに掃除中で死亡事故が発生するのは、主にこれが原因だ。

「（やはり置いてあったか。なら、後はこれを混ぜるだけ……）」

ジギギギギギ、ギャリリリリッ！……バチンッ！！

「（っ？！……何の音だ？）」

突如異音が鳴り響いたかと思えば、それは唐突に途切れた。

「（まさか感付かれたか？）」

異常事態につき作業を中断し、状況把握の為にトイレから静かに抜け出す。壁沿いに玄関側へ歩いていると、体育館の中央辺りから言い争う様な怒声が聞こえて来た。

「その生徒から手を放せっ！！」

「それ以上近付くなっ！！ こいつが如何<sup>いか</sup>なっても良いのか？！」

「くそっ、卑怯<sup>ひしやう</sup>な……」

「（……………何だこの三文芝居<sup>しほ</sup>は？）」

しゃがんだ状態で壁の縁<sup>ふち</sup>から体育館の中央を少し覗き込むと、男生徒の制服を着ている何者かが女生徒の首筋にナイフを突き付けており、その何者かを関係者が遠巻きに包囲している光景が見えた。状況から察するに、自分以外の侵入者 少なくとも後ろめたい奴が何らかの目的で、女生徒を人質に取っているのだろう。

「（だが、それは悪手だ）」

逃走するのが目的なのか、陽動するのが目的なのかは不明だが、どちらにせよ悪手である。逃走するならば人質が足手纏いに成りかねないし、陽動するならば態々（わざわざ）人員を動員せずとも可能なはずだ。

「（それにしても、先程から他の生徒達が騒がないな……。結界でも張られているのか？）」

ある条件を満たした者だけを空間の内部に取り込むという神秘は、これまでの世界にも割とあった。主に、部外者を巻き込まない為だ

とか、目撃者を少なくさせるのが目的で、高度なモノとなると時間の概念すら切り取り、内部で経過した時間を外部では無かった事にする事も可能である。

何故、自分が結界に取り込まれたのかはさて置き、人質の方はおそらく巻き込まれたただけだろう。よくよく周囲を見渡せば、薄紫色の結界らしきモノが見えた。

「さっさと道を開けて、舞台の方へ行けっ！！」

「(さて、自分は如何動くべきか……?)」

正直、無視するのも良い。そうすれば、この侵入者(仮定)が図書館への侵入者として処理され、自分は平穏な学生生活に戻るだろう。……尤も、こいつが逃げ切る、または口を割らなければの話だが。

「(悪手を打つ様な奴だ。あまり当てにしない方が良いな……。それよりも、現状打開の為に協力した方が良いのか?)」

無論、侵入者(仮定)を捕まえる方である。態々脱出の方を手伝って、無理に別ルートへ行く必要もあるまい。

「よし、誰も動くなよ?」

「くっ……」

侵入者（仮定）は玄関側に背を向けてゆつくりと後退しており、こちらに気付いている素振りはない。図書館の様な障害物も無く、相手が人質を取っている事を考慮しても、非常に奇襲を仕掛け易い状況だ。

後は、奇襲に最適な距離に入るのを待つのみ…。

「（……………今だ！！）」

侵入者（仮定）との彼我の距離が5mを切ったところで、しゃがんだ状態からクラウチングスタートで飛び出す。そして3歩もいかない内に侵入者の左後方へと走り寄る。

「なっ！？」

間近に迫った自分に気付き、反射的に振られたナイフの軌跡を頭を下げることで交わしながら、切り返しが来る前に伸びた左腕を右手で掴み、そして左手で頭部を掴むと、足を掛けて転ばせつつ頭部を地面へと押し付けた。

ゴッ！！

鈍い音と共に、侵入者（仮定）の頭が床に打ち当たって身悶えるが、それでもナイフは手放さなかった為、小指の骨を押し折り、握力が弱まった隙に奪い取った。ちなみに、人質は巻き添えで一緒に倒れていたものの、すでに安全圏へと離脱していた。逃がす手間が省けて、何よりである。

「協力には感謝する。……だが、規則に則り、お前を一時的に拘束させて貰う」

先程、舞台側に遠ざけられていた関係者らが、未だに身悶えている侵入者（仮定）を取り押さえ、身体検査をするその脇で、今度は自分が関係者らに包囲されていた。『明日は我が身』、という言葉を変えて実感した瞬間であつた。

「そちらの規則に従おう。  
ところで、このナイフは如何どうすれば良い？」

手の中にあるナイフは、刀身に奇怪めいた紋様が這っており、これまでの世界の神秘を参考にすると、おそらく刀身に何らかの効果をもたらす類型タイプで間違い無いだろう。流石に、効果までは不明だが。

「その場に置いて、手を上げながら5 m程ゆっくりと下がれ。余計な行動はするなよ?」

「分かった」

……さて、現状打開の為に『ルート分岐選択肢』をあつさりと決めてしまった訳だが、これから如何なることやら……。よくある展開としては記憶を消されるか、協力させられるかのどちらかになるだろうが、この世界の系統を考慮すれば後者の確率が遥かに高い。

「（思えば今日は、覚醒後初の登校日だったな……）」

今後の展開を思うと、軽く鬱になった。

「そう心配せずとも良い。悪い様には扱わない」  
「……そう願おう」

侵入者（仮定）の身体検査をしていた男性関係者が、何故か女性関係者らにボコられている光景から目を逸らしつつ、そう答えた。経緯は如何であれ、同じ男として連続急所蹴りは見るに耐えない。

「？ ……ああ、あれは気にするな。ただの制裁だ」  
「だがしかし、流石に1対8では生死（精子）に関わるぞ？」

既に、手遅れ感是否めないがな…。

「……………意外と上手いな。下ネタだが」  
「……………女性が気付くな。はしたない」

そうこう言っている内に、自分の身体検査も制裁も、どちらも終わっていたのであった。



## 第6話（後書き）

「転生者だって下ネタくらいは言う回」とか言ってみる。

今回、伏線ばっかです。そして前回は導入編。実は、今回と次回（第7話）は前編・後編みたいな形になっていますが、区切りが良いのので敢えて表記していません。ちなみに、塩素ガスは非常に危険ですので、作らない様に。本気で死人が<sup>マジ</sup>出ますから。

オーバー！。

## 第7話（前書き）

まずは謝罪を。今週中どころか、2日遅れで投稿している件について。

作者「いやね、添削とか見直しとか、投稿分の尺を調整したり（ry

結論：遅筆などによる作者の力量不足。

では、以下の本編をどうぞ。

## 第7話

目で得られる情報は、全体の7／8割を占める程に重要だ。その為、真偽を判断する時において『見抜く』という言葉が使われている。特に『本質を見抜く』という行為は、間違えたり騙されやすいものの、かなり重要な行為である。何故ならその人物の本質を見抜けば、行動を読んだり、思考を誘導させる事が可能となるからだ。

「だが、道具や魔法では観測出来ない事象を捉えるには、かなりの時間を要する上、確証出来ないという致命的な部分がある」  
「推理、とか？」

「そうだ。しかし、これから起こす行動や言動の参考にはなる。お前が修めようとしている『心理学』と言う物は、そんな“参考になるかもしれない”程度の物だ」

「理解している」

「なら良い。授業は対話や説明方式で行う。疑問などがあれば何時でも訊く様に。無論、授業時間外でもだ」  
「分かった」

〃

「穏やかな監視の一時 / 見抜く者、見誤る者、流される者」

「お前の身元が無事証明された。拘束して悪かったな」

「なに、規則なら仕方あるまい」

あれから体育館の倉庫で一時隔離されていたものの、10分も経たない内に、外に出れた。既に緊急事態宣言は解除されており、体育館に残っているのは自分と先の女性関係者だけであった。

「だが、お前が結界に入り込んだ事とは別だ。その調査が終わるまで、私の監視下に入って貰う事になる」

つまり、図書館への侵入をますます知られる訳にはいなくなつた、という事か。これで知られれば、更に面倒事になる事ぐらいは予想が付く。

「調査はどれくらいで終わるのか？」

「数時間は掛かるだろうな。…他に聞く事は？」

「特に無いな」

出来れば今後の処遇に関する事を訊きたいが、おそらく訊くだけ無駄だろう。そういった情報は、まず本人には知らされないからな。

「……ところで、お前は如何してあそこに居た？」

「トイレに行った帰りに不審者が居たのでな。無謀にも飛び掛かり、今に至る」

かなり簡略化しているが、嘘では無い。

「なるほど。実に分かり易い説明だ。                      時に、お前の親族に『

破魔』は居るか？」

「さてな……。そもそも、自分の産みの親すら不明だ」

覚醒前の自分の記憶をかなり遡れば、産みの親と一緒に過ごした記憶はあるものの、輪郭がぼやけ、かなり不鮮明に記憶されている。                      と言うのも、その記憶は生後数ヶ月頃の記憶なので、視覚が未発達で不鮮明なのは如何しようも無い事である。

「済まない。失礼な事を聞いてしまったな……」

「産みの親より育ての親だ。気にする事は無い」

尤も、転生者として答えるならば、前言とは真逆の「育ての親より産みの親」となる。何故なら、親の種族や階級によつては差別や偏見、義務や権利が付き纏う事になり、行動に制限が掛かったり、そもそも行動が起こせなかったりするなど、不利な状況が発生する恐れがある。

……………まあ、出自や容姿を偽れば如何とでもなるが。

「お詫びと言っては何なんだが…、私の話を少ししよう」  
「……好きにしろ」

一瞬、このフラグを折るべきか情報を取るべきかで悩んだものの、やはり後者を取る事にした。他人の過去話はあまり聞ける様なモノでも無いし、交友関係は広げておくに越した事は無い、と判断したからである。

「私は、小さい頃からある場所へ修行に出されてな。3歳の頃から退魔士に関する基本知識を始め、色々と教え込まれた」

まるで、何処かの武僧の様だな。

「6歳からは小学校に通いつつ、修行を続けた。無論、中学校に通っている今でも修行は続いている」

「成る程。……………それで、話は終わりか？」

「ああ、これで終わりだ。最初に言っただろう？ 『私の話を“少し”しよう』、とな」

意地の悪い笑みを浮かべ、「してやったり」と言いたげなその表情に対し、何故だか言い様の無い“哀れみ”を覚えた。

「如何かしたのか？」

「……いや、暗くなる前に帰りたいと思ったただけだ。夕方8時以降は補導の対象だからな」

適当に誑かしておいた。

「ああ、なるほど。しばし待て……」

そして数十秒後、「7時までには終わらすそうだ」と告げられた。如何やら、念話の類で何処かと通信をしていた様だ。

「それと何故だか分からないが……、校長がお前に会いたいそうだ」  
「何だ。校長も関係者だったのか？」

「と言うか、教職者のほとんどはこちら側だな」

「……一体、この学校は如何なっているんだ？」

一見、種族を問わない解放的な中学校と思いきや、その実『破魔』関係者達の拠点であると、誰が思うだろうか？ 否、誰も思っまい。

「ちなみに日本限定だが、他校もほぼ同様だ。ちなみに『破魔』の教職者も居るぞ？」

「最早、流石としか言いようが無いな……」

「そうだな。後は歩きながら話そう。付いて来い」

彼女の横に並び、体育館の外に出る。校舎と体育館の間には渡り廊下が3本も設けられている為、靴の履き替えをする必要が無く、移動するのに非常に便利である。

「『破魔』の歴史は、ある退魔士の一族から始まった。彼らは『彫り師』と名乗る人物に、『彫り物』と呼ばれる武器・防具・道具を用意してもらい、それらを用いて人害を狩っていった。そのお陰で今日、日本は此处まで発展する事が出来た」

そこで一息入れた後、再び話し始める。

「だが、その一方で問題もあつた。発展に伴い人々が住居範囲を広げた結果、手の足りない場所が増えてしまった事は勿論、『彫り物』の数不足や劣化・消耗が、いよいよ深刻になって来たのだ」

ちなみに2つ目の問題は、『彫り師』が『彫り物』の製法を残さなかったのが原因だ、と補足説明を挟みつつ、彼女は話を続けた。

「そこで、先の侵入者の目的であろう『彫り物盗り』に繋がるという訳だ」

「つまり、無いなら他所（よそ）から盗む、という事か？」

「そうだ。さて、そろそろ目的地に着くぞ」

それから数十秒後に辿り着いた場所は、校長室の隣にある応接室であった。中に入ると、机を挟んだ向こう側に校長と教頭の2人が、椅子に腰掛けていた。

「2ヶ月振りですね藤魅君。調子は  
「それで、話とは？」

校長の挨拶を遮り、やや高圧的に本題へと促した。挨拶で時間を無駄にするよりは、用件に費やした方がよっぽど賢明だ。

「では単刀直入に。貴方、図書館に侵入した事はあるかしら？」  
「無いな」

“利用”はしたが、“侵入”をした覚えは無い。

「そう……。ところで貴方、アルバイトをしてみないかしら？」  
「中学生のアルバイトは法律上禁止されているからな。断る」

そもそも、目的も無く人の下に就くなど、したくも無いのが心情だ。それに、大抵古くからある組織は内部腐敗し切っているのが常だからな。権力抗争に巻き込まれるのだけは勘弁願いたい。

〕〕side out

「……なら、話はこれで終わりね。もう教室へ戻って良いわよ」  
「そうさせてもらおう」

彼が応接室から離れて行ったのを退魔士見習いの刀佳<sup>とうか</sup>さんに確認してもらってから、私は隣に座る教頭の津田<sup>つだ</sup>さんに“結果”を訊いてみた。

「それで、彼は如何だったのかしら？」  
「……彼は、非常に危険、……だと思います」  
「思う？」

予想外の言葉に、思わず疑問が口を出た。この学校で1番の『読心術』の使い手が、彼の記憶を読んだにも関わらず、そんな抽象的な言葉しか出て来ないとは、一体如何いうことなのだろうか？

「つまり、貴方でも読めなかったという事なのかしら？」  
「いえ、何と言いますか……」

津田さんが珍しく動揺しているのを見て、私は彼が落ち着くのを待った。

「……そう、本当に読めなかったんです。『読心術』を妨害するには、『抵抗術』を使うか精神を鍛える必要があります」  
「そうね」

『読心術』を防ぐ程の『抵抗術』を覚えるには、個人差はあれど1ヶ月もあれば覚えられる。それに対して、『読心術』を防ぐ程の精神を得るには、何十年という鍛錬が必要だ。それ程に、“記憶”というものは読み取られやすいのである。

「そして術を使っている場合は、こちらが弾かれる様な特異な感覚がするのですが、彼からはそういった感覚がしませんでした」  
「……つまり、彼の精神は鍛えられており、貴方でも読み取れなかったと？」

「はい……」

もしそうだとすれば、魔術の技量も力量も高位の魔術士に相当するはず……。

「刀佳さんは引き続き彼の近辺で監視を。津田さんは2時間以内に隊員<sup>メンバー</sup>を選出して、彼の校外行動の監視に当たらせなさい。しばらく泳がせて、様子を見るとしましょう」

「了解しました」

「了解です」

さて、竜が出るのか蛇が出るのか…。まったく、胃に悪いわねえ……。

Side out

帰りのSHRで部活休止と6時までの完全下校、そして調査の為に翌日が臨時休校になる旨が伝えられ、部活生の不平不満の聲が飛び交う中、鞆を持って教室を出ようとしたところで康と姫乃がやって来た。

「おい、理貴。久し振りに一緒に帰ろうぜ！」

「それで何時もの喫茶店にも行こうよっ！！」

「…ああ、そうだな」

やや姫乃に押し切られる形で、何時もの（覚醒後の自分としては初めて）喫茶店『アタラクシア支店』に行く事になった。ちなみに“支店”という言葉が名前に入っているものの、本店は『アタラクシア支店』そのものである。

どうも、「平穩は自分で見つけ、手に入れるモノであり、それまでは仮初の平穩な一時を此処（『アタラクシア支店』）で過ごして欲しい」という思いが込められているらしい。そんな事はさて置き

「……何故、待ち伏せている？」  
「今日は理貴くんと一緒に帰ってみようかな？　って思ったからだよ？」

にこにことそう答えるのは、駄目姉こと馬鹿姉　ではなく義姉の霞凜だった。何故か自分の靴箱の前で待つており、その所為で他の学生から興味の視線を向けられていた。

よくよく考えてみれば、彼女は2ヶ月前までは強豪バスケットチームを率いる部長だったのだから、未だに知名度が高くても不思議では無い。おまけに容姿が平均的な中学生から抜き出ている為、余計に目立って見える。

「俺はこれから喫茶店に行くんだがな……」  
「あ、誘ってくれるの？　ありがと〜！」  
「おい。人の話はちゃんと聞けと」  
「理貴、早く行こうぜ！……」って、あの『環成　霞凜』さんをナンパしているだっつ？！　意外とやるなお前！？」

タイミングくらい読んで欲しいのだが……、元親友。　ちなみに名前で分かるだろうが、霞凜だけでなく他の義妹達も、学校では未だに旧姓を使っている。

何故なら、制服や体育着、その他諸々の名前入りの物を変更する必要が出て来る為、次の学年に上がるまでは旧姓を使う事になっていた。その所為か、霞凜達との家族関係は不思議と知られていなかった。

……まあ、覚醒前まではお互いの関係が複雑だった上、公言するような性格でもなかったのが主な原因だろう。それ以前にお互いを家族として認めず、他人同士で居ようとしたからそうなったとも言える。

「あのな……。義理とは言え、一応の姉をナンパする弟が居ると思うか？」

「理貴くん？！」

「……は？ いや待て……。……環成さんがお前の姉だと……？ それって本当な」

[illegible]

「黙れ」

驚愕の声を上げた姫乃改めボ工娘この口を手で塞ぎ、喉を軽く締め付ける事で強制的に黙らせた。それから落ち着いた（窒息し掛けた）ところで解放し、素早く外履きに履き替え、有無を言わず校門の前までボ工娘を連行した。

「少しは場所を考えて叫べ。迷惑行為だぞ？」

「だって、あの”環成さんと理貴くんが”アレ”って聞いたたら、誰だって驚くよ絶対ッ!!」

「……まあいい。とにかく、喫茶店へ向かうとしよう」

「……………環成さんも？」

「ああ」

そう言う、何故か姫乃はえらく不機嫌になった。それが部外者

を参加させる事に対してなのか、それとも他の女性を連れて来る事に対してなのかは分からないが、好感度が下がっている事には違いない。

「康、ボエ娘、それと駄目姉、さつさと行くぞ。時間が惜しい」

「ボエ娘って何さっ?！」

「私、<sup>へっしょう</sup>蔑称?！」

「ちよっ…!?! その発言は男生徒全員を敵に回しかねないぞ!?!」

「加えて、一部の女生徒を敵に回すだろうな」

「「「誰ッ?!」」」

こちらからは死角となっている校門の表側から、先程の退魔士見習いの女生徒が音も無く現れた。思えば、これが本日3度目の待ち伏せ(1度目は図書館、2度目は玄関)である。今日は待ち伏せに縁のある日なのだろうか…?

「私か? 私は通りすがりの」

「ストーカーだ。しかも7時まで付いて回る制限時間付きの」

「おい」

「ささやかな意趣返しだ。気にするな」

こうして何だかんだで、5人で喫茶店へ行く事になったのであった。ちなみに、姫乃の機嫌が更に悪くなった事は言うまでもない。



## 第7話（後書き）

誰が見抜き、欺き、流されたのか？ 敢えて明言はしておきません。“推理”してみてくださいwww

ちなみに此处でも謝罪をば。第8話の冒頭すら書いていない件。

……と言う訳で、次の本編投稿は大分先となります。予定としては10月の最後辺り。ストックも溜めておきたいし、11月のリアルの事情に向けて対策をしないといけないので、更に亀更新となります。うです。

それまでは、他のお気に入り作品を読むなどの対策をして下さいませ。

オーバー！。

【間章】 第2話（前書き）

久々の投稿。執筆具合は如何かって？ 本編第9話の冒頭あたりまで書いて一時休憩中、つてところですよ。そういや、もうじき八口ウインだったよーな……。

（作者）Q：「的に悪戯いたづらしてくれる可愛い魔女こっ娘とか、来ませんかね？」

（現実）A：「来ても精々、新聞配達のおバサンくらいだろ。妄想乙」

……だそうです。では、以下の間章第2話をどうぞ。

## 【間章】 第2話

理貴くんが事故に遭った。その訃報は、事故の翌日のSHRで知らされた。その酷く現実味の無いお知らせに、私がしばらく放心している、康くんがやって来て「姫乃、病院に行くぞ!」と言い、学校を抜け出し、病院へと向かった。そして集中治療室<sup>ICU</sup>で見た理貴くんは、様々な管や機械<sup>チューブ</sup>に繋がれ、まるでベッドに拘束されているようだった。それから2カ月後の今日、理貴くんは何の前触れもなく、私達の前に現れた。

「ああいう時つて泣くのが普通なのかもしれないけどさ、アイツが普通に現れた所為<sup>せい</sup>か、何だか泣けなかったんだよね」

「そうそう。私、思わず『幽人<sup>ゆうじん</sup>』かと疑っちゃったくらいだもん」

「ははっ、今にして思えば、俺達相当な間抜け面していたに違いな  
いぜ?」

「あははっ、康くんは元々からそうでしょ?」

「ひっでえ!?! 最近の毒舌の中で一番傷付いたぞオイ……」

〃

「変わったところ、変わらなかったところ」

本当に久し振りに会った理貴くんは、雰囲気はかなり大人びていて、えらく落ち着いていた。事故の後遺症も無いらしく、見た限り

では雰囲気以外は特に変わっていなかった。でも話してみると、実はかなり変わっている事が分かった。

声に自信が滲み出ていた。へたれっぽさが無くなっていた。何かしらの迷いが無くなっていた。言葉遣いが大人っぽくなっていた。よく思慮する様になっていた。あまり私をからかわなくなっていた。ちよつと意地悪になっていた。即答しなくなっていた。皮肉を言わなくなっていた。私を『遥音<sup>はるかね</sup>』と呼ばなくなっていた。康くんと一緒に、馬鹿な事をしなくなっていた。

そして、前よりも増して鈍感になっていた。

……まあそれでも、変わっていないところがあった。楽しそ

うに苦笑するところ。話を体よく流すところ。友達が多いところ。私と康くんと仲が良いところ。体育が得意なところ。周りから意外と頼りにされているところ。

そして、女の子と仲良くなるのが早いところとか、特に変わっていないかった。

……………むしろ、早さが増した気がするくらいだ。現に、何時の間にか刀佳さんという人と仲良くなっていて、3ヶ月前から家族になっていたという霞凜さんかりんも一緒に、何時ものお茶会に向かっているのが良い証拠だ。

「（ううう…）、これは由々（ゆゆ）しき事態—！」

『幼馴染』という不動の地位が、『義理の姉』、『クールな同級生』という新たな地位によって脅かされている事は勿論、このペースだと明日や明後日や、明々後日が如何なっているかも予想が付かない。

「（これは計画を早めて、デートにでも誘ってみようかな？）」

『兵は拙速を聞く』や『疾きことは風の如し』など、昔の人もそう言っているのだから、今週の休日辺りにでも、理貴くんをデートに誘ってみるのも良いかもしれない。

「（あ……、でも如何誘おう？）」

まずそこで躓いた姫乃は、あーでも無い、こーでも無いと頭を悩ます内に、何時の間にか喫茶店に着いたのであった。

「おい、姫乃。早く入らないと外に締め出すぞ？」

「あつ、ごめんね理貴くん……」

扉を開け支えていた理貴くんに促され、店内へと入った。外と違って店内は冷房で冷えており、火照った身体が冷えて行くのが良く分かった。ついでに頭も良く冷えた様で、思考も何だか冴えてきた

気がしなくもない。

「何かしたのか？」

「うん。何でも無いよ？」

「？ まあ、それなら良いんだが……」

………良くないんだけどなあ………はあ……。

「……理貴くんのとーへんぼくー」

「何なんだいきなり？」

「何となーく、毒吐いてみただけ」

「独り事のように吐かれてもな………」

「気にしない気にしない」

## 【間章】 第2話（後書き）

今日のタグ：『驚きの白さ』、『間章にして短章』

間を持たせる為に空白入れまくったら、やたらと尺が長くなった件。強調の表現の仕方を変えた方が良かったのかも…。ある意味実験作となってしまうしたが、姫乃の内心を感じてくれれば嬉しいです。

ただ……、やはり女性視点は難しい。感情的な場面とか特にやはり、さばさばしていて、あまり喋らないキャラの方が楽ですね。転生者とか特に。

ちなみに、『マシロ何とか』のやつは、作者によるお知らせを兼ねた“何か”です。最初がアレですが、最後まで見た方が良かったかもしれません。って、自分で言うのも何なんですが…。

オーバー！。

## マシロ・ホワイト・ブランク・ヴァイス01（前書き）

『脳内会議の様子』

作者A「いきなり謝罪文から始まるってどーよ？」

作者B「良いんじゃないね？ 斬新な始まり方で」

作者C「ズコー、にも程があるだろ…。ある意味黒歴史になるぞコレ？」

作者D「……それでは、以下の本文をどうぞ」

## マシロ・ホワイト・ブランク・ヴァイス01

前書きでも述べた様に、本編第5話において、未公開分の設定と食い違う箇所が見つかりましたので、大幅(?)に修正致しました。修正箇所は以下の通り。

〃

本編第5話：ドッペルゲンガー攻略戦の辺りの文章

「(ほう…。では、これは如何だ?)」

今度は手にした本を投げ付けると、向こうも同じ動作をするが、その手に元々本は無く、かと言って空中で本と何かがぶつかったりする事も無く、ドッペルゲンガーの身体を擦り抜けて地面に落ちた。

「(実体が無いのか？ それとも単に無効化しただけか?)」

のところから、

「（さて、次は……）」

次は、図書館からの脱出である。ドッペルゲンガーの様な足止めがあるからには、それを仕掛けた人物も居るのが常だ。よって、此処から速やかに脱出する必要がある。

のところまで。展開は変わりませんが、第6話の伏線と共通していますし、謎も更に深まったかと思えます。ちなみに書き直した際、かなり尺が短くなりましたが気にしないで下さい。この小説は、よく無断で修正や添削、改行やその他が行われますので、色々と気にしたら負けなのです。

修正の例：同じく本編第5話で、姫乃のバストサイズがDカップからCカップへとサイズダウン。

理由：いいわけ「中学3年生でDカップはでかいだろ？」という作者の独断と偏見に基づく修正。日本人女性の平均バストサイズは、この時期だとBカップ程度。海外は不明。

（（

ついでに、修正した箇所の文章も貼り付けて置きます。以下、修正前。

次に、右足を一步踏み出してみる。するとやはり向こうも、左足を前に踏み出していた。そして不意打ち気味に急接近しながら右ストレートを繰り出すと、向こうも急接近しながら左ストレートを繰り出し、拳同士が衝突した。

「（ッ！？……そうくるか！）」

衝突した瞬間に感じた、粘性の高い液状物質を打つ様な感覚。おそらく触感などの感覚を誤認させ、ありもしない壁を作り上げることで脱出を阻止し、あわよくば疲弊させ、後で確保しやすくするのが目的なのだろう。

「（しかし、何時発動したんだ？）」

転生者と言っても、転生する度に全ての能力を持ち越している訳では無い。基本的に持ち越すのは知識と経験、そして精神の3つであり、その他は必要に応じて持って来るのである。余計な力が余計な事態を引き起こすという事を、嫌と言うほど理解しているが故に。だが、神秘関連の能力を持っていれば現在の“余計な事態”を回避出来たかと思うと、あまり持たな過ぎるのも考え様だと、改めて

認識させられる。

「（……まあ、打破出来ない状況では無いかな）」

よく勘違いされるのだが、転生者の武器とは培われた肉体や、魔法といった神秘でも無い。知識と経験、その2つである。知識を駆使すれば、産業革命も政権奪取も思いのまま。経験を駆使すれば、人材発掘や事態予測も容易となる。

そんな知識と経験はまさに諸刃の双剣だが、上手く扱えば攻防一体の最強の武器と成り得る。特に既知に対しては、尚更だ。

「（残念だったな。お前の様な相手は、既に“経験済み”だ）」

ドッペルゲンガーと手を重ね合わせ、そのまま前へと進む。すると思惑通り、ほとんど抵抗無くドッペルゲンガーを擦り抜け、その背後へと出た。念の為、振り返って見てみると、ドッペルゲンガーが背後に立ったまま、こちらを振り返って見ていた。

「（まさか、壁抜けを経験した人間が居るとは思わなかっただろう？）」

上手くいった事に、思わず笑みが浮かぶ。脳の誤認を逆手に取り、抵抗を柔らかい壁と思い込むことで擦り抜けた。種を明かせばたったそれだけの事なのだが、経験した事が無い人にとっては、その想

像は困難を極めるだろう。

尤も、ドッペルゲンガーが物理的に存在していない事が前提だからこそ、この対処法が通用した訳だが。

「（さて、次は…）」

……

……

…

うん。未公開分設定と矛盾しまくっているね。ちなみに、この修正部分に関する未公開分は、本編第10話頃には公開出来ればな、と考えております。まあこの時点では、未だに本編第8話までしか書いていませんが…。どうか気長にお待ち下さいませ。何度でも言いますが、作者は遅筆d（ry

（（

『おまけコーナー』

簡単な容姿設定と追加設定を載せてみる。主人公の容姿は本編第

2話でも少し触れているが、本当に少ししか書いていなかった件。  
以下、設定。

「藤魅 理貴」  
ふじみ りき

紫よりの青目をしており、目付きが覚醒前の理貴より若干きつくなっている。黒髪のショート。顔は中の上くらいだが、纏っている雰囲気がそれを上の下にまで評価を押し上げている。主人公故にフラグメイカー体質だが、本人が意図的にフラグブレイクする為、あまり意味が無い。覚醒前の理貴の人徳故か、友人が多かったりする。

「藤魅 霞凜」  
ふじみ かりん

目は茶色。髪は枯れ草色でロング。至って易しいお姉さんのイメージ。胸のサイズ？ おそらくC手前のBカップ。姫乃さんには負けています（笑）。紅茶の知識を得て、少しは賢くなった模様。旧姓は『環成』。今後に期待。

「他の妹達」

まだ名前すら出ていないので、敢えて書いていない。多分、おそらく、本編10話頃には出せるはず。

「立風 康」  
たちかぜ こう

目は黒色。髪も黒色で、長さは理貴よりも短め。至って普通の友人。気配りが出来て、ツツコミも出来る素晴らしい人物（作者的に）。  
。理性ある熱血漢。

「遥音 姫乃」  
はるかね ひめの

目は茶色。髪はこげ茶色で、ミドル。かなり梳すいている為、髪が羽毛の様に浮き易い。メインヒロインの特権なのか、発育がかなり良い（特に胸）。理貴に対しては、かなり積極的な一面を見せる。でもやっぱり初心うぶなので、行動力が伴わなかったり…。今後に期待。

「刀佳」  
とうか

目は青色。髪は黒色でロング（肩甲骨くらいまでの長さ）。髪はポニーテールにして纏めている。今のところ、名前以外はほぼ不明な退魔士見習いの少女。理貴達の同級生らしい。胸のサイズ？ 慎重まし…おっと、誰か来たようだ……。

## マシロ・ホワイト・ブランク・ヴァイス01（後書き）

タイトルの意味は、全部「白い」または「白の」という単語をくっ付けて、最後に数字を付けただけです。特に深い意味はありません。なお、次の投稿日は11月の第2・3週辺りになると思います。それまでは、他の作者様の作品をお楽しみ下さいませ。

オーバー！。

## 第8話（前書き）

不意を突いてこんな時間に投稿してみる件。……嘘です。投稿前の再推敲に時間がかかり、気が付いたらこんな時間になっていただけです。それと、遅ればせながら予定通り投稿を再開致します。

リアルの用事は当分無いので、思いっきり執筆が出来る様になりました。ちなみに現在は第10話を鋭意執筆中。もつと余裕が欲しストックいと思う今日のこの頃です。では、以下の本編をどうぞ。

## 第8話

恋愛系統の世界。そこは“有り得ない”という言葉が“有り得ない”世界。目を覚ませば隣で異性が寝ていたり、道を歩けば異性とぶつかり、訪れる先々で異性と出会い、そしてフラグやイベントがこれでもかと発生する。ある意味、恋愛系統の世界は不安定な世界とも言える。何故なら、あらゆる事態が起こり得る“可能性”に満ち溢れているが故に、例えば天文学的確率の事象でさえも、高確率で起こり得るのである。時に不平等に、時に理不尽に。

「（　　そう。それはまさしく天災級だ……）」

「魔王『ルイン・ノートリアス』！　貴様の悪行の数々もこれまでに！　観念しろっ……！」

「（しかも、勇者組が全員女性だとはな……。何だろうか？　ガイアが俺にハーレムを作れと囁いているのか？　はたまたは単に先の戦いで、男性が減ったからか？）」

「覚悟するのですっ！」

「我らの恨みを、思い知れ……！」

「それがし某の太刀裁き、見切れますかな？」

「皆さん、怪我など気にせずガンガン行っちゃって下さい！　すぐに治しますから……！」

「（だが、いちいち相手にするのも面倒だ……。……初期地点に飛ばすとするか。）」『転送』」

「……なっ　　？！　……」

「……誰か紅茶と茶菓子を。砂糖壺も頼む」

「はい、魔王様。少々お待ちを」

くく

「2ヶ月振りの午後の紅茶 / 『初日のジンクス・続』前編」

退魔士見習いの女生徒こと刀佳とうかが自己紹介し、互いに自己紹介をした事以外は特に何事も無く、喫茶店『アタラクシア支店』に到着した。

ちなみに、よくあるイベントの1つである『席の取り合い』は、自分が奥側に座り、その隣に康こうが座り、自分の対面に姫乃ひめのが座る事で、不発に終わった。そもそも、普段から定位置が決まっていたので、発生も何も無かった。

そして、霞凜かりんと刀佳が姫乃側の席に座ることで、奇麗に男女に分かれた。まあ、男女比2対3では、普通にこうなるだろう。

「店主、俺達は何時もので」  
マスター

「お願いしま〜す」

「ちなみに今日は連れもいるので、もう1セット追加で」

「あいよ」

にやにやと笑みを浮かべながら、店主がグラスやティーカップを準備し始める。もしかすると、集団デートとでも思われているのかもしれないが、わざわざ訂正するまでも無いので放置する事にした。もし店主にからかわれても、康が勝手に訂正するだろう。

「ところで、2人とも金は持っているのか？」

以前の記憶によれば、自分達が頼んだ物は600mlのティーポットに入った気替わり（店主の気分で茶葉が替わるので、“気替わり”）紅茶と、クッキーが10個付いて1セットになっている税込み600円の物で、何時もは3人で割り勘して200円ずつ支払い、最後に残ったクッキーをジャンケンで取り合っていたらしい。

それを5人で2セットを注文した為、今回は割り勘で1人当たり240円の支払いとなる。どうせなら、あと1人ぐらい連れて来れば良かったのかもしれない。

「えっ？ 奢ってくれないの？」

「少しばかりは、な」

「……………あれ？」

「ふむ……………」

本当に奢らせるつもりだったんだな駄目姉…。中学生の小遣いなど、高が知れているだろうに……。

「少しは刀佳を見習え、駄目姉」

「だって、普段寄り道なんてしないから、お金なんて持たないもん！」

「理由にすらなっていないな」

どうやら、駄目姉の脳内では“寄り道”と“出費”は直結しているらしい。もしか、青春時代をバスケだけで過ごすつもりなのだろうか？ 寄り道も結構面白いものなのだが…。まあ、過ごし方は人それぞれなので、態々横から口を挿むつもりは無い。

「……此処は立て替えてやるから、あとで240円返す様に」  
「えー……」

駄目姉が抗議の声を上げるが、無視する事にした。金銭トラブルを起こさない一番の方法は、貸し借りした分を短期間でしっかりと回収または返済する事である。その金額が多かれ少なかれ、基本的には同じ事だ。

「ところで今更何だが、お前の父親が再婚した相手って、環成かんなさんの母親だったんだな」  
「まあな。なまじ有名だったし、最初の1ヶ月はぎくしゃくしていたからな。訊かれなかったのもあるが、かといって話そうとも思わなかった」

母親がこの近隣では美人と評判だったのもあるが、やはり駄目姉の知名度の高さが、覚醒前の自分にとっては決定的だったようだ。  
“我ながら”、適応力が無いにも程があると思った。

「おいおい……。その話が本当なら、何時そこまで仲良くなったんだよ？」

「3日くらい前だな。つい先週の金曜日の事だ」

此処まで短期間にフラグやイベントが発生する辺り、流石は恋愛系統の世界だと感心し、呆れた覚醒後初日でもあるが。

「なるほど……って、ちょっと待て。お前、何時目を覚ましたんだ？」

「3日前だな」

「リハビリは如何したんだ？」

「必要無かったな。医者も不思議がってはいたが、問題無しと診断された」

そもそも、普通の医学知識で解明出来る様なモノでも無いしな。

「……ま、問題無いならそれで良いか」

「問題、あるよっ……！」

ガオーツ！！！！ という効果音が聞こえて来そうな勢いで、蚊帳の外状態だった姫乃が会話に割り込んで来た。何処ぞの虎かお前は？

「何かあったつけか姫のん？」

「性格が大人びて、からかい甲斐が無くなっているところっ！」

本人の前でからかい甲斐と言われてもな…。

「頭もかなりぶつけたからな。多少、オカシクなっているけど仕方あるまい」

「……やっぱり変だよー……」

「まあまあ……。別に悪い変化って訳じゃないし、そこところは喜ぶべきだと思うぞ?」

「それもそつか。康くんを止めるストッパーが増えたと思えば喜ぶべきだよな?」

「……お前が普段から俺を如何思っているか、よく分かったぜ……」

「お待ちどうさま」

康が毒されて落ち込んだ辺りで、店主がタイミング良く紅茶とクッキーを運んで来た。紅茶とクッキーの甘い匂いが、<sup>ほの</sup>仄かに香る。

「今日の茶葉は、『偶には基本に戻ってみつか?』と言う訳で、セカンドフラッシュのダージリンを淹れてみたんだが、なーんか物足りん。きっと私の舌が肥えている所為だな、うん。砂糖とレモン水はお好みでどーぞ」

それから、「それでは、ごゆっくりと御寛ぎ<sup>おくつろ</sup>下さいませ」と大仰に一礼した店主に対し、姫乃が無自覚なのか如何かは分からないが、極めて自然に毒を吐いた。

「店主が店主らしい事しているのって、久し振りに見たよ」

「塩入れられたいか小娘？」

「ごめんなさい!!」

やはり、年季が違うのだろう。流石の毒娘も、店主の爽やかな切り返しには屈した。尤も、店主が大人げ無いだけとも言えるが…。

「ま、普通の味だな…。これはダストか店主？」

「そ。お察しのとおり、ダストだよ。生憎、何時も使っているペコは入荷待ちだね。仕方無くダストを使っただけで済よ。やっぱり滓かすが入っていた？」

「少しな」

「うーむ…、次からはティーパックを替えるべきか……？」

店主が思案している合間にクッキーを食べていると、駄目姉が「理りき貴くん、しつもん」と言ってきたので、クッキーを胃に落としながら、「何だ？」と問い掛けた。

「『ダスト』とか『ペコ』って、何のこと？」

「茶葉の等級　つまりは、葉っぱの大きさの事だ。『ダスト』が一番小さく、『ペコ』が『オレンジ・ペコ』と『ダスト』の間ぐらいと覚えておけば良い」

つまり、『オレンジ・ペコ』>『ペコ』>『ダスト』の順である。

「へー、『茶葉の等級』って、葉っぱの大きさと分けているんだね？」

「大体は、な。例えば『ペコ』に芯芽が多く含まれていると『フラワリー・ペコ』と呼ばれるんだが、そういった細かいところは自分で勉強しろ」

ちなみに、『シルバー・ファイン・ティッピー・ゴールデン・フラワリー・オレンジ・ペコ』という長つたらしい等級も有ったりするが、これぐらいになると、最早一般的では無くなる。

「……そういやよお、理貴。刀佳さんとは如何やって知り合ったんだ？」

「そんな事を訊いて、如何するつもりだ？」

「いや、後学の為に訊いておこうって思ったただけだ」

「だから軽く教えてくれ」と言われたところで、如何返答すれば良いのか判断に困る。「『破魔』のいざこざに巻き込まれて、現在進行形で監視されている」と言ったところで真実味は無いだろうし、嘘を言ったところで刀佳が話を合わせてくれるか如何かも不明だ。

ならば此処は、無難な返答をするしかないな…。

「ちょっとした困り事の解決に、一役買ったただけだ。特別な事なんて何も無いぞ？」

嘘ではない。ただ、かなり省略しているだけだ。

「そつか…。やっぱり要は切欠だよな…。……」

「……誰と仲良くなりたいのかは知らんが、まあ頑張れ」

一応、元親友としてそう言っておいた。

〃  
〃

「そんじゃ、また明日学校で　　って、明日は臨時休校だったな…。  
んじゃ、また明日何処かでな」

「ばいばい！！」

「またな」

あれから喫茶店で30分程過ごしてから会計を済ませ、姫乃と康は帰路についた。そして残ったのが、自分と駄目姉と刀佳の3人であつた。

「今、何時だ？」

「6時12分を過ぎたところだな。秒まで読み上げるか？」

「結構だ」

つまり、あと48分は刀佳と一緒に居なければいけないのか…。さて、如何する？

「……一旦家に寄ってから送るが、それでも良いか？」

「ああ、こちらは一向に構わない」

如何やらこちらの意を汲んだらしく、刀佳は上手くこちらの話に合わせてきた。近くで監視出来るのなら、どんな状況や面子でも構わないようだ。

「えっ？ そんなに刀佳さんのお家って遠いの？」

「いや、最近何かと不審者が多いから…。念の為だ」

「ふん。そうなんだ」……」

単なる口実だが、正直こいつ1人でも大丈夫だと思われる。『破魔』は『獣人』に匹敵する程の身体能力があると聞くし、何かあっても逃げる分には問題無いだろう。

「すまん。藤魅を借りさせてもらうぞ？」

「あつ、いえつ、別に構いませんよっ？！」

「俺は物じゃないんだがな……」

そんなやり取りをしながら歩くこと5分程。何事も無く我が家に到着した。

「しばし待て」

「分かった」

そして自室に入ると、急いで制服から私服へと着替え、玄関の鍵と携帯をポケットに入れ、玄関先へと戻った。

「待たせたな。さっさと行こうか」

「そうだな」

家を出るとすぐに、刀佳は細い路地へと入って行った。自分もそれに続き、路地へと足を踏み入れた。如何やら刀佳はこの道を知っているらしく、その足取りには迷いが無かった。

「地理には詳しいのか？」

「通学区内限定だがな。流石に、区外となると大通りくらいしか覚えていない」

「それでも十分だと思うのだがな？」

「いや、まだまだだ」

そこで会話が途切れ、しばらく無言で歩き続けた。刀佳はこちら

と話しをしたそうだったが、如何やら振るべき話題が無いらしく、口を開いてはつぐみ、視線を向けては逸らすといった行為がしばらく続いた。

こちらとしては刀佳の話題の傾向を把握しておきたかったので、敢えて話題を振らず、黙って歩いていた。そんな静かな時だったからなのか、小さな異音が、やけにはつきりと聞こえた。

コポコポ……

その異音は例えるならば、水が湧き出す音に近かった。しかし、街中で水が湧く様な事態は滅多に無いし、かと言って排水溝に水が流れ込む音にしては、やけに異質過ぎた。

コポコポコポ……ゴポッゴポッ……

「（一体何処から聞こえてくる…？）」

音が近くなつて来ているという事は、こちら側か向こう側が、近付いているという証拠だ。あるいはその両方だ。それよりも、だ。歯車が軋むような音は結界が展開する音である。ならば、この水が湧くような音は、一体何が始まる音なのだろうか？

「ん？ 如何かしたのか藤魅？」

「今、何か見えた様な気がしてな……。多分、気の所為 何だアレは？」

咄嗟についた『嘘から出た真』と言うべきか、はたまたは、これまでの様に突発的『フラグ』と言うべきか？ それはさておき、黒い炎の様な物体が、路地の先に見える空き地から、次々と湧き出ていた。より精確には、黒い泉の様なモノから湧き出ていた。気にしなかったらおそらく気付かなかった。 と思えるほど、ソレの存在感は薄かった。

「なっ！？ 『ウィル・オ・ウィスプ 朧火』 ツ！！！？」

ソレらの光景を見た刀佳が、かなり貴重だと思われる驚きの声を上げた。常時冷静な態度を崩さない刀佳でも、驚く事はあるらしい。

「（しかし、あれが ）」

『魔人』出現の前兆か……。確か『朧火』は、死といった『負』に集まる何らかの存在で、そして『魔人』は地獄から這い上がって来る亡者とも、形を持った悪意とも言われているが、その情報の真偽は定かではない。

何故なら、『朧火』も『魔人』も“視覚でしか認識及び観測出来

ない”という特性上、その実態の多くが解明されていないのである。当然、情報の質はかなり低く、信用性は皆無に等しい。

フィヴィイイイイイイイイー……！！！！！！

「……何をしているんだ？」

新たな音の発生源である刀佳を見ると、笛みたいな物を咥え、思いつきり息を吹き込んでいた。かなりの大音量だったが、不思議と耳は痛くなかった。もしかすると、異音は鼓膜を通さずに知覚しているのかもしれない……。

「報せ笛を吹いている。しばらくすれば、増援が到着する手筈だ」

そう言いながら刀佳は、手にした笛を見せびらかした。大きさは手の小指程で、吹き込み口から鋭角な縁<sup>へり</sup>に息を当てて音を出す、エアリード方式の笛であった。それをスカートのポケットに戻しつつ、刀佳は何時もの様に落ち着いた口調で、忠告してきた。

「藤魅は家に戻っている。此処は危険だぞ？」

「そうだな。そうするとしよう」

「出来るだけ早く避難すると良い。でないとまた、結界に巻き込まれるぞ？」

「それは勘弁願いたい……」

1人だけ避難する事に対する僅かな罪悪感と、情報を得られない口惜しさもあったが、現在の身体スペックの仕様では、こちらの方が足手纏いになる事は確実なので、此処は大人しく身を引く事を選択した。

.....まあ実際のところ足手纏い云々（うんぬん）は嘘で、面倒事に巻き込まれたくないという感情が、主な行動理由であった。



## 第8話（後書き）

紅茶でマターリした後、まさかの『魔人』戦！？      と思わ  
せておいて、主人公撤退。やはり組織としての『破魔』とは、極力  
関わりたくないようです。刀佳への友好度が高くなれば、話もまた  
別でしょうが……。

ところで、紅茶についての<sup>うんちく</sup>蒔蓄ですが、ぶっちゃけますとwiki  
iから引用した文章を元に使わせてもらっています。ありがとうございますw  
iki先生！！

ちなみに第9話の投稿は、今月の第4週を予定しております。多  
分、23日になると思う。……思います。乞うご期待。

オーバー

## 第9話（前書き）

この作品は、11月23日の26時頃に投稿されました。

作者「……………まさに時間通り!!」

明らかに<sup>タイムオーバー</sup>時間超過です。本当に有り難う御座いました。では、以下の本編をどうぞ。

## 第9話

転生者が、敵にたくないモノは3つある。1つ目は『女性』、2つ目は『超越体』、そして3つ目が『未知』である。1つ目の『女性』は、転生者が高確率で男性に転生するが故に。次に2つ目である『超越体』とは、一般的には『神』と呼ばれる存在で、降<sup>くだ</sup>そうが消滅させようが、事後処理も含めて面倒な為。そして最後の『未知』は、転生者を殺し得る唯一の可能性であり、転生者の好奇心を満たす得る唯一の可能性でもあるからだ。

「降参しろ。お前が戦女神である事を除いても、此処で失うには惜しい人材だ」

「慈悲など要らぬっ！ さっさとその神槍で、この私を突き殺すがいいー！」

「……………参謀長、こいつを説得する何か良い考えは無いか？」

「うーん……。お望み通りさくつと殺って、ぱぱつと生き返らせれば宜しいかとー？ そーすれば、どちらの希望も叶いますしねー」

「……………それもそうだな」

「待て。それは如何いう意味……………ぐぼっ……………」

「伝令、医務長を呼んで来い。重傷者1名、即死状態。とな」

「はっー！」

〃

「『初日のジンクス・続』後編 / 初日考察。そして長女の宣戦布告」

「さて、如何したものか……」

元来た道を戻ったのは良かったが、途中で歯車が軋む様な音と共に結界が発動し、案の定、また内側に閉じ込められてしまった。本日2度目の体験である。

「（先程の場所から500m以上は離れているんだがな……）」

安全確保の為に、わざと広めに結界を張ったのだろう。『魔人』がどれ程の脅威なのかは知らないが、これだけ用心する必要があるという証拠でもある。……まったく、これ程の大規模になる事が分かっていれば、

「（まあ、今更後悔したところで仕方が無い。次善を考えるでしょう）」

さて、この場合の次善は、何とすべきなのだろうか？ この状況を利用して、『破魔』に関する情報を集める事か？ それとも、面倒事に巻き込まれない様に回避を選択する事か？ はたまたは、この結界から脱出する方法を模索する事か？

「（……………情報は惜しいが、此处は回避と脱出を念頭に行動する

としよう。」「

情報を集めようとすれば、刀佳を含む『破魔』の関係者達に気付かれるだろうし、『魔人』に襲われる可能性もある。……それに、また応接室に呼び出される可能性がかなり高い。そうなるぐらいなら、さっさと結界から脱出した方がマシだろう。

「（取り敢えず、結界の境界まで近付くとするか……）」

それから2分ばかり歩き、境界の10m程手前で足を止めた。情報収集のやり方は、図書館でしたやり方と同じく、物を投げ付ける事で反応を見てみる。しかし流石に本は近くに無かったので、道端に落ちていた小石を本の代わりとし、投擲してみる。

すると図書館の時とは違い、石は結界に弾かれ、そのまま地面へと落ちた。出来れば比較検証の為に本も投擲したかったが、やはり無い物は無いので、此处は諦めるとする。

「（斥力が働いているな……。つまりこの結界は、内側のモノを閉じ込める為の檻　という事か？）」「

結界は基本的に『隠蔽』、『隔離』、『守護』の3つを目的としており、この場合は『隠蔽』と『隔離』を兼ねた複合結界なのだろう。より正確に言うならば、『内部隠蔽』と『外部隔離』を兼ねた複合結界と言うべきか？　試しに手で触れてみたが、やはり結界を擦り抜け、外側へと突き出た。

おそらく今、結界の外側からは手が宙に浮いている様に見えるのかもしれない。

「（……まるでC級ホラーだな。しかも、お粗末過ぎて笑えない類（たぐい）の）」

“結界の違い”という情報を手に入れただけでも、良しとすべきなのだろう。そう自分を納得させつつ、結界を通り抜けた。すると音や風が戻り、蒸し暑さも戻って来た。どうやら結界は、人以外も色々と隔離しているらしい。

「さて、帰るか……」

無論、“結界内に”ではなく“家に”だが。

（  
）

「ただいま」

「……………」

「あ、お帰り〜理貴くん。早かったね？」

「まあ、色々とな……………」

家に帰宅し居間に入ると、長女と次女と母親が居た。次女は母親が倒れた一件以来、こちらと距離を置いているらしく、和解する気は未だに無さそうである。ちなみに母親は台所で料理をしている為、こちらの挨拶には気付かなかったようだ。三女は文学少女らしく、自室で読書でもしているのだろう。

「ところで駄目姉、忘れない内に240円を回収しておきたいんだが？」

「うつつ……。やっぱり、覚えているよね……」

「今、取って来るから……」と言いつつ、とぼとぼ居間を出て行った。確かに、自分達のお小遣い（月に2千円）からして240円は全額の1割2分に値するが、それ程落ち込むものなのだろうか？もしかすると、駄目姉なりに買いたい物があるのかもしれないが……。こちらの知った事では無い。

「ねえ……」

「何だ？」

実に3日振りに次女から訊ねて来たので、一体どんな罵倒の言葉を吐き出すのかと、若干心の中で身構えつつ、無愛想に聞き返した。

「別に、240円くらい奢ってあげなさいよ。男でしょ？」

「だから器量を見せろと？」

「そうよ」

この時自分は、彼女の存在を半ば無視しつつ、その発言に至った彼女の思考を推測し、その結果を元に対策を練っていた。

彼女との親密度からして、先の発言は自分を家族の1人と認めた上での発言では無いだろう。      とすると、先の発言はこちらに對する嫌味であり、同時に排除意識の表れなのかもしれない。

であれば、今後彼女に対する発言及び行動は、他人同士の関係で問題無いと思われる。それでも一応、歩み寄りの選択肢は残しておくが…。

取り敢えず此処は軽くあしらって、適当に話を打ち切るとしよう。喧嘩腰で会話を続けても非生産的だし、それにもう暫くすれば、駄目姉が戻って来るはず…。

「そうだな。参考にしておこう」

「くっ……それに霞凜姉かりんさんを“駄目姉”呼ばわりとか、あんた何様のつもりなの?！」

「義兄にい様のつもりだ。それが如何かしたのか?」

「少なくとも、私はあんたを義兄あにだなんて認めないっ! それに霞凜姉さんは勉強が出来て、バスケも出来て、裁縫も出来る。少なくとも、あんたよりは駄目じゃないわよ!！」

彼女からしてみれば、あんな姉でも自慢の姉なのだろう。それを馬鹿にされて怒っているのだろうが

「（ふん。勘違いも甚<sup>はなは</sup>だしい……）」

自分は次女が思い込んでいる様に、長女を能力面で馬鹿にしている訳では無い。どちらかと言えば、性格・行動・知識面で馬鹿にしているだけである。尤も、バスケに関しては技量や判断力の点で、こちらが秀でている事は先日で確認済みだ。

「そのまま勘違いしている。少なくとも自分は、  
「理貴くん、240円持って来たよ）」

好意的に接しているつもりだ。と言おうとしたところで、駄目姉が居間に戻って来た。朝の登場が出遅れたから、今度は早めに来たつもりなのだろうか？

「うん？ 私が如何かしたの？」

こちらの視線に気付いたのだろう。髪を整えたり、服に埃や塵が付いていないか如何かを確かめながら、駄目姉は不思議そうに訊いて来た。この誤った反応を見る限り、駄目姉に『空気を読む程度の能力』を期待するのは、仕<sup>スベック</sup>樣的に酷なのかもしれない。

「……いや、何でも無い」

そう言った直後、思わぬ伏兵が現れた。

「みんなー、御飯出来たわよ」

母親だった。

「……どうやら、母親には『空気を読む程度の能力』があるらしい。  
とすると、

「なるほど。母親から遺伝しなかったのか…」

「えっ？ 何のこと？」

「いや、何でも無い」

「むー……。さっきから一体何なのさ？」

「気にするな。ハゲにするぞ」

「なるんじゃないくて、するのっ?!」

「ああ。そのつもりだ」

「しかも予定済み!？」

「いや、そうなる」

「断言しちゃった!!？」

こうして暫く、次女を放置して長女と戯れていると、母親の「乳繰り合うのは食後にして頂戴」という意図的と思えない発言により、長女が羞恥心で顔を赤らめ、次女がその様子を見て勘違いし、また激怒。それを軽くいなししていると、三女が2階から降りて来て「うるさい」と一喝し、その場は如何にか収まった。

それから、ギスギスとした（次女が自分に対して一方的に、だが）空気の中で食事を終え、順番に入浴した後、ようやく独りになれる時間が出来た。そして、今日一日を要約し得る言葉を探し、考え抜いた末に呟いた。

「……………長かった……………」

朝の一悶着に始まり、元親友や元幼馴染を始めクラスメイト達と再会し、図書館や体育館での騒動を経て、放課後のティータイムで一息付いた数十分後には『朧火』と遭遇し、また結果に巻き込まれるも脱出。そしてまた一悶着を経た後に、ようやく開始地点<sup>スタート</sup>へと戻って来た訳だ。

「（流石、恋愛系統の世界だ。忤<sup>まま</sup>ならん……）」

かなり昔の事だが、恋愛系統の世界へ転生した事があった。とは言え、そこは『観測された世界』で、自分は町人Aだったり学生Aとして転生した訳だが……。そこで情報を集めている内に、分かった事が1つあった。

それは、観測された人物達が、必ずしも観測された結果通りに動かないという事である。

観測された結果通りに動かないのは、こちらが有り得た結果を観測しただけであって、必ずしもそうなる事は無い。という事なのだろう。

尤も、『観測された世界』から派生した『観測した世界』の場合は、ほぼ観測した通り事が進むのだろう。どちらにせよ、主人公として観測された人物は、色々と巻き込まれる宿命にあったようだが……。

……つまりとところ自分もまた、巻き込まれやすい宿命にあるようだった。今日の様に此処まで露骨だと、第三者による運命操作論をついつい疑ってしまう。

「（尤も、操作されているのは周囲の人物だけになるだろうが……）」

何故そう思えるのかと言うと、自分には、『神秘的干渉を無効化する能力』が備わっているからである。……いや、「備わっている」と言うよりは、「前世から持ち込んだ」が適当か？ まあ、とにかく、自分にはそういった能力が有るのだ。

神秘的干渉とは、『魔法・呪術・運命・奇跡といった神秘的要素による干渉』を指しており、魔法による攻撃や、呪術による呪殺。そして運命操作による絶対死の運命すら、無効化する事が可能なのである。

ちなみに此処で言う干渉とは、『転生者である自分の精神や意志、生命活動に対し、他者が介入する事』を指している。

「（……そんな事よりも、優先対策事項があつたな）」

今日一日の行動を振り返って反省すべき点は、組織としての『破魔』に目を付けられた事だろう。『破魔』が絡むと、組織抗争ないし事件、または厄介事に巻き込まれるのは、体育館や『魔人』の一件で良く分かった。

ではこれからこの先、『破魔』が絡まない様に学校生活を送るには、一体如何すれば良いのだろうか？ 一番簡単なのは、何もしい事である。図書館を利用せず、変な場所には近寄らず、以前の様な学校生活を送れば良い。しかしそれでは、あまりにも学校生活がつまらない。そうするぐらいなら、まだ町を歩いていた方がマシだろう。

とするとやはり、今まで通り自然体で過ごすに限るな…。

その方がボロも少なく、上手く立ち回れる事だろう。

「（他に対策事項は……無いな。ならば後は、異音について考察するぐらいか？）」

尤も、これについては大体考察し終えており、後は前例を探すだけとなるのだが、おそらくこの身体には、『神秘を異音として、聴覚で感じ取る能力』があるのだろう。疑問なのはその能力が何時覚醒したのかだが、図書館の時から、またはそれ以前には覚醒していたと思われる。

「（ま、不便でなければ、特に問題は無いな）」

そう。常時発動しっぱなしの魔眼や、煌々と光る刻印。背中に生える一対の翼や、高密度の魔力を貯蔵する為の尻尾や角と比べれば、この程度の能力はまだマシと言えよう。

ガチャガチャ…

「理貴く〜ん。何で鍵なんか掛けているの〜？」

「まずはノックしろ。話はそれからだ」

「こーん、こーん」

と言いながら、ドアをノックする駄目姉。本当に、内鍵を掛ける様にして良かったと思う。こうして駄目姉による、突然の来訪（不正侵入）を物理的に防げるのだから。

「で、何の用だ？」

「お姉さんらしく、勉強でも教えてあげようかな？　って思ってたの」

「ああ、それなら間に合っている。帰って良いぞ？」

「えー、だって2ヶ月分だよ？　それに期末テストまであと僅かだし……。本当に大丈夫なの？」

そう言えば、そういうイベントも近々あったな……。

「これでも山勘は結構当たる方だな。心配は要らん。むしろ、自分の学力の方を心配したら如何だ？」

「大丈夫だから心配出来るんだよ。……本当に大丈夫なの理貴くん？」

「くどい。何なら、主要5教科の総合点数を競っても良いぞ？」

ちなみに此処で言う主要5教科とは、国語・数学・共通語・理科・社会である。どうもこの世界には、国際統一された言語が存在するらしく、それを第二母国語として学習するのだそうだ。

「ふーん……。じゃあ、私が勝ったら、理貴くんの時間を1日分もらうね？」

此処でフラグか……。まあ、立てておいても問題無いだろう。こちらが勝てば、1日中静かに過ごせるだけだしな。

「なら、こちらと同じく、そちらの時間を1日分もらうとしよう。それで良いな？」

「うん。それで良いよ。でも、やるからには負けないんだからね！」

「ふん、元よりこちらもそのつもりだ。2ヶ月分の空白など、有って無きに等しいと思え」

こうして互いに宣戦布告し、期末テストの総合点数を競う事になった。とは言え、テストまであと4週間もあるんだが……。ま、今日から取り組んでも早くは無いだろう。

「（今後、学習する暇が有るか如何かも不明だしな……）」

“有り得ない”という言葉が“有り得ない”世界故に。

## 第9話（後書き）

今回、前書きでも書いた様な有様ですので、急いで投稿した分、推敲不足の部分が有る可能性も有ります。まあ、暇を見つけては「推敲 再投稿」と何時もの作業をしますが、それ程変わらないので気にしなくても結構です。

ちなみに気付かれた人もいるでしょうが、訂正しまくった例の話で述べていた未公開設定が、今回明かされております。戦闘場面が無いので地味に思えるかもしれませんが、チートです。チートな主人公です。これだけは覚えておいて下さい。

……さて、次の投稿予定日ですが、<sup>ストップ</sup>余裕も欲しいので12月の第4週辺りになると思います。それまでは、他の作品でもお楽しみ下さいませ。

オーバー  
以上。

## 第10話（前書き）

作者A「やっぱり予定は未定だったんだ!!」  
作者B・C・D「な、何だって〜〜〜!!?」

投稿予定日を1日ばかり超過してしまいました。 済みません。では、以下の本編をどうぞ。

## 第10話

招かれざる客。それは敵や認められない相手であつたり、忌避する人物や憎悪を抱く対象であつたりする。気に食わない。むかつく。許せない。迷惑。劣等感から来る妬み。優越感から来る嫌悪。理由は実に様々だが、要するに、特定の場所や行事に来て欲しくないモノが来る事を意味しており、排除意識の婉曲的表現と捉えても問題無いだろう。

「理貴、ちよつと来てちようだいな」

「何用だ母さん？」

「窓際に居る蜘蛛を追い出して欲しいのよ。頼めるかしら？」

「まあ、構わないが……。やはり、虫は苦手な方なのか？」

「ええ。例え益虫でもあまり近付きたくはないわね……」

「なるほど。……ところで、害虫が出た場合は如何対処するんだ？」

「勿論、全力で駆除するに決まっているじゃないの」

〃

「早朝の来訪者 / 歓迎する者、される者」

翌朝、6時に目覚めてからある事に気付いた。思えば今日は、臨時休校であつたと。

「……取り敢えず、身支度でもするか」

寝間着から適当な私服に着替え、顔を洗い、髪を整え、牛乳をレンジで温めた後に市販のココアパウダーを溶かし混ぜ、目覚まし用のココアを作る。

人によつてはココアパウダーを御湯で溶かし、少量の牛乳を入れたりして飲むそうだが、私的に濃厚さが足りなくなる為、自分は前者の方法で飲む様にしている。尤も、単に濃厚さが欲しい時は、豆乳を牛乳の代わりに入れたりもするが…。

そんなことはともかく  
閑話休題。

そしてココアを飲みつつ、報道番組を見たり新聞を読んだりした後、カップを洗って乾燥機の中に置き、自室へと戻った。勿論、内鍵は掛けている。

「（さて、今日は何をする？）」

ほんの4日前に行った市立図書館に、再び足を向けるのも良し。未知を求めて市内を散策するのも良し。敢えて家に籠って、情報端末機で情報を収集するのも良いだろう。

「（それに、この世界のゲームをするのもまた一興）」

この世界は科学技術が非常に発達しており、オンラインゲームや格闘ゲームの一部では、脳波を精確に読み取り、仮想体アバターに動きを反映させるといった事が可能らしい。それ以外にも普通のゲームもあれば、将棋やチェスなどの古典的ゲームもあるので、飽きる事はまず無いだろう。

「（昨日の図書館の時もそうだったが、こういった何気無い選択肢が案外重要だったりするからな…）」

そうこう思案している内に、家中に有線通話装置の呼び鈴チャイムの音が、電子的に鳴り響いた。我が家の有線通話装置は、玄関脇と居間にある1対だけなので、誰かが来訪したという事なのだろう。居間へと向かい、有線通話装置インターホンの受話器を取って、通話状態にする。

「早朝から何用だ刀佳？」

玄関脇の有線通話装置に付いているカメラからの映像を見つつ、そう切り出す。

「ほう、私の姿が見えるのか？」

「……呼び鈴の横に、カメラが付いているのは分かるか？」

「…なるほど。最近のはそういう作りなのだな」

うんうん。と妙に感心している刀佳が落ち着く頃合を見計らい、再び切り出す。

「それで、早朝から何用だ？」

「うむ。実は昨日の件について、色々と個人的に礼やら話しをしたいのだな。そちらが良ければ、私が仮住まいしている屋敷にまで来てくれないだろうか？」

……どうやら先程の選択肢は、制限時間付きの選択肢であつたらしい。特に予定も無いので不都合では無いのだが、刀佳が組織としての『破魔』の関係者である事と、“屋敷”という単語が妙に引っ掛かり、素直に領けないでいた。

と言うか、『刀佳と共に行動する』面倒事に巻き込まれる』という公式は、既に自分の中に確立されており、ほぼ確実に何かしら起こるだろうと予測していたからでもあった。

「今からか？」

「出来れば、な。用事があるなら、また後日に日を改めるが如何に？」

如何やら、どのみち強制イベントであるらしい。それに態々（わざわざ）出向いて来た刀佳を追い返すというのも、酷（こく）というものだろう。

「そこで40秒待て」

「？ ああ、別に構わないが……」

返事を聞き終える前に自室に戻り、鍵と財布と携帯電話をポケットに入れ、上着を羽織り、靴下をはき、自室を出て靴を履いて玄関先へと出る。それから鍵を掛け、刀佳へと向き直る。

「待たせたな。それでは案内を頼む」

「ああ、頼まれた」

そして住宅街を抜け、国道を横切り、近道だと思われる路地を通り、墓場を通過し、山道へと入り、鳥居をくぐり抜け、険しい石段を登り続け、ようやく刀佳の言う“屋敷”らしき建物が見えた。所要時間にして、1時間と少し。学校までの距離も然程変わらないとの事なので、刀佳は学校を往復する度に、約2時間分歩いている計算となる。

如何やら、学校の行き来ですら修行の一環であるらしい。流石に、雨や雪の日はバスを利用していらしいが…。

ちなみに、道中でコンビニに寄って朝食代わりのおにぎりでも買おうとしたところ、刀佳がお礼の一環で朝食を振舞ってくれるらしく、買う必要は無いと言われた。道理で、早朝から訪問して来た訳だ。

「しかし…、空腹状態で1時間歩くのは如何かと思うぞ……」

一時期、食事を取らずに済む身体で過ごした経験もあり、空腹にならない状態は慣れているが、空腹の状態は我慢出来ても慣れてはいない。やはり、三大欲求の飢えは生物的に死活問題なのだろう。そう考えると、人間の身体はよく出来ていると思える。

「私もそう思ったのだが……。師範が如何してもと言うので、こうして迎えに来た訳だ。確かに屋敷の料理は上手いが、何も付き合わず必要は」

「いや、そうじゃなくてだな……。何故、交通機関を使わずに歩いたのか？ と婉曲的に問いかけたつもりだったんだが、これでは直接的に問い掛けた事になるな」

まあ、目的を達成したのだから良しとするが。

「そういう事か。なに、今の内に会話しておこうと思ってな。師範の事だからおそらく、藤魅に剣術を体験させる筈だ。となると必然、会話する時間も限られてしまう。だからこうして会話を先取りしているという訳だ。済まないな」

それから、「こつちだ」と刀佳に案内され、がっしりとした木の  
大門　の脇にある小さな扉から、屋敷の敷地内へと入った。中はよくある武家屋敷の造りをしており、庭園はやはり日本庭園であった。時々、カコーンと聞こえて来ることから、鹿<sup>ししおと</sup>脅しも何処かに在るのだろう。もしかすると、枯山水も何処かに在るのかもしれない。

「良い場所だな」

雰囲氣的にも、拠点的にも。

「当然だ。そうなる様に、そうである様に、日々手入れを欠かして  
いないからな」

「そうか…」

辺りをさり気無く見渡す。屋敷の周辺には、結界が二重三重に張り巡らされ、齒車が軋む様な音が絶えず響いていた。地面には何かしらの陣が等間隔に敷き詰められ、監視用と思われる式が至るところで鳥などの動物に擬態し、周囲を見渡していた。この嚴重さはまさに、『要塞』と言っても過言ではないだろう。

それ程、守らなくてはいけないのか、はたまたは警戒しなくてはならない理由が存在するのか…。どちらにせよ、現在の自分とは無縁でしかなく、今のところ“見える”事による、自身の挙動不審に注意しなくてはならない程度の害でしかない。

「（しかしやはり、日本では東洋魔術が基礎となっているようだな。まあ、当然と言えば当然の事だが…）」

そんな事を考えながら歩いていると、やや前方を歩いていた刀佳が横に並び、神妙な顔付きで話し掛けてきた。

「さて……、そろそろ師範の居る道場に着くのだが、1つだけ注意しておこう。今まで私は、人を招待した事が無くてな。それ故に、師範はお前に興味を持ったらしい。だから何かしら反応を探る様な行動をしてきても、何時も通り冷静に対処して欲しい。何故か師範は、新顔には悪振る癖があるからな……」

「留意しておこう。（早速、面倒事に巻き込まれそうだ……）」

段々道場に近づくにつれて、竹刀の激しく打ち合う音が道場内で反響し合い、箆った様な音として道場の外にまで聞えてきた。音量と音が切れない事から、それなりの人数が打ち合っている事を思わせた。

「失礼します」

刀佳は竹刀の音に掻き消されながらも、そう一言断った後、静かに入室した。自分もそれに倣い、一言断り入室した。壁沿いを歩き、師範らしき人物の元にまで近寄る。

「師範、只今戻りました」

刀佳がそう報告すると

「ほう、そいつが例の小童か。御主、名は何と言つ？」

60歳台の厳つい男性が、自分を見定める様に視線を巡らしつつ、そう訊ねてきた。顔や腕の至るところに刀傷らしき傷が走っており、黒いスーツを着ればヤクザと見間違えられる程に、強面の漢であった。

その上、身に纏う雰囲気威圧感を放っており、初見の人では十中八九、気圧されてしまい、会話が成り立たないか、途切れ途切れになるのだらうと思えた。

それほど、威圧感のある人物なのである。「ならば貴君もまた気圧されるのか？」と問われれば、「無風に等しい」としか答えるしかない。

こちらとて伊達に転生はしておらず、殺気で一般人（ヤンキー、チンピラ等）を急性心臓麻痺にして病院送りにした人物や、闘気で地盤沈下させる様な人物とも、殺り合ったり、死合（試合）したりしているのである。故に、刀佳の師範程度では圧されるところか、こちらから物理的に押し潰す事も可能なのだ。

尤も、状況的にも人物的にもするに値しないので、押し潰す“気すら湧かないのだが…”。

「『藤魅 理貴』と申します」

「ふむ、なかなか肝が据わっておるな…。刀佳、少し相手をしてやれ」

「承知。      と言う訳で、少しばかり付き合ってくれないか藤魅？」

有無を言わず、竹刀<sup>しな</sup>を手渡してくる刀佳。つまりこれもまた、強制イベントの1つなのだろう。如何も刀佳となると、強制イベントが発生しやすい気がしてならない。      いや、実際にそうなのだろう。

正直なところ、彼女を攻略する側としては遣りやすい事この上無いが、攻略する気が無い自分にとっては、面倒この上無い展開である。……まあ、恋愛感情を友愛感情に誘導するぐらいは出来るので、実質問題は無い。      と思う。

そう考える合間にも、上着や靴下を脱いだり、貴重品をポケットから出したりと、試合の準備は着々と進んで行った。対する刀佳は既に準備万端な様で、軽く素振りをしつつ、規則<sup>ルール</sup>を説明し始めた。それによると、今回は防具を着けない慣らし試合なので、突きは禁止。その他にも刀身部分を掴んだり、執拗な追い討ちや武器の投擲、罵倒するのも禁止らしい。それ以外なら“何でも有り”で、有効打を先に3回入れた方を勝者とするそうだ。若干、剣道<sup>ルール</sup>の規則とも似ている。

「他に、聞きたい事はあるか？」

「……仮にだが、殴り蹴り、投げが決まった場合、それは有効打と判定されるのか？」

「いや、あくまで竹刀による一撃が有効打だ。私達がするのは剣術の試合であって、総合格闘技の試合ではないからな」

刀佳はそう言いつつ、両手で竹刀を正面に構え、剣先をこちらの

目線の高さに合わせ、半歩前に右足を出した。それに対し自分は、左手で竹刀を垂直に前に突き出し、半歩後ろに右足を引いた。互いに距離は5m前後。詰めようと思えば、直ぐにでも詰められる距離である。

「ほう、随分と面白い構えをするのだな藤魅。質問はこれで終わるか？」

「ああ。何時始めても良いぞ？」

「では、いざ尋常に……」

「勝負」

7時47分。静かに試合が、始まった。

## 第10話（後書き）

『後書きとか、作者の愚痴とか』

実はこの第10話。突貫で完成させたものです。最終投稿日以降、何をしていたのかって？ 二次創作物を書いてみたり、ラノベを読んだり、モンハン3rdで狩りをしたりしていました。当然、ストックは零。無計画って怖いですね……。

よって、次の投稿までかなり間が空きます。次回の予定日は、来年1月の中旬頃。早ければ上旬といったところです。

ところで、1日遅れですがメリクリ。作者はその日、知人からPC版の『SNOW』を貰いました。何と500円以下だったそうです。時代の流れは恐ろしい…。

オーバー！。

## 第11話（前書き）

最近、プロット無しの一次創作の難しさが分かって来た作者です。「なら、プロット書けば良いじゃん」と言われそうですが、展開が決まっていないが故の展開の自由さも捨て難く……。

ちなみに、今回は難産でした。戦闘シーンを書くのは好きなんです、格闘シーンを書くのだけは苦手です……。手足の動きとかよく分からないんですよ。

それでは、以下の本編をどうぞ。

## 第11話

武術や武道における一対一の試合の場合、勝負は威圧と牽制から始まる。それが試合前の会話であったり、試合中での構えや発声、手足の急な動作であつたりする。ただし、即決即断や単純思考をしがちな野性派の相手に対しては、そこまでの効果は見込めない。ならば如何するべきか？ その場合はパブロフの犬の如く、『攻めれば反撃される』という事を理解するまで反撃すれば良いのである。

「結局、実力差があれば如何とでもなるのだがな」

「しかし勝負の世界において、それは先読みと並ぶくらいに重要ではでは？」

「威圧はそうだが、牽制はそうでも無い」

「何故なにゆえそう思うので？」

「牽制より誘導が重要だからだ」

「それじゃ、牽制を挙げた理由について一言」

「牽制が比較的容易だからだ」

（ ）

第11話：因果応報『切り札』編

静寂。そう、今道場は静寂に包まれていた。おそらく師範辺りが、要らない気を利かせてくれたのだろう。……まあそのお陰で、こうして思考に浸れる訳だが。

「（さて、どのような試合内容にすべきか…？）」

正直なところ、勝つだけなら簡単に出来る。しかし、簡単に勝てばフラグが乱立しかねない為、当然却下。かと言って簡単に負けるのも癪なので、これも却下する。となると

「如何した藤魅？ 攻めぬならこちらから攻めるぞ？」

「別に構わないが…」

取り敢えず今は、目先のイベントに集中するとうしよう。あまり上の空では、刀佳に対して失礼というものだ。……尤も、決まりきった勝敗を如何にかしようと模索すること自体が、刀佳に対して失礼か？

「いざ、参る！」

見事な摺り足で踏み込んで来る刀佳に対し、自分はその動作を眺めながらも待ち構えていた。そして刀佳の攻撃圏内に、自分が突き出している竹刀の刀身が入った瞬間、刀佳はそれを打ち払おうとするが、円を描く様に切っ先を回す事で払いをかわしつつ、踏み込みながら胴をなぞる様に竹刀を振り抜き、刀佳の背後へと出た。

これらの攻防を要約するのは簡単だ。単に見切って、素早く反撃した。たったそれだけの事なのだが、鍛えてすらもないこの身体

では、通常では見切るどころか回避すら出来ず、反撃する事も叶わないだろう。ならば何故、見切りと反撃が出来たのか？

その答えは、至極簡潔である。見切るには動体視力は勿論、ある程度の思考速度が必要である。そして人間の筋肉は、傷付くのを防ぐ為、最大の2〜3割程度しか力を出せない様に制限が掛かっている。ならば、思考速度を引き上げ、制限の上限値を引き上げれば良いだけの事。

幸いこの世界の人間は、体内分泌物による身体能力の強化が容易だったので、こうして鍛えずとも刀佳を相手に立ち回れるのである。

しかしその反面、筋肉や脳の酷使による代償として、筋肉痛・立ち眩み・頭痛・内出血・筋繊維断裂などの諸症状が起こり得るが、経歴上ズブの素人が経験者に勝つ方法としてはこの上無い方法なのもまた確かなので、代償については甘受せざるを得ない。

ちなみに、身体能力の任意の活性化については、事故による後遺症という設定で通すつもりだ。

## 閑話休題

「一本っ！」

これを有効打と判定した師範がそう宣言すると、途端に周囲がざわめき始める。「有り得ない」、「まさか」、「まぐれだろ」等々取り敢えず外野、黙れ。元々無いやる気が加速度的に削がれて行く

上、居る事自体が目障りだ。

「やるな藤魅……。予想以上で驚いたぞ？」

「自分も、此処まで出来るとは思ってもみなかったがな……」

スベック  
基本能力の低い今の身体で、人間よりとはいえ亜人の『破魔』に反撃出来るとは“思ってもみなかった”。もしかすると、『破魔』は力を出すのに何かしらの条件や制限が掛かっている種族なのかもしれないが、どのみち本気を“出さない”ないし“出せない”のならば、このまま勝たせて貰うだけである。

「だが、もう油断はしない。次は本気で行かせてもらう」

「……立ったな。敗北フラグ」

ただの験担ぎに過ぎないが、それでも先の刀佳の自己発言により、彼女の低い勝率が更に下がった様な気がした。ちなみにこの場合、「やはり、心躍る戦いとはこうでなくてはな」や「では、2戦目と行こうか？」などの発言が適当だと思われる。

「ん、何か言ったか？」

「いや、何でも無い。今度はこちらから攻めさせて貰う」

「来い」

低く跳躍する様に距離を詰め、左手で持った竹刀で外から内へと

足払いをする。それを刀佳は足を入れ替えながら後退する事でかわし、中段辺りにある自分の頭へ竹刀を打ち下ろしてくるが、振り戻した竹刀で難無く防ぎ、腕が軋むのにも構わず勢い良く弾き上げる。それに続けて、隙だらけの刀佳の顔面へ躊躇い無く右拳を突き出す。

すると予想通り、反射行動で身を守ろうと竹刀を盾に拳を防ごうとしていたので、すぐさま拳を解いて刀佳の手ごと竹刀の柄を掴みつつ、逆手に持ち直した竹刀で刀佳の右脇腹を狙う。が、拘束されなかった左手でこちらの腕の振りを止めた為、腹を蹴飛ばす事で刀佳の体勢を崩し、追撃を行うべく重心を前へと傾ける。

「くっ……!!」

その際、体勢を崩しながらも牽制で振り払ってきた竹刀を潜る事でかわし、瞬時の切り返しを竹刀で防ぎつつ、もう一度蹴飛ばす。

「がつ?!」

そして更に踏み込み、進路の妨げとなる竹刀を刀佳の手から弾き飛ばしたところで三度蹴飛ばす。

「痛っ……!! おいつ……!!」

若干苛付いた問い掛けを聞き流し、本日四度目となる蹴りを空中

から繰り出す。

「っ！！！！」

その攻撃を防御する為に交差した刀佳の腕が、みしみしと嫌な悲鳴を上げ、殺せなかった分の衝撃が、刀佳を外野へと押し飛ばす。かく言う自分の足もまた悲鳴を上げており、もう一度今の威力で蹴り出せば確実に折れる様な気がする程、不味い状態である。……正直、調子に乗り過ぎた様な気がする。

「……………なあ、藤魅……………」

「何だ？」

「一応、私も女子おんなこなのでな……。あまり……、けほっ……………、足蹴にされると、……………地味にへこむのだが？」

そう言いつつ、ふらつきながらも立ち上がる刀佳。蹴りの衝撃が余程強かったのか、胸をさすり、呼吸を整えている。

「反省はしている。　　が、後悔はしていない。戦術的には有効だったようだしな」

「確かに……。ところで、降参しても良いだろうか？　しばらく竹刀を握れそうにない」

蹴りを直接受けた刀佳の右腕は、見事に腫れ上がっており、しば

らくすれば痣になるであろう事は一目瞭然であつた。

正直な話、こちらも限界に近付いていたところなので、この提案は非常に有り難かつた。先程から立ち眩む程の頭痛がし、竹刀を振り回していた左腕はかなり痛めており、激痛が絶えず走っている。当然、足も例に漏れず酷く痛む。

「良いから早く冷やして来い。痣が大きくなるぞ？」

「その前に、だ」

刀佳は静かに膝を折り、その場で正座した。如何やらそれが降参の合図のようで、外野がより一層騒ぎ出すも、師範が一喝することです態は収拾した。その後、刀佳は医務室へと向かい、自分は食堂へと案内された。

食堂と言っても広い畳部屋に座布団を敷き、全員で囲む様に食事をする方式らしく、既に配膳は済んでおり、後は各々席に着くだけであつた。

「（これで華やかだったら、宴会の席に様変わりなんだがな……）」

如何見ても、現代版の土族の食事風景にしか見えない。とは言え、上座から位の高い順に座る様な本格的なモノでも無さそうだが、妙に張り詰めた空気がそれを連想させる。ちなみに、何故か自分の右隣が師範で、左隣が空席となっている。おそらく其処に、刀佳が座るのだらう。……………何だこの板挟みの布陣は？

「（単なる客人への配慮。　と考えるのは浅慮か？）」

そう思考を張り巡らせていると、両腕に包帯を巻いた刀佳が食堂へと入室し、予想通り自分の左隣の座布団へと腰を降ろした。しかし、両手にではなく片手に花か……。まあ、まだマシだと思っておこう。

「合掌！！」

師範が突然そう叫ぶと、自分を除く46名分の「頂きます！！！！」の声が食堂に響き渡り、それから皆一斉に朝食を食べ始めた。自分も遅ればせながら「頂きます」と手を合わせた後、箸を手にする。

「ところで御主」

すると早速、師範から問い掛けられた。位置的に何かしら行動を起こすとは思っていたが、こうも早い段階で仕掛けて来るとはな……。…。

「武術経験は有るか？」  
「無いですね」

尤も、この世界に限った話だが。

「ほう……？ では、刀佳の攻撃を悉く見切ったのは偶然だと？」

「……………逆に聞きますが、見切るには武術経験が必須なのでしょうか？」

香りが良い鰹出汁の味噌汁を啜り、師範の問いに問いを返す。

「武道や喧嘩の中でも構わぬが、間合いの測り方は一朝一夕で身に付くモノではない。例え、天賦の才を持っていたとしてもだ」

「……………ところで師範殿は、体感時間という言葉を知っていますか？」

体感時間とは、基本的に1分間当たりの心拍数に比例する。人間を基準にすると、人間は1分間で60拍なのだが、象は1分間で20拍。従って、象から見た人間の動きは、3倍速に見えるのだそうだ。

「知ってはいるが、それが如何したというのだ？」

「思考速度を引き上げれば、体感時間は比例して伸びると思いませんか？」

此处で、『ゼノンの矢』について説明しようと思う。『ゼノンの矢』とは、「飛んでいる矢のある区間を無限に区切って観察すると、矢は進むだけの時間を得られず、その場で止まっていると見做せる。

従って、飛んでいる矢は止まっている」といった内容のパラドックスである。

つまり、無限に区切った1つ1つを観察出来るだけの思考速度情報処理能力　が有れば、体感時間的には、矢は止まって見えると述べているのだ。勿論、実際に時間が止まる訳では無いので、現実時間的には、矢は物理法則以外の法則に止められる事は無い。

「まさか御主……」

先程の説明で理解出来たのか、それっきり黙り込む師範。その隙に、中断していた食事を再開する。それにしても、朝からアジの開きが出て来るとはな……。カルシウムで骨を強くしろという事なのだろうか？　まあ、焼き魚を出されるよりはマシなのかもしれない。そう思いつつパリパリ食べていると、ずっと静かだった刀佳が声を掛けてきた。

「ところで藤魅」

「何だ？」

左に視線を向けると、然程食事の進んでいない刀佳が真面目な顔をして、左手に持つ箸を不器用に動かして見せた。……………既

「実は、私は本来右利きでな」

しかし、今の刀佳の右腕は嚴重に包帯で巻かれており、左腕は軽く包帯が巻かれる程度の処置である。傍目でも、右手を使うのは困難そうであつた。

「そうか。ちなみに、左手を使うと右脳が活性化するそうだ。神経神話の創造的な右脳を信じている訳では無いが、これを期に両利きを」

「こうして已む無く左手を使つてはいるものの、やはり慣れなくてな……。このままでは折角の料理が冷めてしまう」

「……それで？」

詰んだな。もう色々。

「そこで、だ。もし藤魅が良ければ、私の食事を介助して欲しいのだが？」

…………… 本<sup>こ</sup>当<sup>う</sup>に、刀佳と居ると強制イベントしか起きないな……。

選択肢は何時になったら出て来るんだろうか？

「お膳をこちらに向ける。箸も貸せ」

身体を左90度回転させ、自分のお膳を刀佳のお膳に隣接させる。

そして右手に自分の箸を、左手に刀佳の箸を持ち、食事を再々開する。

「……………如何した？ 食わないのか？」

左手の箸で挟んだオカズを刀佳の口元へと運びつつ、右手の箸を駆使し、自分のお膳に乗っている料理を次々と食べていく。

「いや、あまりにも器用なので…。少々驚いていた」  
「それ程でもない」

擬似並列思考による介助と食事の同時作業など、政務と戦後処理を同時にこなした過去と比べれば、雑作も無い事である。

「では、気を取り直して…」

刀佳が口を開き、口内を外気へと晒す。整った白い歯と、鬼灯の様な赤い舌が唾液でてらてらと濡れており、とても扇情的な光景

とは少しも思えない事に、安堵する。何故なら、三大欲求の1つである性欲を理性が制し切っているという事は、自らを律し切れているという事実には他ならないからだ。

決して、禁欲主義者でも完璧主義者でもないが、異性からの誠実さに対して、下心を秘めた誠実さを返すというのも失礼なのでは？

と考え、様々な精神修行に明け暮れた結果、今の様な極致に至った訳である。尤もそのお陰で、『朴念仁』や『唐変木』といった、有り難くない称号を頂く様になってしまったが…。

「中に入れるぞ?」

「ん……」

こうして、意中の相手や恋人に料理を食べさせる定番イベント『はい、あゝん』なるモノを、羞恥心や邪念を交える事無く、衆目の中で淡々と済ませるのであった。

## 第11話（後書き）

思考加速やら身体能力活性化。後者はよく見かけても、前者は少ないんじゃないでしょうか？ ちなみに、本編中に出て来たパラドックスですが、『ゼノンの矢』という名前ではなく、『ゼノンのパラドックス』の1つである、飛んでいる矢に関するパラドックスに名前を付けたただけですので、正式名称ではありません。

なお、活動報告にて報告が御座いますので、一度目を通しておいして下さい。次回の投稿日は3月くらいです。しばらくは月一投稿の予定。

オーバー！。

【短章】 第2話（前書き）

予定日より3日程過ぎたけど、その分完成度は高い。……と思います  
たい作者です。何だかんだで遅れましたが投稿します。ちなみに、  
多分ホワイトデーのは書きませんので、期待しないで下さい。

では、以下の本文をどうぞ。

## 【短章】 第2話

転生者の彼であつても、共感出来ない物事は多々有る。例えばそれが宗教であつたり、記念日であつたり、風習であつたりする。彼にとつて、宗教とは心の支え、記念日とは口実、風習とは過去の情性に過ぎず、それらに一応の理解は示すものの、やはり共感し切れないのである。特に、宗教的な記念日が、風習として続いている場合は。

バレンタインデー

「2月14日か…。最早、名ばかり記念日を通り越して祭日だな」  
「良い事じゃないか。特需が何であれ、経済的には好ましい現象だろう?」

「それは認めるが、チョコだけが特需というのみな…。諸外国ではカードや花束、ケーキやクッキーも対象なのだが……」

「つまり、君はチョコ以外も貰いたいと……。全く、贅沢な悩みだね?」

〃

## 【短章】 第2話：奇襲<sup>のち</sup>後、奇襲

バレンタインデー

この世界における2月14日は、意中の異性や親しい人にチョコを贈る日でもあり、愛を告白する縁結びの日ともされていた。つまり、男女問わず、告白率が異様に高い日でもあった。

「疲れた……。こんな時にこそ糖分だな」

数々の呼び出し・待ち伏せ告白を話術により回避しつつ、3桁近くの貰い物のチョコと共に帰宅した転生者は、チョコを効率良く消費する為、早速大量のチョコを湯煎で溶かし始めた。所謂、チーズフォンデュならぬ、チョコフォンデュである。

「おや、良い匂い……。帰っていたのかい弟くん？」

熱せられたチョコが放つ甘い匂いに誘われたのか、姉貴が部屋から出て来ていた。つくづく、本能に忠実な人だと思う。

「先程な。姉貴も食べるか？」

ちなみに、互いに弟・姉と言ってはいるが、弟分・姉分として気軽に言い合っているだけで、本当の姉弟ではない。むしろ、姉貴の方が年齢的に若いのだが、大人っぽい容姿と言動の為、姉貴と呼ばせて貰っている。それにしても何故、近親関係に無い異性が同じ屋根の下に居るのかと言うと、それは互いの関係に理由があった。

自分は姉貴の欲求を満たす代わりに、姉貴に要望を通して貰う。そして姉貴は自分の要望を通す代わりに、自分に欲求を満たして貰う。そんな変わった関係が続けるには、同居していた方が何かと都

合が良いのである。特に、秘匿性・内密性という点においては。

「ふむ、戦利品のチョコを湯煎……。さしずめ、チョコフォンデュと言ったところかな？」

「正解だ。という訳で、果物やパンを準備して欲しいのだが？」

「了解。任された」

それから淀みなく準備が終わり、鍋を机の卓上電磁調理器に移して温度設定をした後、2人で鍋を囲み、食べ始めた。

「それにしても、慕<sup>した</sup>われているねえ弟くんは。別に、羨ましくはないけれど」

未開封のチョコの山を見遣りつつ、雑穀バーをチョコの海に浸してはちろちろと舐る姉貴。相変わらず、行儀を気にしない人である。

「そう言う姉貴も、毎年幾つか貰っているようだが？」

「残念ながら、それは全部本命のチョコだね。つまり未だに、義理チョコなる親愛・友愛のチョコを貰った覚えが無いのだよ。全く、鬼才変人たる私の本質を見ずして、外見で寄って来るとは何事かね？」

と若干怒り気味で、チョコと唾液でふやけた雑穀バーを咀<sup>そし</sup>く

嚼し終わると、今度は一本丸ごと串に刺したバナナをチョコの海へと沈めては、普通に食べていた。流石に姉貴でも、バナナに付いたチョコは舐めないようだ。

「時に弟くん。巷では、『チョコうどん』なる風変わりな食べ物エキセントリックが流行っているそうだが、美味しいのだろうか？」

『チョコうどん』。糖分＋炭水化物の糖尿病まっしぐらな料理である。常人にとっては、あらゆる料理にマヨネーズを掛け、マヨネーズ万能説を掲げて止まないマヨネーズ信者こと、『マヨラー』の存在くらいに理解し難い料理がただろう。

「……………御飯に砂糖を振り掛ける甘味至上主義者なら、おそらく美味しいと感じるはずだ」

「なるほど、理解した。つまるところ、味覚異常者に限るという訳だね？」

「まあ、そう言う事だ」

なお、姉貴が言う味覚異常者とは、酒を飲む人、ブラックコーヒーを飲む人、梅干を食べる人、カレーの辛口を食べる人、山葵を食べる人などを指す。これらの事から分かる様に、姉貴は子供舌である。しかしかと言って、極端な子供舌でもない。砂糖がじやりじやりする程入っているアメリカ風ケーキが、一口目でゴミ箱送りになったのが良い例だ。

「ああ、満たされた。偶には、甘味尽くしも悪くはない」

姉貴はそう言いつつ、チョコでべとべとになった口周りを一舐めし、出来なかった分はティッシュで拭き取り、奇麗にした。本当に、精神年齢が残念な人だと思う。

「ところで弟くん。今日はチョコ以外に何を貰ったかね？」

「メールアドレス及び電話番号。それと、ファーストキスを少々」

そう告げると、姉貴はパンツと手を叩き、非常に良い笑顔を浮かべた。

「それは重畳<sup>ちゅうじょう</sup>。重複しなくて良かった良かった」

そして何故か、床下に有る貯蔵庫から花束を取り出し、自分に手渡して来た。確かに、そこは隠し場所としては絶好の場所だが、取り出す場所としては微妙過ぎる……。

「これは……、白薔薇と木香薔薇か？ 確か花言葉は」

「白薔薇は『尊敬』、『私は貴方に相応しい』。そして木香薔薇は『純潔』と『初恋』だ。受け取ってくれて嬉しいよ弟くん」

「……………どういたしまして」

それにしても、一体何処で恋人フラグを立てたのやら……。まあ、姉貴程の人に告白されるのも満更では無いし、此処は男冥利に尽き  
みょうりると思っただ方が良いのかもしれない。

「さてと……」

そう言つと、姉貴はおもむろに立ち上がり、服を脱ぎ始めた。白衣、ロングスカート、ハイソックスと、次々と脱ぎ捨てていく。

「……………待て。何故、服を脱ぐ？」

「なに、弟くんは『純潔』を奉げようと思つてね。より具体的に言い表すのなら、『快樂の為の性交』と言つたところか？」

「急展開だな、おい」

『据え膳食わねば男の恥』と言つたのは、一体何処の何奴だつた  
どいつだろうか？ 珍しく赤面した下着姿の姉貴を抱き寄せつつ、ふとそう思つのであつた。

【短章】 第2話（後書き）

「この後、転生者が美味しく頂きましたwww」というオチ。R1  
8なシーンなんて書けないし出せない。ある意味、官能小説を書く  
のも才能なんでしょうね。グロなら幾らでも書けるんですが…。次  
回の投稿日は3月あたり。以前書いた様に、月一更新の予定です。

オーバー！。

## とある幻想の夢現世界（前書き）

にじファン行け。と言われそうですが、時間が無かったのと連載予定では無い事から、実験作として置いておきます。本当は転生者（以下略）の本編を上げたかったのですが、推敲の時間が無かった為、何故か此処4日間くらいで書いていた『とある魔術の禁書目録』の二次創作を上げておきます。

まあ、時間が無いのは大方コレの所為せいなのですが…。なお、作者はまた2〜3ヶ月程執筆活動がままなりませんので、ご了承下さいませ。

## とある幻想の夢現世界

「もしも……」や「……だったら」とか「……すれば」など、人は過去や現在、未来において分岐点を探そうとする生物である。しかも、自身に無関係な事においては、最善・最悪を問わず分岐点を探そうとする。しかしこの物語は、最善でも最悪でもない。作者が見出した分岐点から派生した都合の良い物語に過ぎず、従って原作から乖離する事は至極当然の事であり、最早、名や設定だけを借りた別物となるだろう。

しかし、しかし二次創作とは、一次を元とする二次の創作である。独創性の無い二次創作はただの再構成に過ぎず、元となる『とある魔術の禁書目録』の海賊版でしかない。かと言って、名だけを借りた独創性に溢れた二次創作は、原作ファンにとってはかなり受け入れ難い物である。例えばそう、『三国志』から派生した『三国志演義』の様に。

従ってこの作品は、巷に溢れている「原作沿いだが随所に独創性が見られる」様なある意味平凡な作品の1つとなるだろう。だが、敢えて問いたい。「奇をてらう必要はあるのか？」と。

設定や発想が斬新だ。なるほど、面白いかもしれない。

オリキャラが魅力的だ。なるほど、面白いかもしれない。

能力や魔術がチートだ。なるほど、面白いかもしれない。

ある意味、ご都合主義だ。なるほど、面白いかもしれない。

しかし、以上の事は原作で遺憾無く発揮されており、『マヴラブ』や『ネギま!』、『魔法少女リリカルなのは』や『真・恋姫†夢想』といったアンチしやすい作品でもなく、オリ主人公を原作介入させても似た様な結果に落ち着くといった、独創性が発揮し辛い一次創作でもある。

「オリ主人公と原作組を絡ませたい」。その気持ちは分かる。が、居ても居なくても事の結果が似たり寄ったりであったり、展開や状況が改善ないし改悪されたりする程度なら、それは再構成物の延長線上にある二次創作であり、『STEINS;GATE（シュタインズ・ゲート）』風に言うのなら、それは「アトラクタフィールド内における世界線の収束でしかない」と作者は思っているのである。

例えば、ある人の死期が決まっている場合、多少の時間的ズレはあるもののその人は他殺死・事故死を問わずに死ぬ。これと似た様な事が、二次創作でも起こっている。例えば、『虚空爆破事件』<sup>グラビトン</sup>が起こる。例えば、『幻想御手事件』<sup>レベルアップ</sup>が起こる。例えば、『樹形図の設計者』<sup>アケラム</sup>が破壊される。例えば、『御使落し』<sup>エンゼルフォール</sup>が起こる等々。過程は違えど結果がほぼ同じであるなら、それは世界線が収束していると言えるだろう。

ならば、如何にして収束を回避し、独創性を発揮するのか？ 答えは単純にして明快だ。分岐以降、収束不可能な程の分岐点において、別のルートへと分岐すれば良いのである。例えば、インデックスが出血多量で死ぬ。例えば、『一方通行』<sup>アクセラレータ</sup>が御坂クローンを殺し尽くす。例えば、風斬氷華が『幻想殺し』<sup>かきりひょうか</sup>で消される等、収束不可能な程に分岐させてしまえば、後は作者の独創性次第となるのである。

とは言え、上記で述べた様な暗い展開は作者の望むところではな

く、この二次創作物の構想からして、逆方向の明るい展開・状況が多くなる事をこ了承頂きたい。尤も、駄文で遅筆で、プロットもまともに書かない作者の当作品が読まれるか如何か、気に入られるか如何かは、甚だ疑問だが……。まあ、「目指せ完結！！」といった低い目標を持つて頑張るので、適当に生温かい目で見守つて下さいませ。

#### 『Q & A 方式の作品紹介』

Q：主人公は？ A：主観による。 が、基本は我らが上条さん。

Q：性別変更は？ A：誰得過ぎる。 すずしな ゆりこ 鈴科百合子？ 誰それ？

Q：性格改変は？ A：有り得る。ちなみにインデックスさんは確定済み。

Q：独自路線？ A：当然至極。

Q：独自設定・解釈は？ A：用意している。

Q：オリキャラは？ A：多分出ない。もし出てもサブかモブ程度かと。

Q：ジャンルは？ A：科学と魔術が交差する“学園系日常物”。  
これ重要。

Q：戦闘シーンは？ A：「見せられないよ！」的なシーンは少ないとだけ明言しておく。

Q：恋愛は？ A：歳相応。カップリングは気分次第という事で…。

Q：最後に一言。 A：『インデックス』ファンの方はブラウザバツクの用意を。以上。

↓↓以下本編

7月20日。夏休み初日であり、学生ならば遊ぶか宿題を終わらせようと努力する最初の日でもあるが、彼『上条 当麻』にとつてその日は補習授業の初日であり、魔術という科学と相成す非現実側の人間と遭遇した不幸(?)な日でもあった。それも、自身が住む学生寮の7階ベランダというピンポイントかつ妙な場所です。

「えっと……、どちら様でせう？」

ベランダの欄干に、干される様に引つ掛かっている少女は銀髪碧眼で、見慣れない金系の刺繍がされた白い修道服に、同じ様な意匠のフードを被っていて、肌は白くて顔は可愛くて、まるでお人形さんかどつかのお姫様の様で と、冷静に観察している様で混乱している上条の言葉を無視するかの様に、目の前の少女から空腹を主張する音が聞えて来た。

そして数秒の沈黙が流れた後、少女が小さな口を開き、響く様な可愛らしい声音で、上条に空腹を訴えかけるのであった。

「おなか、へった……」

「は……………」

「む、聞えなかった？ お、な、か、へつ、た、の」

「あー……、英語でおk」

「Well... I'm very hungry」

完璧な発音だった。……まあ、そんなことより閑話休題。

「悪い、ちょっと混乱していた。で、改めて聞くが、どちら様でしょうか？」

先程のやり取りで少し冷静さを取り戻した上条は状況を把握する為、謎の少女と会話を試みる事にした。「なーんか、また不幸事にでも巻き込まれるんだろうなー……」と半ば投げ槍気味に。

「そんな事より、まず食べ物を恵んでくれると嬉しいかも」

「食べ物ねえ………」

如何やら、この謎の少女はかなり空腹らしい。会話を成立させたければ何か食わせと……。しかし真に残念な事に、昨夜雷でも落ちたらしく家電製品のほとんどがパーになった為、冷蔵庫の中身も当然パー。しかも唯一の非常食であったカップヤキソバは、湯を切る際に誤って流し台に麺をぶちまけてしまい、敢え無くゴミ箱へ。よつて、今すぐに食べれそうな物など当然残っている筈もなく

「あつ、あの机の上に乗っているパン。あれで良いから食べさせて」  
「……………マジか？」

謎の少女が言ったパン。それは、パーになった冷蔵庫から取り出したヤキソバパンであった。朝方、一縷の希望を賭けて冷蔵庫から取り出してみたものの、例に漏れずパーになっており、ラップ越しでも酸っぱい臭いがする非常に拙いパンだった為、今の今まで机上

に放置していたのであった。

「あの時、ゴミ箱に捨てていれば見つかる事も無かっただろうに……」と今更後悔したところで少女の空腹が収まる筈もなく、言われるがままヤキソバパンを手にし、少女の前へと戻った。

「ほらよ。味は保証しないぞ？」

色んな意味で。と断りつつ、少女の眼前へとヤキソバパンを突き出す。これにより、酸っぱい臭いに気付いて「やっぱり要らない」って言わねーかなと上条は僅かばかり期待するも、飢えた少女にそれを期待するのは、土台無理な話であった。

「ありがとうございます。そしていただきます」

挨拶もそこそこに、少女はパンに噛り付いた。それもラップ付きで。ついでに言うと、上条の右手付きで。

…

……

…………

従来の世界線 流れなら、此処で上条は悲鳴を上げ、己の不幸を呪うだけで終わりなのだが、幸か不幸か、世界はこの状況を分岐点とし、全く新しい道へと分岐してしまった。私達のよく知る原作『とある魔術の禁書目録』から大きく乖離・逸脱し、収束する事のない未知の世界へと分岐したのである。

尤も、これ以前にも分岐点があったりしたのだが、劇的に乖離・逸脱した分岐点は観測至上これが初めてであり、最早、比較観測も

意味を成さない程に分岐してしまった。これから先、彼らにどんな展開・状況が訪れるのかは全くもって不明だが、もし気になるのなら、この新たな派生先を見守って行くと良いだろう。

………

……

…

噛まれた。と思った瞬間、上条の右手に痛みが走る。痛い。マジ痛い。まさか右手ごとラップごと食べるとか予想外にも程がある。つか痛い。マジで痛い。と悶絶しつつ思考し、そして絶叫する。

「<sup>いて</sup>痛えええええー！！！！！」  
「ふあ、ふおめえん」

しかし、それでも咀嚼<sup>そしゃく</sup>を続ける少女に業を煮やした、もとい痛みに耐えかねた上条は、如何にか外そうともがいていると、中指が少女の喉奥へと触れた。  
瞬間、

バギャッ

と人体から出る筈のない音と共に、勢いよく後ろへと弾き飛ばされた。如何にか受身を取ったものの、したたか冷蔵庫に身体をぶつけて咽ていると、何時の間にか少女が室内へと入って来ていた。

「けほけほっ……………。おいお前、ちゃんと靴は脱いだんだろうな？」

「いいえ。ですが、そんな瑣末事より優先すべき確認事項があります」

先程までの可愛らしい声から一変し、全ての感情を排した様な無機質な声。その事にいぶかしみつつ顔を上げると、まるで別人かと思ふ程の無表情っぷりで、少女が幽鬼の如く佇んでいた。その瞳はもはや人間味を失い、カメラの様な機械的な冷たさしか感じ取れなかった。

「貴方、一体何をしましたか？」

翡翠の双眸が、床に座り込んだ上条を映し出す。

「は……？」

「貴方が『首輪』に触れた瞬間、『首輪』とリンク状態にあった『ヨハネのペン自動書記』はおるか、『偽りの聖女』<sup>ベルソナ・グラータ</sup>及び、最終保護機能『転星』まで完全破壊されました。もう一度問います。貴方、一体何をしましたか？」

「何って聞かれてもな………」

そう呟きつつ、上条は己の右手を見遣る。超能力が当たり前の様に存在するこの学園都市において、上条の能力はかなり異色だ。炎を生み出したり、風や水といった物を操ったり、透視や読心、空間転移といった超能力者っぽい能力とは違い、『異能を打ち消す能力』という能力らしく、対象が異能の力によるモノであり、かつ触れられるのなら、程度を問わず打ち消せるのである。

例えば、核融合<sup>フュージョン</sup>し尽くしそうな火炎の塊だろうが、戦略級の極太レーザー<sup>レーザー</sup>だろうが、触れれば打ち消せるのである。

目の前の少女が言った「破壊」という言葉を信じるのならば、自分は少女の異能で出来た何かを触り、打ち消してしまったのだろう。しかし、『首輪』などといった異能なんて聞いた事も無ければ見た

事も無いし、そもそもこの少女が学園の関係者が如何かもすんごく怪しい。

「……一応、確認しておくけどさ。お前、ＩＤカード持っているのか？」

「ＩＤカード。名前から察するに紙片状媒体の事なのでしょうが、私はそのＩＤカードなる物を所持しておりません。それよりも、先の質問の返答は如何に？」

小萌先生、頭痛が痛いのです……………。

「まあ、待て待て……。そもそも『首輪』とか何なんだよ？ 能力の隠喩とか、そんなもんなのか？」

「『首輪』とは、私の所有する１０万３千冊の魔道書を保護する為に取り付けられた魔術霊装 すなわち、安全装置を指します」

「『首輪』に１０万３千冊の魔道書に、魔術霊装に安全装置。……………それ何て二次元？」

つか１０万３千冊の魔道書とか、９０万６６６冊の幻書を保有する某ヒロインに到底及ばない件について。

「まさか、時間・金・知識を注ぎ込めば実現可能なのが魔術で、不可能なのが魔法だなんて言い出さないだろうな？」

「概ね、その解釈で合っています」

……………なあ、それ何て『型月』？ つかコイツ、電波なオタクさんなのだろうか？ とすると、この見慣れない修道服と言い、謎の登場の仕方と言い、何となく説明は付く。付くのだが……………。  
だとしたら、この態度の豹変っぷりは、如何説明付ければ良いのだろうか……………？

……ま、取り敢えずもう少し話してみるとしよう。

「ところで、さっきの質問の答えな。俺には『異能を打ち消す程度の能力』がある。以上、説明終わり」

「生粋の『魔術師殺し』ですか……。戦闘経験は？」

「猫男を相手に千日手なレベル　まあ、素人喧嘩ならまず負けないな」

「つまり、未経験なんですね？」

「てめーは高校生を相手に高望みし過ぎだ」

ていうか、ぶっちゃけあの猫男相当な実力者だぞ？　様々な武术を組み込んだあの自称・殺人拳は、相手を効率良く潰す事に特化している上、無駄に洗練された無駄のない無駄な動き　様は牽制（フエイント）なのだが、それがかなり巧い。多分、大抵の相手なら初見殺し（一方的にボコれるという意味合いで）出来る程に。

「それはともかく、私が貴方に求める役割は“矛盾”です。矛となりて魔術師を制圧し、盾となりて私への魔術攻撃を防ぐ。尤も、基本戦術的には貴方が盾で、私が矛を務めますが」

「え？　何この強制パーティー入り？　つか、お前戦えるの？　って言うか、そもそも何で上条さんも戦うのでせうか？」

まあ、これまでの設定（？）から察するに、こいつの所有する10万3千冊の魔道書を狙っているのだろうが……。……………何故、俺も？

「10万3千冊の魔道書の知識を元に、対象の魔術への特定魔術を組み合わせ無力化。その後、制圧。　といった流れが、私の基本戦術となります。故に、貴方は時間を稼ぐ事を念頭に、私への脅威

ローカルウェポン

を排除ないし制圧して頂きたい。なお、貴方が共に戦う理由ですが、私に付けられた『首輪』及び、その他の安全装置を無意図的にとは言え破壊した為、最早私は歩く戦略兵器、戦争の火種でしかありません」

「はあ……」

というか、「10万3千冊の魔道書の知識」とな。もしかしくても、自分は完全記憶能力者なのだと暗に示しているのだろうか？まあ、まだ電波容疑が完全に晴れていないので、判断は保留といったところだが。

「従って、貴方には破壊した責任があり、それに伴う諸問題を解決する義務が付随します。尤も、貴方が責任感の強い善人である事が大前提ですが」

納得しましたか？ と、先程から感情の籠もってない翡翠の瞳が俺に向けられる。つまり何だ。「自由を与えた責任を取って下さい」って解釈すれば良いのだろうか？

「……………何このクーデレモといツンドラ？」

永久凍土融解しろ。もといデレろ。折角の可愛い 今は“奇麗な”と言つべきか？ 顔が台無しになつてんぞ？

「ま、俺の力が何処まで通用するかは分からねーけどさ……。行けるのなら、一緒に地獄の底にまで付いてつてやるよ」

この時の台詞は、自分なりの軽口・冗談のつもりだったのだが……。

「その言葉、誓えますか？」

どうやら向こうは、それを本気と受け取ったらしい。今更、「前言撤回します」なんて言い出せる様な雰囲気でもないし、発言の自由に責任が付き纏うのは法律的にも明らかである。それに、『漢に二言は無い』という決まり文句が、此処日本にはある訳でして

「おう。何なら、指切りしても良いぜ？」

結局、この様に啖呵を切る事になったのであった。

ちなみに、指切りの歌詞の内容は結構エグく、「指切りげんまん。嘘吐いたら針千本吞ます。指切った」なのはご存知だろうが、“指切り”は遊女が意中の男性に思いを伝える為、小指を切り落として渡したという話が元になっており、“げんまん”はゲンコツ1万回など、約束を破る事を戒める内容となっている。

尤も、現代っ子が指切りの由来や、“げんまん”の部分を理解してまでやっているか如何かは疑問だが。

「では、小指を出して下さい」

「あれっ？ お前、指切り知ってんの？」

何時の間に、指切りは外人さんにまで知られる様なグローバルでメジャーなものになったのだろうか？ まあ、世界的に日本の戦略物資（オタク文化）が知られている訳だし、案外折り紙なんかと一緒に知られているのかもしれない。

「はい。知り合いの日本人から、古式縁のある約束方法だと習いました」

「へえ。じゃあ、歌は覚えているのか？」

「はい」

「だったら折角だし、合わせてやろうぜ？」

んで、互いの指を絡めて、お決まりの歌詞を歌うのであった。しかし、緊急事態でも事故でも戦闘中でもないのに、こうして女の子に触れるのは初めての事かもしれないな……。とか思っている内に歌は終わり、あっさりと指を切られた。名残惜しいと言うか何と言うか……。これが思春期か？

「ところで今更な話なだけどさ。何で家のベランダに引っ掛かっていた訳？」

しかも、7階という落ちれば即死か重体間違い無しの高さのベランダに。

「追手から逃げる途中で屋上伝いに飛び移ろうとしたところ、背後から撃たれてバランスを崩し、落下。そして偶々ベランダへと引っ掛かり、今に至ります」

「……………あのさ、色々とツツコミたいところがある訳なんだが、取り敢えず1つだけ聞かせてくれ。お前、今すぐ逃げなくても良いのか？」

こうして話している間に包囲されていました。なーんて、アホ過ぎるぞ？

「心配には及びません。『首輪』が外れ、魔力が使える今、存在の偽装は至極容易であり、かつ反撃も以下同様。従って、こちらが逃げる道理など一切ありません」

訳「ここから先は、ずっと私のターン……」。敵対者の皆様、こ

愁傷様です。

「なるほどない……。それで、お前はこれから如何するつもりなんだ？」

一応、「地獄の底まで付いてつてやんよ（キリッ）」と宣言したからには、ある程度行動を合わせなければならない。と思った為、さり気なく訊ねてみる。尤も、学業を疎かにしない程度にしか合わせないつもりだが。

「当面は体力回復に努め、英気を養う予定です」

そこで冒頭の「おなかへった」へと回帰するんですね？ 分かります。

「んじゃ、ちゃんとした朝飯でも食いにいきますか？」

「お誘いは大変嬉しいのですが、私は日本通貨を持ち合わせていません。故に」

「そんならい奢ってやるから気にすんなって。ほら、早く行こうぜ？」

「……ありがとうございます」

時間帯と費用の都合上、マックで朝マックという“ちゃんと”か如何か怪しい朝飯になりそうだが、ま、そこはご愛嬌（？）って事で。

おまけ

「あのなあ……。いくらクーポンとサービスで半額とはいえ、5種類1セットずつの5セットって、上条さん的には結構手痛い出費なのですか？」

「そう言えばあのヤキソバパン。少し酸っぱかったですね……」

「……………どうぞ召し上がれ」

「いただきます」

## とある幻想の夢現世界（後書き）

THE ネタ放題。何時もの事ですので、気にしないで下さいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1814n/>

---

転生者の生き様と在り方

2011年11月15日11時05分発行